

附地村に到着八時過也。福地村より附地村迄四里之由に候得共至る遠し且山路計也。

○六日晴 四時頃より半天も、引にる支配向並同様之服に相成候る附地村出立いたす途中之義は木曾奉行附山守と申もの案内いたす尤木曾奉行案内いたし可申處先達る山岡清兵衛一同入山いたし有之候に付る之旨斷有之候此所具足は脊負籠に入爲持長持其外とも附地村名主方の目錄書いたし相添預置途中猛獸用心之ため之由足輕鐵炮三人狩人三人附添有之狩人先立尤鐵炮切火繩也足輕も同斷途中に爲試玉込不申爲打候處聲に隨ひ打放候體馴たる物共と相見附地村より出之小路迄三里程と申候事に候得共悉高山深谷を上下いたし候義に付五六里も有之候歟と被存いて之小路途中に所々小休所補理有之一ヶ所は辨當所に可成之板小屋出來有之候同所に木曾奉行出迎いたし居候に付相應挨拶いたす夫より出之小路に參る途中之嶮岨言語同斷也小屋は八疊貳間壹間居間壹間は座敷之如き心得也中に土間有之下々之もの共同様之體に貳間有之次に貳間有之給仕之もの附置有之候尤下々之もの共は面々小屋有之木曾奉行下役支配向等夫々一同罷越山神之社有之候に付參懸拜禮いたす追る家來民藏麻上下にる名代として供もち神酒相供候事

○七日晴 五時より出之小路山の登る場所殊之外なる難所に中々以供立之沙汰は勿論之義帶刀にてはとて難罷上旨清兵衛申聞候に付改役一同申談小屋より羽織をも不着家來に帶を爲持尤家來は羽織無之脇差計也一同鍵を爲持不申尤某か八尺計之鍵爲持參り候に付右を供立之外爲持候案内として木曾奉行下役之もの罷出る木曾奉行は不快之由に斷有之候山中之嶮岨中々以難認取候八時頃曇候處雨天には途中甚以案事候旨案内之もの共申立候に付嶺通り之立木一通見守候る下山也。速見重太郎勘定奉行等參る。七時過御用狀到來いたす。越前守殿御沙汰之由材木直吟味いたし申間敷と之一條材木不及陸運候旨之返書尾州に早々材木可相廻旨之書狀同役一同



上金之進達并書狀。殿中之義凡之書付。支配向より之禮書宅狀。母上様新右衛門  
越前守殿御直書

善左衛門より  
と嘉十郎也壹封共

○八日雨 天氣合に付宅調。鯛助より贈物員數之義申聞る不承知之義等も有之候に付尙又清五郎欽之助呼寄委細等申談遣す。勘定奉行速見繁太郎呼寄材木人足持に不及候旨申達并取船之義并御材木早々相廻候様可取計旨申達す清五郎も罷出居候

○九日晴 五時より山之參る支配向其外共來る事例之通也

○十日晴 五時より山之參る。七日に受取候越前守殿之御狀返書認善左衛門之壹封をも添井上新右衛門方之向差出す内御用狀之段は口上相添平井甚九郎之相頼遣す

○十一日晴 五時より山之參る。上納金之義に付進達書并返書別番共壹封にいたし同役之書狀壹封にいたし鯛助之渡可申と遣す。尾州より鯨被賜之候

○十二日晴夜雨 五時より山之參る。内田鯛助來る明日尾州より御使可有之旨内々申聞る。支配向參ること例の如し

○十三日曇夜雨 五時より山之參る。尾州より御使可被下と之御事尤山小屋之義に付野服を以可罷出旨名護屋表より申越候旨をも鯛助迄爲心得申越す依之某は自紋之かたひら羽織袴に而小屋表屋根下うすへりしき置候場所之出迎いたす上座之相通し御受申上る山内居小屋之義諸事不自由にも可有之候に付被下物有之候旨勘定奉行速見繁太郎申聞目錄書相渡。反物拾反也。銀子其節名護屋表に而可相贈分とも追而御品は鯛助迄可引渡旨申聞る難有旨御受申上る是は江戸表之懸合濟之義有之候故也歸り候節小屋外うすへり敷有之候所迄相送る小屋内は玄關も坐敷も無之便所湯殿之參り候道少々の板式有之其所に口有之出入いたし候故送迎右之通相成候。木曾奉行日比野源八呼寄加子母之參候義申達す

○十四日雨 今日は場所道無之旨に而見分相延し吳候様申出有之に付不



出。佐藤清五郎取調其外之もの共にも申談候御用狀加書昨日清五郎持參今朝一覽之上了簡之程書取いたし達す返書之方は存寄無之旨申達す。清五郎取調差出候書取貳通速見繁太郎勘定奉行日比野源八外壹人木曾奉行の申達す。圖藏より問合之書面は返却

○十五日雨 天氣合に付山の不參候。御用狀之中清書出來取調よみ合之上鯛助の渡し清五郎の遣す。同役之御用狀來る。支配向出役四人出來候由也金銀具之御書付寫御用番來る。佐藤清五郎悴御勘定に被召出候御禮として同人麻上下に山小屋の參る

○十六日晴午後より曇 一兩日之雨に山橋落候に付山は不參候。市川丈助母上様田崎左衛門の書狀封之甚九郎方のためのみ遣す

○十七日晴八時より雨 五時過より山の參る。檜材丸太廻し之義に付取計方之義支配向并山岡清兵衛申聞候品も有之候間勘定奉行速見繁太郎の申談いたす

○十八日晴午後曇 御用狀等之調に付山は不參。速見繁太郎參り材木角取之書面差出す受取置清五郎の遣す。木を山中へ明日出立いたし候由を以尾州より重詰銀子十枚被賜之代金十五兩御使は速見繁太郎也品物は内田鯛助の渡し候由に同持參。清五郎其外山の残り候ものにも贈物有之候旨銘々申聞る。木曾材木奉行より津出日割之書付差出す日比野源八也受取置。下役之送物は拜受可然旨鯛助の申聞遣す。山圖白鳥之書付清五郎の返却。木曾奉行を以きりため并熊皮尾州より被賜之下役も同斷夫々差別有之いつれも拜受可然旨内田鯛助の申達す。江戸より當月之御用番書來る水野越前守大岡主膳正青山因幡守筒井紀伊守遠山左衛門尉增山河内守本多、守松平内匠頭明樂飛騨守水野舍人水野采女關保右衛門金

田靱負近藤宗右衛門河合内藏助立田岩太郎八地朝右衛門菅沼孫左衛門

○十九日雨 今日出立に三浦の罷越候積之處剛雨に樵路無覺束旨尾州御家來申立候に付延引也。支配向等參ること例之如し。西田圓藏より之書面清五郎持參取直等之義申達遣す

○廿日雨 山橋等崩歩行無覺束に付今日も出立延引也。下役等參ること例



之通也。中野又兵衛青山九八郎より之書狀磯野半左衛門より届来る。右之節同役より之書狀も来る。○西村貞太郎井上十左衛門御役御免小普請入差控小十人山口鐵五郎も同斷永見いせ守御役御免逼塞被 仰付候由右はいつれも甲州之騒立之節等閑之取計有之候によつて也其外右に付御暇等被 仰付候ものも有之候旨申来る

○廿一日雨 けふも天氣合に付出立延引支配向参ること例之如し

○廿二日曇時々微雨 四時頃山小屋出立に附地村に晝休いたし夫より加子母村に参る無間も附地に参る積御用長持は同村に殘置候廿三日曉より松火に三浦山に登山之積之處雷雨に付延引五時頃ははれたり。清五郎参る村上愛助下山いたし参り委細山中之義申聞候。夜に入御用狀到來宅狀も来る。懸り三人より五月十日附は書面難引返旨之返書也。五月十日附は宮引拂其外之返書土佐には被懸御手候由之義をも申來候。五月十三日附は幾三郎殿川々之御褒美其外御書附寫也 此書付寫は上納金等之事也 小普請方立合相成候旨

之御書付も来る。五月十三日幾三郎一名は拜領物之吹聴也。右之書面夫々愛助に渡す。御帳紙包宅より来る三十八兩米金半々也

○廿三日晴夕七時より雨 七ツ時より之支度に小郷に参りかしも村之内也 夫より三國

峠に上る所々歴覽いたす大材とみゆるものなし夫より飛驒信濃美濃の境等一覽いづれもみ 三國峠之絶てう仕來之由に付柱を立三浦山立木見分川

路三左衛門其下は佐藤清五郎其下は村上愛助天保九戌年五月廿四日とし置立歸る。三浦山委細は村上愛助を去る十八日より遣し置同人委細見置候に付同人より承り候計にて其間は峠其外峠筋之道々歴覽之序見渡也

○廿四日快晴 六半時加子母村出立いたし苗木町也前にも上地と記せしあり誤也 附地田瀬福地を經上地に至りて止宿中食は附地村也

○廿五日晴 苗木町六半時出立いたし夫より上地村に至り木曾川を渡中津川宿之外に繼立夫より落合宿に至り同所より十曲峠に上り十八町餘にして江戸之方に向ひ右之小路に至り又十八町に湯船澤村に至る今日



中津川之渡より山村甚兵衛支配地之由に同入より案内之家來差出所々に鍵をも爲持候家來三人出居候。佐藤清五郎井上富左右木曾奉行水谷惣八來る

○廿六日晴 六半時出立にて湯船澤山之參る谷々見分巡覽いたす。清五郎木曾奉行の送之義斷遣す木曾奉行は來る

○廿七日雨 六半時湯船澤村出立いたし馬籠に參る同所より妻籠に參り夫より蘭村之内廣瀬といふ山村に參り止宿いたす。妻子之辨當所に井上富左右とは相別れ同人はあてら山に遣す。

○廿八日 雨歇候に付五時過より蘭村之内ひろせの持山丸山に參り檜材歴覽之上旅宿にて晝飯給夫より又々蘭村持山南澤山に參る檜材歴覽之上歸宅也。歸宅後同役より之御用狀木曾方より届來る五月十五日附に同十四日刑部卿殿逝去に付公方様今日より大御所様定式之御忌服右大將様には定式之半減之御忌服爲受候事并普請は三日鳴物は七日停止之御書付并三

御所様共御機嫌能被爲入候間可心易旨之御書取共來る尤御機嫌伺之呈書は差上申間敷旨之伺濟に付不及其儀候事

○廿九日晴 六半時蘭村出立夫より妻籠に至りみとの宿に中食野尻宿に止宿。清五郎村上愛助來ること例の如し井上富左右は野尻宿之内あてら山に參り候由に暮時過來る明日同入尙見届之上見分之義可申間旨申立る聞置候事

○六月朔日朝雨終日也 木曾川渡越之事筏越如何と之事其上いまた御普請役之見越も有之に付野尻に滞留也。井上富左右計はあてら山に參り夕七時過歸宿也所々見分之始末委細申立る同人雨中出精之次第賞し遣しぬ濕拂之酒にふる雨にきそひのほかしけなけさはなしよつて唐筆或對遣之中々夕方村田幾三郎筆にかきもつくさしと包かみに記し其外感心之由なも記し遣し候。夕方村田幾三郎より之書狀來るいづれも内狀也其節新右衛門より之日記書狀共來る

○二日雨 清五郎其外下役御普請役參ること例之如し。天氣合に付如昨日



此圓藏は勘定奉行替り申之心得之旨申達置候

野尻に止宿也。西田圓藏呼寄候。勘定奉行書面不分明之旨并廻米及達候由

此一條は其外樽木割上に不及候旨之挨拶遣す。圓藏は勘定吟式居之外に差置内に佐藤清五郎侍坐以上之三ヶ條在之廻米早行之義は書取樽木は挨拶書遣之。十九日附之新右衛門 幾三郎 土屋鐵四郎 大炊頭様用人 日記右之通遣

之追。受取書來る。此反書きそ材木方吟味役野村忠左衛門の愛助より遣之受取書取之清五郎より伺之書面無存寄旨達之

○三日晝頃より快晴に成。木曾川渡越出來不申候に付滞留也。明後日ならては阿寺澤には參兼可申旨に付同所は跡廻しにいたし候積に。明後日麿香澤に參り候積先觸出之。清五郎并井上富左右參ること例之如し。村上愛助は今朝出立麿香澤に參る

○四日晴。六半時出立に。須原宿を經上松に至りて止宿。今日寢覺に。ひる辨當也。同所臨川寺におゐて尾州より蕎麥并御酒被下之。清五郎并井上富左右共同寺客間也。家來は門前之蕎麥屋に下宿にて同様被賜之候

○五日晴夕かたより雨。六半時前之支度に。上松小川入之内麿香澤に參

り所々巡覽いたす。村上愛助は先の川向山番村方に參り居に付見送之義斷遣す。同人に明日も見分之上熱川宿其外所々可見參旨申聞置。木曾奉行水谷惣八木曾材木吟味方野村忠左衛門并山村甚兵衛家來爲機嫌聞來ること例の如し

○六日朝曇晝後より快晴也。六半時上松の宿を出立山中の新茶屋小休に。尾州より當所の名物わらひもちを下部迄にも給ふ。夫より福島之驛に至り繼立之内本陣に。休居同所より美澤村に至り晝食いたし。夫よりはし戸のわたり澤戸峠を越みさわの渡をへて王瀧村にいたり止宿。清五郎は送り夜分之機嫌聞とも斷遣す。是は到來暮合頃井上富左右尾州之案内之ものは旅宿迄見送いたす。木曾奉行は斷候得共機嫌聞として來る

○七日晴。六半時出立にて王瀧村之山々所々巡覽いたし申候。木曾奉行等爲機嫌聞來ること例の如し

○八日晴。六半時早め王瀧村出立いたし黒澤村にて晝休いたし。夫より福



島驛に至り止宿

○九日晴 福島宿に逗留是は井上富左右瀧越よりいまた歸り不申候故ま  
ち居る也同人夜六時頃歸宅中暑に付明日否可申聞旨玄關迄申置立歸る村  
上愛助西野村より熱川の參るよしにて來る。大井帶刀より之返書來る暑中  
見舞一同也。清五郎來る

○十日晴 六半時福島驛出立いたし上松須原を經野尻宿に止宿也

○十一日曇午後より雨 あてら山見分として六半時前より罷越井上富藏  
は不快に付不參今日迄に尾州領内大材之場所見分相濟左之通也。三浦山

即三國峠に濃州加子母村地内也。湯船澤山濃州湯船村地内也。蘭山信州蘭村之内廣瀨近所也。麝香山信州上松宿之内小川山之内也。王

瀧村信州御嶽山麓村也。あてら山信州野尻山也。清五郎參ること例之如し。左之通昨日江戸

より來る御用狀又兵衛御褒美也。五郎左衛門より之自書信□之御書付之寫越前守

殿御渡田安中納言殿養方弟松平專之助殿御事一橋家御相續被仰出候旨之

御書付廿五日被仰出御書付は廿六日附也。

○十二日雨 六半時之出立にてみとの妻子をへて馬籠に止宿也

○十三日曉より強雨晝前後少雨夕風雨 馬籠の宿六半時前出立山口に  
晝餉給夫よりきそ川船渡いたし同所より坂下村川上村廣瀨村を經て附地  
村に止宿。川上村に小辨當給夫より川上山見分いたす今日清五郎旅宿は  
壹里を隔候に付夜罷越候義斷遣す。木曾方罷越候義例之通也。山村甚兵衛家  
來家老大目付と申候もの貳人附居爲暇乞面謁之義木曾奉行を以申聞るに  
付逢遣し甚兵衛之使者之挨拶家來附置候謝義宜相頼候旨申述遣す

○十四日晴 五時出立かしも村山小屋に參る下役内田鯛助は道半迄出迎  
いたす追々木曾方之小役人出迎いたす木曾奉行は壹人小屋に殘候もの比  
野源八野源小屋前へ袴羽織に参り出迎いたす相應挨拶いたし候。小屋に相歸り候  
家來民藏は定助山之參り候に付出迎として途中に參る木曾奉行并勘定吟  
味役等爲悦罷越勘定奉行は下役差越候。清五郎は小屋へ送りとして參る木  
曾方之小役人も同斷也



○十五日雨 調物等有之に付一同山には不參候。尾州より暑中御尋として縮十反交籠一籠并一同御家來世話に相成候御挨拶之由に御納戸より被下候由白ちりめん二疋被下之御使は勘定奉行速見繁太郎也。爲出迎小屋座敷之式居迄罷出る歸り之節右之座敷式居之外板式之邊貳間計贈之此式居之外迄平日は草履をはき候場所也御使之送迎有之に付右之場所板式有之候所は悉うすへりを敷候。右之通取計繁太郎は野袴羽織某は平袴羽織也。佐藤清五郎其外にも右同様之贈物有之候に付拜受いたし候様追。反物等持參り鯛助の申含遣す右之序繁太郎は代兩引替濟にいたし候旨之義并引替に相成候上は元來買受可申旨其外白鳥之材木役所は參り候義見合之義難取計旨返書却夫々申達し申候六月之御用番書來る左之通也。

松平和泉守永井肥前守松平伊賀守大樂安房守林肥後守堀田攝津守古河美濃守内藤隼人正深谷遠江守池田修理吉見義助美の部新左衛門山本雄三郎一色圭水五島三五郎大岩新大郎小川吉左衛門佐久間忠兵衛

○十六日朝曇晝後より雨夕雷雨甚し 今日昨日より之雨に路次惡敷

に付山には不參候。清五郎壹人來る印狀其外書付持參いつれも存寄無之旨申達候同人取調參り候達書勘定奉行速見繁太郎呼寄申達す。青山欽之助壹人參る繁太郎差出候書付其外共持參存寄無之旨申達す。鯛助來る夫々申談遣す

○十七日曇午後強雨忽晴 昨日之雨に山道損候由に見分之義延引申出に付不出。村上愛助木曾より歸り來り山々見分いたし候處大材無之旨申聞る書面にいたし明日申聞候様相達之。佐藤清五郎等來ること例の如し

○十八日快晴 正五時より山に參り坪義等見分いたしつれも伐木之積決之極印として欣之助清兵衛參る。白鳥役所より武藤庄三郎加藤與左衛門來る面謁是は材木之野帳白鳥にて取調不都合之義有之に付突合之ため也

○十九日晴 山には不參候。下役其外參ること例のことし

○廿日晴 山には不參候。下役參ること例之如し。欣之助壹人來候取計伺之



内急伺出之一覽之上清書いたし差出候様申聞遣す。速見繁太郎呼寄引替に相成候元木并榎木等品に寄買上に可相成否承り度旨申達之書面相渡す。百姓山之賣木之蘭四本來り木作之上廻し方之義清兵衛いたのみ遣す。鯛助よりきそかた之もの并白鳥は明日歸り之もの有之に付夫等可申談旨申聞候。材木取調之帳面引替度旨申聞候由鯛助申之引替候も宜候旨清五郎申達之尤貳ヶ所不宜ヶ所有之に付直し之積申達之。清五郎より木曾山見分書案來る。

○廿一日晴 今日も山には不參候。山岡清兵衛來る。清五郎欣之助は不來。鯛助來る。白鳥材木吟味役武藤雄三郎先祖元和之頃上地に住居いたし喜兵衛真田安房守參り住たることあるよし尋吳候様同人申聞候同人いとま乞として參る。今日出立也。加藤喜左衛門爲暇乞參る同人今日出立也。清五郎方は□□もの鯛助に爲持遣す。越前守殿の之木曾山之見分之申上也。平井甚九郎來る。  
○廿二日晴 今日も山には不參候。速見繁太郎參る。材木間知いたし方之書

面差出す追否申達旨申聞。三百本之外大材五十本伐木存寄無之旨之書面來る追否可申達旨申達す。内海に御材木難船いたし候旨之端書以上いつれも落手之旨申達鯛助呼寄渡遣す。いつれとも否可申達旨間知之方々書付は繁太郎に申聞置候間其旨申達す。三百本之義歸府之上取計候積。夜に入清五郎其外來ること例の如し。

○廿三日雨 御用狀之否相待山居也。夜六時頃同役定式之もの共御用狀到來。支配向懸替宅狀新右衛門より武通市川丈助より武通祖君より御歌御文通母上より等之事也。宅狀御文通也。善助差出候旨に難形之寫來る里より之文通支配向より等通。御用狀は清五郎に渡遣す。

○廿四日晴 今日御用狀取調いたす。宅狀日記母君祖母君の御受養父西田母君の新右衛門市川丈助等也。敬助病氣に付名古屋に引取候旨忠左衛門届來る。

○廿五日晴夕曇 今日晝頃御用狀尾州方に相渡。速水繁太郎罷越。越前守殿材木津出御急之御書付御渡有之候由に右之寫爲心得差越。津出之節大材流失留之義に付書付貳通。板子之義に付書付一通。遷等之義に付書付貳通差



出之尤遷等は全之内談也。いづれも取調可及挨拶旨申達之書面受取直に清五郎呼寄取調として下け遣す

○廿六日曇夜雨 清五郎欽之助は不參清兵衛鯛助來る。速見繁太郎呼寄板子引之書面下ケ札相達す御遷材之義はいづれとも進達いたし存寄無之旨申達す。心覺書壹通は返却外に心覺書は留置候様申に付受取置申候。白鳥材木中材三方四方無節之調之義申達す

○廿七日雨 御用狀到來清五郎持參也引拂等之義其外兩度之返書也。いづれも伺之通也御差圖之旨申來候清五郎は渡遣候夜に至り御用狀出來清五郎持參再應談判之上□清として遣す速見繁太郎呼寄夫々申達す

○廿八日雨 清五郎御用狀案持參尙相直し候上清書之義申談遣す其外口々書物持參存寄無之旨申達す。速見繁太郎爲御使來る出立之贈物被下之縮七反代金十五兩清五郎は同様之譯に而十兩欽之助清兵衛は時候尋として七兩宛被下之候由同人申聞候拜受之段承置候旨申達之下役はも同様之振合に而被

下之繁太郎は右之書物返却同人より御材木之義に付書付出之受取清五郎は相渡之

○廿九日雨朝晴 忽雨に成また晴る、又強雨等に而山路無覺束に付出立延引夫々の鯛助して申達す。勘定奉行速見繁太郎木曾奉行水谷惣八爲暇乞來る。木曾方小役人共大勢繼上下着用暇乞として參る圍爐裏の向の間は通し某はこちらの間は出夫々及挨拶けふは朝より羽織袴に着替居候

○晦日晴 五時山小屋出立之由觸置候に付拂曉よりも引半てんに相成六半時過追々佐藤清五郎其外一同も引半てんに來る無間も尾州下役之もの共も來る暇乞之もの共はも引之ま、及挨拶五時過に至り上山之通之供立に而山小屋引拂木曾奉行其外下役之もの共小屋門前は出いとま乞いたす勘定奉行其外勘定方之もの共は下役まで出不申候夫々相應及挨拶案内并先き立之もの共例之通也木曾方野村忠左衛門其外兩三人也夫より出之小路はつれ字犬かへり其外に而小休有之候事例之通也。改役並青山欽之助山岡清兵



衛御普請役近藤彌藏下役替村上愛助は一同犬かへり迄も引半見送候積  
 之處附地にも御用狀等其外清五郎に申談候義有之候由に一同附地村迄  
 送り來る近藤彌藏は 同所に御用狀差立相濟候を欣之助清兵衛愛助とも  
 山小屋に相歸り候。無間も日々野源本會奉八行也爲暇乞罷越面謁御料理有之候  
 旨を斷有之候難有候旨御受いたす御料理出る二汁五菜なるへし其外木曾  
 方下役之もの共參る右は家來應接也。夜に入御用狀到來某西丸御普請に付  
 上納金願之義左之通被 仰付之西丸御普請に付上納金仕度旨相願候設達御聽候處  
 奇特之事に被思召候段六月廿一日芙蓉之間御老中  
 御列座和泉守殿被御渡之同日越前守殿林阿彌衆西丸御普請に付願之通上納金被 仰付候  
 問觸面之方には別段上納に不及候事右之御書付仰渡之名代として罷出候同役根本友左  
 衛門の御渡承知  
 いたし候 返上右に付幾三郎善左衛門より壹封來る幾三郎之方は雜話にて  
 且先月二日之返事善左衛門は名代相勤候旨也

○七月朔日曉雨ひる後より快晴 六半時附地村出立いたし上野村にて辨  
 當給山口之渡りを越る馬込宿に止宿

昨日之落

○二日朝雨 四過より天氣也六半時前馬込宿出立いたしみの野宿に  
 晝辨當いたし須原宿に到止宿。途中に勘使買物遣木村清太郎京地の引越  
 候に面謁同人父太郎兵衛にも面謁途中不慮之事に付清太郎は駕籠より下  
 り居候得共某は駕を地へおろし駕中に断申面談いたす。昨夕馬籠旅宿に  
 井上富左右參る同人は瀧越に遣し歸り懸より疫邪に面謁不致今日快氣  
 に參り候間委細に承り候處大材無之旨申聞候爲見廻菓子一箱遣之候  
 ○三日朝くもりひるは晴也 六半時前須原宿出立いたし上松による休  
 いたし夫を福島宿に止宿也。山小屋より木曾奉行より青山欽之助の書面  
 差出候旨に取計方之義清五郎罷越申聞る幸ひ西田圓藏江戸に參り懸福  
 島を罷通に付同人引留清五郎より申談出立爲改候由に候得共不治定に付  
 明日拙者より可申談旨を以急便差立速見繁太郎并右圓藏共宮之越宿に差  
 留置

○四日朝曇ひる夕立少々冷氣也 挑灯引に福島之御關所に參り候處い



また開き不申候に付暫相待候處明き候に付供頭を以罷通候旨御關所の爲  
斷通る御關所に例之通駕戸引之建候後下番下坐いたすに付尙又戸引之  
夫より宮之越之參る繁太郎は一旦本陣に居候處本陣に清五郎鯛助も參る同所  
某參り候に付立拂候體也  
繁太郎呼寄木曾方書面之義申談いつれにも追而及沙汰候迄は山留に可  
相成積繁太郎より文通爲改候積申談承知に案文下役圓藏を以爲見候清  
五郎より申談爲相直候上にて同宿出立いたしなら井に晝休いたし夫よ  
り熱川宿に參り止宿也

○五日朝雨ひる後より天氣 相當之暑之由也六半時前熱川宿出立いたし  
洗馬に晝飯いたし夫より諏訪宿に止宿也今日熱川と本山之間立場にあ  
右立場より先に川有之尾州領之境に付暇乞いたし度旨山村甚兵衛先拂と  
して罷出候もの家來を以申聞候に付輿中より遠方大義其筋に宜と申聞遣  
す

○六日曇 暑氣相應之由也六時頃諏訪宿を松火に出立和田に晝飯給

夫より芦戸にいたり到宿同所は先年止宿之節宿助成金積立之事相願候宿  
也願之通被 仰付今以助成候由之謝義申之蕎麥貳袋差出之例之通申斷返  
却。和田宿西前に圍穀藏取立有之右は支配役所より委細可申立候得共先達  
あ桑田歳兵衛より達之ものも有之に付中山道之手はしめに取立候支配役  
所より申立も可有之義に付差越候は恐入候旨輿中より見捨吳候様申之  
に付一覽いたし置本陣に參り候上事柄は委細不存候得共公儀より諭之趣  
を以早速義倉取立候段宿役人共心附別段之事共大慶いたす何卒此節之氣  
張末永無異失様いたし度ものに候扱又義倉之類追而未年に至り豪農等之  
私欲より終に小前之爭論等引出村方手當之ものを以村方之害を引出候様  
之義無之様是は某より村方に咄也と旨下役鯛助を以宿方之もの共に  
申聞遣し候

○七日朝くもりひる後より天氣也 六半時早めに出立いたし岩村田宿に  
あひる飯給同所より爲念宅に書狀差出す明日之夜中かた迄に届候様申



談一里四十文餘之由也御治世之御餘澤かゝる事も出来難有事也夫より輕井澤宿にいたり止宿けふは七夕に名物之蕎麥打候由に差出度旨申聞候に付飯之替に爲差出候。七夕に候得共素道中之事故替たることは無之候。清五郎鯛助共來る

○八日曇夕かたより雨 六半時前輕井澤宿出立いたし松井田宿にひる飯給七ツ時過高崎宿に止宿也清五郎は建場の參る鯛助は例之手續也碓氷之御關所例之通之通り方也番人之下座等無之候御用長持の鍵差出様家來の申聞候由差出爲見候計に罷出る此事如何あるへき歟後日勘辨可有之事

○九日朝雨終日曇晚晴 六時前高崎宿出立いたし本庄宿に晝飯給熊谷宿に至り止宿也くらか野宿本陣小休之場所中野又兵衛之自書井上新右衛門之日記來るさしての義は無之候。火附盜賊改同心河合三郎兵衛高崎宿泊合之由に今朝出立前來る見通相願面謁いたす縫糸少々持參民藏を以

返却同人高崎之宿外れ迄送り申候輿中に挨拶いたす。夜四時村田幾三郎より内狀來る先觸到來いたし候得共いま引拂之御用狀參り不申候間明日晝迄に差出候様と之事に付早速鯛助呼寄清五郎とも申談宿役人相尋候處明日九ツ時頃に無之候は幾三郎宅に難罷出旨に付夫に間は間に合不申殊に御用狀は尾州に差遣置九日には相届候積に止といたし申候

○十日曇 七ツ時過熊谷宿出立いたし夫より鴻巢に晝休いたし七時頃浦和宿に到着也吉田□五郎に鴻巢宿に面會いたす作方之義相尋其上夫々申談いたす鴻巢宿勝願寺より使僧差出し茶并のり贈之

○十一日晴 六半時浦和宿出立いたし夫より五時過板橋宿に參る出迎之もの輕き身分之もの共は百疋宛遣す其外之もの共一同は晝飯差出す存寄有之酒は會而不出夫より巢かも通水戸前に懸り歸宅に宅に待受之面々は手輕酒肴等差出す懸り御勘定奉行兩人に着之使者差出同役衆連名之手紙宮崎五郎左衛門殿に差出す

○十二日曇 六半時出宅いたし掃部頭殿其外御用取次衆御老若に着之廻



勤并上納金願之通被 仰付難有旨之御禮をも申上る尤五半時頃登城之心  
得に付廻勤半に御懸越前守殿の参り公用人呼出着之義并上納金御禮申  
上尙又御渡之御朱印返上可致於御殿返上いたし可申哉之段相伺候處於御  
殿御受取可被成旨に付則登城いたし追々御勘定所之面々の挨拶いたし支  
配向御朱印一同相改候而某之御朱印共袋より出し箱に入御登城懸持出越  
前守殿の御直返上御證文は某并支配向之分共五郎左衛門より新阿彌を以  
返上御廻り之節於新部屋御逢越前守殿の委細之始末具に申上候等繪圖畫  
卷物其外手本等木葉等都一同一壺袋にいたし上る御逢濟之節御斷出る位  
也。贈物之書付幾三郎并内藤隼人正にも爲見候上に越前守殿の御直上る。

### 島根のすさみ

旅中の日記を審に記し母上の奉り候數々其まゝに母上の藏置玉ひしを  
あつめて物語のたねともなれかすと專に佐渡のこと記せしかは島根の  
すさみと題して一篇の書となせし也

天保十一年

○六月八日 佐渡奉行の命被り七月十一日彼國へまかるとして板橋の驛迄  
送別として参つとひしはらから友とちに酒給うへさせなとして袂をわか  
ちける其夜は上尾宿にいたりて止宿○はしめ某評定所留役たりし時江州  
へ参り家になき葵章の時服賜りて彼國の参る頃も此板橋宿にてひるのか  
れいものし送別の人に酒給うへさせし時難有 君のめくみと畏かりき其



後吟味役にて木曾山に参り歸るさも此板橋の驛にてかの留役たりし時に  
くらふれは又一しほの美目に覺たり然るにこたひの旅はたて道具二本鍵  
にて長刀鐵砲をも爲持諸侯にもかはらざる供立にて儉素にはせしかとお  
のつからなる行装おこかましき様中々前に比すへくも候はす實に難有事  
ならずやおもひて

かしこしな身たけにあまる惠そと旅の衣のたもと露けき

友とちにうれしくこそは別れけり君の惠の程をしらせて

けふは曉より雨降て家を出六半時前なるへし板橋の宿までは微雨に候ひしか彼宿  
にて晝餉ものする頃より戸田の渡を越る頃までは雨殊に甚敷雷鳴の數な  
りしか上尾の宿に参りし頃は雨止たり暮頃に至りて地震し六半時前には  
空殊にはれて月さへ候ひし○桑原雄藏殿亡妻也の送別として参りしか某か  
板橋を立出し跡也とて跡を追ひて上尾の宿迄参りしかはともに飯給て今  
宵は此宿にと申せしに彼の僕は足いたみて次の宿にとゝめ置たりとてい

なみぬ老たる人の十里のみちを歩み又二里餘歸りなむは無覺東よつて宿  
へ命して肩輿もてをくり候ひぬ此人某の旅宿を出し頃は誰をかれにそあ  
りける○今日板橋へ送りの面々二百餘人と承る上尾へ参りしは七半時位  
なるへし○佐渡奉行被 仰付候を三十二日にて出立其内に例もなきこと  
に而夫々密に執政の衆中を仰らるゝ旨もあり其宅の混雜かきりなし不眠  
にひとしき事もあればけふ肩輿にのりしに主人も從者も只眠りに眠りて  
みちの程覺さる事も多かりよつてこよひは皆く五時頃には眠につかし  
めける○夕かた七過計よほどの地震也

○十二日 時々雨にて晴また曇也 けふ上尾をたちて本庄の驛に至る十  
三里餘にて其外に 御朱印地又は穢多村もありとて從者の勞甚し殊に時  
々の白雨にて夜六半時頃に本庄の驛につきぬ其頃は雨甚しく候以前の旅  
と違ひ小休は建場てふ所はさら也宿々こと故煩しく候され共夫故從者共  
のつかれは少し○去々年木曾へ参りし時はいとゝ家のみおもひて煩かり



しかこたひはさまてにあらさりけりそはこゝろかゝりのなき故なるへし  
別れ路は同じなからもちねのいたつきなきそうれしかりける  
きのふよりけふはひなふり彌まして遠さかり行都しるかな  
聞まほし宿のあさちふ初秋に露もことしは置まさるやと  
見わたせはみとり浪たつ千町田の出しほに秋の姿をそしる  
別れ路の袂の露もほさぬ間になとこゝろなく村雨やふる  
急きなはかくはぬれしを旅衣遠きよみちに白雨そふる  
骨のみはぬれさりしなと白雨に賤かかことをきくもうかりき  
天津日の入ても君の光にて夜みちにきほふ燈の數  
夜に入しに目はやき迄に燈かゝけもちて行様いと嚴なることにそよつて  
かくは詠せし也  
熊谷の驛に去々年宿りしも七月也しかけふ又同じ宿に休て庭を松をみし  
に覺ありければ

庭の松しるやしらしやいさみぬるをちの司の旅の姿を

籠原の建場に而從者の物語を聞にこゝの午房の味ことによしといふ故障  
子の破よりうかゝひみしに白き飯にそへて物する様いかにも味あるかこ  
とくにみゆよつて密に申して某か如くにはせて一椀をとりよせものせし  
にいかにも味あり飯二椀をものしぬこのことのならましかはけふは飢  
可申によき序にそありけるされと又一笑の事也こゝにて梅ひしほのうち  
にはしかみを薄くきりて加たり甚よし作りて母上に奉るへし紫蘇の實を  
も少々加へたと覺ゆる也

○十三日 強雨 六半時本庄宿をたちて新岸村の船渡を渡るこゝは神名  
川利根川落合の場所也きのふよりけさの強雨に而水かさ俄にまさり今に  
もとまるへき勢おそろしき事也某か船は高せといふもの也船人十人計に  
而棹もてをしたりしか中流にていかりなと投入たるさまことゝし漸わ  
たりこへて玉村宿にいたる其みちにて新岸村名主九右衛門宅に而小休せ



し頃より又一入の強雨に往來の水脛を没する位也四半時計に玉村宿本陣政之進方にあひるかれい給うへ漸飯計はかなり也江戸の梅干を用ゆ夫が萩原村といふ方に向ひ参りしに雨は彌増たる事にあかの玉村宿十町計参りしに左には二間計の堀右には二三尺計の溝あり其うちに漸歩行へき程のみちありしを左右共に水溢れていつれを道と定かねたりよつて杖拂のものに案内させてかの繩手道十町計参りしに吉田重助先よりはしり來り俄に堀水まし道を破り往來へ水たゝへ人馬怪我難計候まゝはや御引かへし候へし乗馬をも牽たりしか渡りかねたる故かへり來るよしを申しぬさらは畑の中を押通れと申せしに畑のうちも土うみて脛を没し歩行ならず中々多人數の往來なるへからさるよしを申しぬよつて案内のものに聞しにこゝは利根川へりをたとり行也こゝは越ゆとも先にもかゝる所あるへし獨行もいたし候はゝ知らす馬の道はあるへからすと申すよつて家來共もうちよせて強雨のうちに立なから議せしにもとのみちへ歸るの外あるへからすとの事故

早かへし候へと申せしに左右の堀溝にて上下百人計のものいかむともすへからすされ共某か肩輿は水深き所はさしなとして漸にもとの玉村へ歸りぬ夫がみちを替むと申せしにくらかの宿へ行みちには小川ありこれ水みちて渡られすと申せは無餘義けふはこゝにやとりぬいまたみちの斯ならさりし前に先立として長持に附添時太郎はわたり越しぬ今はいたしかたなきまゝ主従こよひはよるものかりて臥候積手筈をは定たりいかにも旅店のあか附たるもの著て臥さむは心苦しよつて蚊帳はかり蒲團はかこ蒲團毛氈等にて事を辨しぬ玉村へ歸りしは九時位にて雨は益甚敷家來共晝寢のいひき山鳩の聲而已おとつれてうらめしくみるは瀧のことき軒の玉水也昔し慶長五年の秋加州主従あさ井繩手にて敗軍のことおもひ出たりわつかの人數にても至る細き繩手みちを返さむとするはさても不辨なるもの也行軍のこゝろ得大にあるへき事也

○十四日 曇夕雨 けふはみちをかへ通行之積に候得共如何哉と申せし



に慎藏心きゝたる男故早速に其かへ道へ行向ひてみしにさまての事には  
あらずされ共十間二十間宛は膝を過る水もあり甚敷所は腰迄も水有之候  
由に候得共川留といふにあらされは夫々の手當して行通之積に亦かへみ  
ちへ参りしに其頃は晝過にて水おち候由に候得共いまた二尺餘もあるへ  
し奔流久世いせ守か前なる溝のことしそれを肩輿さしなとして漸と萩  
原村名主太郎兵衛方に至り小休也同村迄之間の村々は慎藏かはからひて  
問屋もて頼み遣し道のほと繁りたる草なと切拂ひありそこよりは高地に  
て水溜りたる所さしてなし萩原村よりは利根川にそひ赤城山を右にはる  
な山を左にみて北のかたへ惣社大久保八木原の村々をこへ澁川村にいた  
る同村の入口より頻に雨降出し本陣市場佐七か方々やとりても矢張雨甚  
しけさ迄の玉村は家々に浮かれ女なと置て甚しき悪風俗にありしか澁川  
ははや信州近き山村にて素朴の風也あるしはこゝろあるものにや床によ  
き懸物香爐にもけふりたへすありしけふは時候か山よりか冷氣也さて又

利根川出水にて常には草生たる河原迄も悉水にて二三百間もあるへき所  
瀧の如く流るおそろしき様也されとも兩岸至る高く堤の患なしきのふの  
朝迄は神流川は濁居たれと利根は常に變りたる事もなかりしかけふは泥  
の如にみゆ建場といふ所のなきもあれは寺の門前村の社地などに小休せ  
しもありき

うき旅の衣手さむき初風におもはすもちる袖の白露

右はなみの旅にての初秋なるへし某は

秋風のうきをうきとはしらすりき厚き恵をかさね行みは

晴るゝかとみる間にはる名山にくもかゝりければ

初花にあらてこゝろにかゝる哉はる名の山のみねのしら雲

右なる赤城山をみて古さと牛込にては赤城山をもて産神となすことおも  
ひ出て

古さとにいつくみ神の赤城山われにしき著ぬ見備はしませ



澁川村にて雲の立のほるをみて

山の端にかゝる白雲かすかにて麓のさとのけふりかとみる

慎藏骨を折候體見へ候而悦しく候某女に候は、みそか事してそめの頭より牛に勝りたる角生るをみへきにおしき事也其事そめへ言傳給へかし○納戸長持は割ふた故昨日之強雨に而水入に成衣類悉濡ぬ貞助等打より今夜より手入にかゝり申候○茂兵衛忤順之助は十六歳と申候覺束なしこの頃もきくに父よちゝともにゆゑみ候へしなといふさま幼子の如しけふもつか袋ときて驚たる聲にて我刀の柄には白き五六分の毛生たりこはけしからすゝなとつふやくことおかしそは雨に而かひ生たるなるへし

○十五日 曇少雨 けふも川留に而澁川に逗留也○けふ長持を改しに割ふたの分は悉水入て衣類の紙につゝみたる分大にぬれたり糸藏貞助うちよりて手かへし大騒也○けふは魂祭なりいかならむなどおもひて

旅衣わか忍ふほとうちよりてわれや忍はむけふの祭に

夕かたもの静なるにあめ商ふもの、故郷も同じ様に笛吹をきゝて

うれしくもしはし忘れし故郷をあはれ笛の音吹起す哉

故郷にきく笛の音を商ひとよはや門過て我にしらすな

○此節の本陣は茶人なるへし懸物等心きゝたる而已ならずけさもあらめにかつほ節の汁鮎の煮ひたしなすに貝わりと椎茸の露物味よろし今夜はいかなるこゝろかうなきのみを漬也珍敷事ひるは玉子焼のさらに新しいもに袖かけたるは都ふり也○御關所前之川留いつ明き可申とも不知よつて先例も有之候間萬年橋通相廻り候積先觸出之よつて明後日當所出立之積也○今日は朝夕は冷氣也綿入着用也單物かさねの物もありぬ○家來若侍の物語を密に聞にきのふの未明に慎藏か道見廻として出しはしらす往來に而玉村の浮女若男ときぬゝを哀しみてくら打よせて戯れなとせしか慎藏をみておとろき別れたりけしからぬ奴也とてことさらに無禮咎なしぬる體おかし



○十六日 晴 けふも澁川に逗留明日出立先觸等出す川留の快晴はこゝろいられのものにこそ○旅宿狭して武藝はならねと經書又は通鑑をよみ或は佐渡風土のこと記せし卷など取出して日長くおもひしこともなし

川留は吾妻川と聞て

人しらすいもや袂を絞りけむ吾妻川にまさる白波

吾妻の名にしおひなは急ぬるこゝろもしりてわたせ川波

けふも又同じやとりに天つ日のこゝろにくゝも晴わたる哉

軒なる蜘蛛をみて

古郷も旅も軒端のさゝかにもかりの世に住む身はかはらしを

さゝかにのまことにさとき心あらはいとやるせなく世をは渡らし

あさりぬるこゝろ迷に笹蟹の危きいとをかくるはかなさ

あなさとし風あらし日はいをまきて姿もみせぬくものふるまい

○十七日 晴 横雲たな引頃澁川を立て金井に至るこゝにてしたくとゝ

のへて南奎へ参り御關所におゐてかたを出し鐵砲の改を受そこより吾妻川にそひはるな山の麓を行こと六里餘にしてあつたといふ邑にて萬年橋を渡るこの橋角なる木もてくみ出したるものにあはしくひなし數人わたるに動搖してこゝろくるしそこは兩岸高くして左右に大なる瀧あり向のきしにも瀧ありてなかめよろし萬年橋にては吾妻川へそひてさかのほりしかそこは又そひて下りぬのほる頃わたりし細谷川はこなたのきしよりはいつれもよきなかめの瀧と成てみゆる也

郷原又は原町といふ所を経て又川あり瀬附よりたりや中に少の松原ありそこは丸木橋かけ渡し其上を行に百姓共は川の内に入て駕の危からざる様おさへ行也中島を越れば又板橋也これを山田橋といふ山田橋より中ノ條村に至り止宿けふの道筋都而十里程いつれもくさつの出湯に行旅人の外は 公のことにて通行のものなし佐渡奉行山本伊豫守四十年已前に通りたりといふ右故百姓共人馬繼にこゝろを用ひちとの休晝かれいの所と



いふ迄も其奔走大かたならず是を實の馳走ほむそうなるへしとおもはる坊主の人足惣髪の馬かたあるもみゆ小休に村持の社の神前に毛氈敷たる所もありけり我思ふに壹人の人を遣ふにもこゝろやすく動こと難し然るに此數ヶ村數百人の民定而數日こゝろを勞し力をつくせしことなるへしとおもへは公のおほん恵みいとかしこしされと夫は夫丈の身分ともなりたれば也然れとも身分而已數百人の勞苦をほしひまゝに受なから民の心をしらす民を恵にこゝろを用ひさらむにはこの民の辛苦終にはわか身より子孫迄をもくるしむる種となりて父祖の陰徳もこれかために消滅すへし恐へきことならずや大徳必百世祀といふこと左氏にみゆ其ことまことならむには不徳にしてかく民を辛苦せしむ必や世を永くすること難からめ七年の艾に三年の病といふことく七分の徳に三分の幸を受なむには子孫さかへ可申を家の幸か不幸か某かことく不徳にしてかゝることに逢ふ必や子々孫々の幸を某か代に奪ふにやあるらめとおもへは只々おそれ

おもふ計にそありき○鐵砲改ありしは奎の御關所祖母島といふ所にある裏番所也いづれも十匁以下に付自分の證文也女は奎に而女形を出し祖母島は其寫を廻し奎より相通候様と之證文遣す由也裏番所之役人といふものは江戸の辻番人のこときもの也夫もけふは麻上下に而四人迄出ついても白髪を撫附もせぬ體也常の守りかたいかゝあるへきや

山田橋にて

吾妻とみしはあたにてあなはかな知らぬ山田の川にありけり

まつ島の隔はあれと山田川しはしにあひて又流る也

途中にて油衣用ひさるはけふ初也

○十八日 曇 六半時中野條を出て一り餘にして相川に至る相川より三里の山みちを越三國の往還須川こゝにて晝休いたし飯の外まいらすつきものはなしといふ兼而心得居たれば某は辨當也同所を一りにして相俣に至る相俣より十二丁にして猿ヶ京にいたるこゝに御關所あり鐵砲の改等



奎の如し御關所より一里にして永井に至り止宿夕七時頃より雨に成たりされとも止宿のちなれば雨には逢さりき○けふのみちは十にして七八は山みち也○溪川にそひみねを越ることしはくも也○小休せしも全の野立もあり又は小用所なき所もありて宿のあるしに問ひて椽より庭へものせしこともありき○民藏きのふ泊より吐三度計瀉三四度あり駕中の龍腦丸を遣せしに大に快よしこよひは常の如しと申しき○けふは三國のたふけを越淺貝に至り可申を山本新十郎とおちあひて百姓の難義するよし淺貝より申出るに寄俄に永井へ止宿せし也永井へ参りしに至て冷氣なり從者いづれも裕某は綿入也三國へ参りし故か所々のみねに殘雪少宛みゆる也冷氣おもひやるへしこより蚊帳を用ひすといふ

○十九日 終日強雨 六半時永井宿を立一りにして風摺と申たむけへかゝりしに雨盆を傾るか如し又一里にして三國のたむけに至るこゝは上州信州越後の境也巔三國の權現祭りあり神主の宅にて小休いたす例也とて

もち神酒等差出すけふ三國峠に参りし頃は雨殊に甚敷風もありて四方雲立覆ひ嵐に雲を卷吹送る様いとすさまし雲深く雨甚敷二三十間の先はみへわかぬ程也雨の木の葉にかゝる音夥しき事也

霧深き磯邊をたとるこゝち哉雲分昇る雨の山ふみ

うちよするきしなみならてふる雨の梢を洗ふ音のはけしき

うき秋に日をふる雨の旅衣かさねくゝて袖しほる也

三國峠一里十八丁を登り下り淺貝の宿に至り小休いたす永井と淺貝四里程のたかいなれ共風俗大に變しこゝには田はたなと更になし只狗脊わらひ等多さま也いにしへ國の境定めしも宜也天の定むるものとみへたりされは京畿の法關東を行ひかたし關東の法又越路へは行ひかたかるへし正心誠意とそいつ方もかはるものかは

一つなる峰を越路よ吾妻路と定めし心今もみへぬる

其國のならひによりて治なは民のこゝろに背かさらまし



汁くしら 豆なす 豆ふ ひいら 繪いんけん 大根ろし 名も 一切れ 齋さきみす 三筋つ 取す 名は 田つく りに 似た 十は かり

そこより島か原山鳥の原なといふ芝野をこへ二居峠中の峠なといふ所をこへ越後國三股にいたり止宿淺貝より三股迄は四里餘ありといふ遠く覺ゆ此村々殊にひなふり甚し其一二を記す三股は佐渡奉行例止宿に成所に亦中にもよろしといへとけふ嶺こへたる賀のよしに酒を出せしに江戸繪女の圖也うらにけしからぬこと繪あり奉行などに進むべきものならず一笑也屏風に月仙風の人物繪かきあり賛辭あれとも不讀 勘日森風雪關山夏酒也なと其外品々也上古の辭なりや唐明の詩也やまた我朝の詩也やしらぬ句也其内賛辭に纒は薄墨帯は紺青下着白といふことありそれをも朱印を押詩などのことと記あり夫にておもへは字もろくにしらぬものに讚をたのみし故みたりに記せしものなるへし彌次郎喜多八か作り物語の眞物をみる絶倒之事共也軒の風鈴をみしに

卯月末つかた三侯の宿にやとりさくらをみてと辭書して  
此里を問はすは夏をはるとしてさけるさくらをいかに見ましを

といふ歌あり此歌にて時候の遅く寒きことしるへし駕のうちのつれく  
に小學の范魯公の詩を題にて

物盛則必衰 春夏のは山しけ山もみちせしのちはさひしく木からしそふく  
有隆還有替 さし昇りあなす、しやとめつる間にはや山の端の夏のよの月  
速成不堅牢 夕立に岸越ぬへき山水のしはしふかれてさ、なみやたつ  
亟走多顛躓 眞帆かけて千里しはしに行舟は灘のみくつと成もありけり  
灼灼園中花 きのみよりのとけくわたる春風にはや咲そめし花もありけり  
早發還先萎 よしの山さかりなりしもつかの間に雪の梢と花はふりぬる  
遅遲澗畔松 早かれと松にこゝろはなかりしかとし經ぬる間に人やしりけむ  
鬱鬱合晚翠 常磐なる松の梢の深みとちとせかはらて世にさかふらむ  
賦命有疾徐 八十路まで釣せし翁夢の間に國の主となるはしらすや  
青雲難力致 定なき風を便りのいかのほり破れて木の間に朽や果なむ  
寄語謝諸郎 若かりしいさみにのほる山ふみはふもとの花をしらて過らむ



躁進徒爲耳

危さも忘のほりしみれの月さまで味はかはらさりけり

こたひは日々雨のふらぬ日もなく殊に強雨なれば油衣の出来てまた干きも果ぬまに日々にきしまゝ多く破れ雨もりて夫にみちはころはぬをもて旨とする故勞もつよく従者のさまいとあはれにみへし順之助など何之厭もなく歩行はすこやかなる事也

○廿日 雨 六半時三俣を立出 三十丁に芝原峠小休一り餘湯澤一町に廿一ヶ野立關立一ヶ野 鹽澤廿八丁に六日町に至る八半時頃也

三俣村は前に記如くひなふりの極也しか湯澤關鹽澤六日町段々と町並よろし稻草の生立も大によろし湯澤宿には床に三方の上に米三升計のせあり何故と聞しに佐渡奉行小休の時例差出置也それを村内に疫邪等のものあれはかゆにして與るに効ありといふおかしき事也この宿のちや店に大なる臺へ白雪を山の如につみて買ふものあれは鋸に引與る也順之助三文程求めしに並の鉢皿に山もり一つありぬ夫を某も少し物しぬ江戸な

らは貴きものなるへしこの邊女共關東と大に變りなへて色白し又小兒の多こと夥し關よりは看板の文字等迄よくなれり關にはなら附の名物あり小池に緋鯉放ちあり夫にても三ッ俣の類にはあらざるをしるへし

民くさも田面につれて開けりゆたけくつゝ軒もみへぬる

關宿に晝餉たうへ申候○六日町は川附にこゝより船行一日に二十四里程參り八半位には寺泊に參り候事之由也鮭の生なるを給申候○馬は陸を參り候間一日おくれ候由也○三俣に湯殿と眞に記たる室あり夏禹湯殿とは承りしか湯殿と記せし例を聞かすよつてよくみれば湯殿を書誤たるものにとそ○兩三日已來かい巻二つを用ひ申候昨夜郡内縞之方の袖之内の緋のぬいはり出申候幸ひにして傷は不致候心ろへあるへき事也○廿一日 朝曇午後晴 正六半時前之したくにて六日町宿之本陣を出同所より一町計肩輿にて參り大野川乗船某か船は長八間計もあるへしこも昔之屋根あり船のへさき至る細く一體に角なき造りかたに丸木をくほ



めたるか如しかくなくては山川にはよろしからし太古の木をくほめて船とせしと申をも、ちあり夫にむらさき白の幕ともうち四半の印を建對の毛鑓持鑓鐵砲御用箆筒等をのせ家來も用人壹人給人壹人近習三人其外手廻り等乗組家來并荷物等は以上七艘之船にのせつ是も四半の船しるしたてぬそこは川巾六七拾間もあるへし乗出ぬれば水主共船歌をうたひ申候さして可興ものにもあらず流に隨ひて參る程川巾廣く五里計も參りて川口といふ所にて信濃川とおち合そこは川巾百間餘もあるへし兩岸赤壁もあり絶壁もあり四方に所々の山みへ川早くして水多く咏ことによるし七里計にして小出といふ所に至ることにてはしはし船かゝりする事也某等か船をみるときの家より女商數十人出はや水のうちに高も、迄も入手には菓子もつもあり酒或は田樂めせといふもありくち、かしましさいふへうもあらずとは四十計より十四五計也いづれも髪にても殊更に結たる様也越後は女なへていろ白く顔おも長のもの多ければ中にはな

まめきたるもありやかて某等か船に乘移とせしかは某か船は家來共の嚴敷制していれすされ共をそれ氣もなく六艘の供船荷船にのり移て強而物めせと勸むる様いとかしまし是を樂府の詩にある長干行の類かとおもはるしはしにしてそこを出又七里計にて小千谷といふ村の岸に附しに前の如しこゝは蕎麥の名物也とて夫をも商ひぬ女共帶の間に茶碗をはさみ茶酒賣もありきそこより又六七里にして長岡に至る同所に前前の船より上り候得は牧野備前守の家來郡奉行等馳走として出居りぬ給人名披露せし故肩輿の内々默禮常の如しそこの堤四五十間參り候得は牧野の馳走船繋あり疊八丈二タ間程あり造かた前の如しそこより七里にして大河洲に至る夫迄川道貳十貳里餘といふ此川大河洲近邊は巾五六丁も其餘もあるへし入江の如し山村もみへ江村もうちならひて詠得もいはれす候以上二十二里餘といふ然るに大河洲に參りしは八半時前なるへし夫に急流おもふへき事にや大河洲より上陸し地藏堂町に參る同所には襖を金張附にし



て鶴を圖せし地藏堂ありこゝは門に筵敷たるあり或は門口に平服せしもあり也男女出居る其様組屋敷にて新婦みるよりも甚敷頭の數かさね並ひたるは千石の船に西瓜をつみし如くなるへしそこより寺泊迄三里の間の人數かきりもしれぬ程也衛玠とかいひし六朝の人は容貌美にしてあまり人にみられ夫かために死せし故人にみころされたりといひしと承る某も衛玠たらむには即死もすへきも幸ひにくさみも出不申候そは衛玠は聞へたる美男子某は鐵面皮の醜男子のさちなるへし老婦の合掌し或は念數かけてをかみぬるは佛か男子の鬼子母神とおもひしやわかき女のぬかつく様にてひそかに某か肩輿のうちのそきみるはいかなるこゝろにや聞まほし大河洲より地藏堂まで二十町夫を渡邊村まで一里餘もあるへしこの村小休所也問屋の前に御乗物臺といふ高札ありそこに高さ壹尺にて肩輿程の土をゝきてその四方を松葉にて額の如にへりをとりたり珍らかなるこゝにてそこの小休よりすこしなる小山をこへぬれば海邊へ出磯邊にそひ

て行こと大河洲より寺泊へ三里餘といふ六日町は大河洲は二十二里通計二十五里餘也十丁餘もあるへし寺泊にいたるけふまでは山のみなりしか晴たる海みるも興あることにて佐渡の島根薄墨もて畫かごとく夕日のうちにみゆ品川の沖より上總の山をみるよりも近か如し寺泊の本陣は上段其外共都而東海道の本陣に而其入念たるものなるへし山本新十郎水野正太夫も着の賀として参り佐州の御船手も参りぬ家來披露にて逢ひ海路のことなど承る本陣は石川平介といふものにも出で鹽鴨貳つを奉る本陣詰右作とと也本陣詰の京屋敬三郎といふものも出で鹽鴨貳つを奉る本陣詰右作といふものは菓子奉れるか例なるにことしは喪のことありて出ですと斷のありき○地藏堂の町にては村上の内藤紀伊守家來寺泊に而は松平越中守家來出ぬいづれも給人名披露也この本陣は海の岸へ作たる家にてよるもかゝり船の燈星のことくにみゆきしなみおとたへすけふは江戸のことき暑さ故ひとへ衣に而夜も障子明はらひ置ぬ○船手のものにはさら也本陣其外にも夫々金子遣すこと也道中の類にはあらずこは支配國へ近故こゝろ



用ゆるなるへし○磯邊を行に大波きしに當りて碎け水音して家來の足三里のあたり迄潮かゝり時太郎大に驚たりこゝの北は朝鮮より韃韃に末からふと島のうしろに魯西亞の屬國と地方つき川の如くになり居と承れば先つ内海とも可申かなれ共北海故歟興津田子あたりよりも波あらしか如し尤東海道にはきし波うちよする邊を歩行ぬることなく遠き故かもしるへからす○寺泊の本陣へ參りしは七時過暮近き頃なるへし夕陽斷雲のうちより海上に臨みたりしはしみるうちに波にのるか如なりしかはやみへすなりし日の出の海をあかり候と同しこゝとにゐいと速成ものにこそ○廿二日 晴に候得共ひるよりは風悪しとて船を出し不申候果御船手の申通に候○止宿の本陣平介は昔日蓮上人を宿せし所也とそ其止宿の地は今も題目堂と成てあり則平介持に寺地にはあらず此程は尼を置候由也日蓮の用ひ玉ひし硯の水の井今尙存しぬ土俗眼を患るもの信して洗へは必効ありと其井みたりに人に汲せすといふよつて平介に乞ひて一壺を

得たり日傭のもの、歸りに奉るへしかゝること此邊にいくらもありと新十郎か旅宿の五十嵐文六は代々年寄役也古代より連綿と子孫相續しぬ今上段の間に成しはかしこくも 順徳院の佐渡に 遷幸ましませし時しはおはしましける所也とそ尤其後所々造り改りたれと尙もてうなはかりの柱は存せしよしこゝは義經の奥州に下りし時も湯殿にかくまひし由順徳院の用ひ玉ひし井は庭にありて、垣ゆひみたりに汲ことをゆるさすといふ義經の浴室は碑あり

徹五十嵐氏浴室碑

平氏滅之三年、源廷尉義經、冒讒負罪、走陸奥國、其年三月、抵越後國寺泊、土人憐其功不報、冤不自、館之士豪五十嵐氏之浴室、方是貶、鎌倉踪跡頗急、故延之、隱僻、以避耳目、廷尉之死、距今六百有餘年、遺構猶存、特以其在樹下、圯壤亦甚、民恐其泯沒、于佗日而愛慕之無所、今主人藤八郎、聞之、官、夫推其愛、以達情、表其事、以寓戒、此政之可先者也、況此土自古舟楫湊泊、意其俗澆薄、而有能趨義



厚古之風、此亦可録也。於是官換以碑名、曰文治西伐、功勳蓋世、盛名難居、維  
讒招戾、狗烹弓藏、古人之所誠、處是猜忌、情屬攜二、閔墻已成、容足無地、西奔東  
走、浴室是寄、赫赫功烈、誠節不全、北海之鄙、千載所憐、貞珉在山、以伐以鑄、銘詞  
不磨、爲鑑後年、

文政二年、歲次庚辰九月、白河藩臣片山成器謹撰并書

○廿三日 晴 朝南風晝々寅の風に替る今日天氣宜候に付出帆たるへき  
よし拂曉御水主共々爲心得申出る夫に付家來共夫々支度いたし居無間も  
御船手より彌出帆之由申出る某か乗船は大小早丸といふ内に四疊の仕切  
あり便所もありぬ海船にては小船に候得共川船の大船の類にはあらず夫  
の葵 御紋附みのほり葵 御紋附之帆三巾つゝ、をかけ大船印小船印猩々  
緋のまとの附也以上紋 外に紅の吹流し建之某并用人給人近習共一同乗組申候  
乗船の場所は本陣を二丁許もあり供方之もの共一同野袴に供いたす波  
渡場トにはしけ船の乗夫を乗船船は二十挺櫓也引船四艘也乗船濟に亦出

船宜候哉之由御船手頭羽織著長に御鎧を爲  
持侍召連候もの也伺出る家來を宜候由申候得は貝  
を吹立船歌はしまる歌は萬舞又は幸若の如し本陣其外は小船に亦其所ま  
て見送也佐州に亦は海上穩成ことを御奉行日より殿様日よりといふ今日  
所謂御奉行日より海上殊に穩也尤暑は甚し一里計出るうちはや船酔  
のもの吐氣はしまる糸藏貞助淳介はしめに打臥す某は幸にこともなし望  
遠鏡に亦所々見居る三四里計行しに兼亦は船中冷氣ならむとて單物なり  
しか暑たへかね逆上あり嘉十郎心附に亦早くかたひら召れ候へと申せし  
故繻絆もなくかたひら一つにて風に被吹候處漸常の如くに成船中は涼か  
らされは船に酔といふまことなるへし佐州の海は深百丈餘あるといふ清  
きこと水晶の如しされ共深き故藍の如くみゆくみて試るに至りしほはや  
し十里餘参りしに遠目鏡に亦みるよし某か帆影をみると佐州之地かたを  
牽船追々飛か如に乗よせ参る一番に参るものは某か船中より水を與ふに  
息をもつきあへすのみ汗をしほる様いかにも勢ありその以前順風穩に吹



越後のひき船は却る大船にひかるゝか如くなりし故暇遣しぬ追々引船参り某か船の計十艘宛二行に列してこき行ぬ乗船せしは五時前也しか七時頃赤泊へ着しぬ海上小木湊迄十八里赤泊は十六里なりといふされ共十三四里には過へからすと御船手のもの云き船中に辨當を給吐氣あらむも口惜と給す居しか八時頃に成飢を覺へければ湯漬三椀をものしぬ赤泊に参りしにみるもの可譬様なしされ共二階よりのそくものは一人もなししはらくするうち供立出来候故肩輿行列にて本陣に参る夫迄之内けしからぬ見物新十郎家内など嘸々難義と存はかり候佐渡のわたりの船中よりは東海北海大廻りの船々みへ越後の山々越中の立山かすかにみゆるなかもよろし赤泊の本陣は上段はなけれ共手廣にて奇れい也杉の面皮附のはしらなけしにあらむ間は赤杉の糸目也とこの間狩野家の三幅對也其餘おもひやるへき事也着いたし候と追々御船手廣間役等出る逢遣し候扱もわつらはしき事也○御咎に相成候地役人の警固として家來給人吉田柔介

拂方の廉にて給人高村俊藏荷物へ差添別船に渡海是も無滞船に酔たる事もなしといふ大に安心也廣間役其外之ものに逢遣す手續を聞しに直に彼方を御着坐御目見御次誰々御椽側誰々と書面差出尤御目見之事故御辭は不被下と之演達故其心得に廣間役は用人披露畢右之廣間役披露に御次と申候もの共壹人宛出る御椽側と申は一同出るいつれも膝行出に膝行退去也隨分ともにひなふりのことはなし廣間役上下かたひら立派なる事にて途中平服も鍵挾箱にて出る也昨夜今日懸けしからぬ暑也船中すかたひらにたへかね候位也越後佐渡は近頃覺へざる暑氣に十三日十八日に少々の雨はあれ共一體早に水は遠方迄くみに遣すときぬふ寺泊にてのはなし也百里餘之北國に参り江戸にもなきあつさけしからぬ事也○本陣着候得は焼しほに粥を出す椀も膳もいつかけは勿論金蒔繪也粥の味ことよろし

○廿四日 快晴 夜に入少雨忽晴暑甚し正六時赤泊出立いたし一り半に



下河茂村勝泉寺の上り夫を一里新庄高野に野立一り半に新町宿に  
 あり休いたし夫を一り十丁に河原田町諏訪社前に小休一りよ澤根本  
 光寺の上り小休一りよに中山峠茶屋に小休夫を廿丁に相川に到着  
 也○今日挑灯に出立拂曉より途中に見物影中々昨日之類にあらず村々  
 町々千を以數るに尙餘りありぬへし佐州之風俗越後信濃に近くして大に  
 劣れり唐詩にいふ所の紫髯綠眼之類か眼之色ことなるもの多し珍敷は老  
 さひたる女に亦も多くあかねのてからを用ひ若くいさめるとも可申男に  
 無紋白布の夏衣多くみゆ女に紅木綿の湯具不用ものは至少馬多ありて  
 小にし弱く牛又是に類しぬ鹿狐狼之類なし狸貉計也といふ人も獸も風  
 土もことならぬはなし只鶏と猫は世の常也相川といふ所は赤泊より五十  
 町一里七里にして後ろは山前は大海也人別一萬餘といふ道狹して家つく  
 りみ苦し相川の入口に惣門ありて門番所あり其内町也町之中より至るけ  
 はしき坂を登候得はかなり之橋所々に懸り惣構之内に地役人住居也奉行

屋敷は別段惣門あり其惣門之内迄鍵に乘輿也當番奉行之住居は交替以  
 前明置八右衛門は非番之住居に移り居ぬ八右衛門か玄關之前三尺計手前  
 を下乗いたし八右衛門次之間迄出迎いたす居間を參り面謁到着之義申述  
 る即退散之積なりしか八右衛門か三年來こゝに居て勞し候而已ならず少  
 しく中風の病も出且十一日頃中暑に打臥けふは某か着のうれしさに  
 押る髪結ひ月代そりたりとてよろこひながら餘程のはれ面部手等にみへ  
 さそや心細からめとおもひしに不覺先立しは涙也けり八右衛門も頻に落  
 涙していふへき様もあらず只々某か御役仰蒙りて再ひまで同僚たるはい  
 かなる縁を某にはこゝろ置なしうれしといふ計にて頻にはなうちかみぬ  
 る而已也さてあるへきにもあらねはのちに某か方に仰を傳ふる旨もあ  
 り其こと畢て尙事長く見參は候へしといひて別れぬ八右衛門は次之間迄  
 送りぬ當番の役所といふは非番八右衛門か御役所之向に八右衛門か玄  
 關より歩ぬへき程の板を渡しありそこより某か御役所を參りぬ御玄關は



廣からねとも十間計を板廊下あり其次に幾間かあり大書院等あり葵章之  
矢弓かさりある所をしては奥に御用談所といふもの十疊其次は近習の  
若士共居所に其其次十疊に一ツ間の入側附書院床又は押入等ある所某か  
居間也居間之庭は貳百坪も其餘もあるへし北高く南低して其東之方々南  
にかけ候而山かたちありさくら松等數多うへありは、三間餘に長二十間  
計の蓮池もありて殊によろし池魚多くみゆ圍の塀之上を見越して相川の  
町並大海みゆる咏殊によろし湯殿等隨分こゝろを用ひたりとみゆる也圍  
之外は花畑と稱しそこには馬場も鐵砲矢場もありぬひろきことしるへし  
白衣きしもの多をみて

白妙の夏衣せし山かつは今も昔の姿也けり

庭の虫をきゝて

こゝろなやしはし忘れし古さとを鳴虫の音に思ひ出ぬる

途中に

わかいかふ事や待らむこへて行みねのあなたに烟みゆ也

鹿は居らすと聞て

鹿の音のなしとし聞もたより也秋のたひ寢のうさやすくなき

下河茂村野路にてきゝす頻に鳴ければ

をしへ草わけてもうけむ心あらは秋のゝきゝすわれに告てよ

ゆたかなるはるのこゝろを心にときゝす鳴らむ野への秋萩

与風おもへ出て

大君の子とし給ふを忍ひつゝわかはらからと恵め此民

わか居るところにとし經たる松ありければ

うつしうへて幾はる秋を經へしならしたか子日せし松にあるらむ

中山峠の小休所といふものは佐渡奉行交替のため出來居るものとみゆ山  
の上に下の相川の町を見はらして八疊の間其外三間程もありこゝより從  
者は黒き紋附たる羽織小袴に成て供する事也某もたひによれた衣など着



かへ候○けふの途中役々の格ありて醫師寺院之類より 公のことにあつかる大工其外市中格式のある町人等迄所々に麻上下に於て出迎ふ廣間役も出迎て地に手して禮を成しぬ○着早々大書院の目見といふものは廣間役は疊三疊目其外寺院迄疊目ありて罷出平服するに辭をも不遣候右之方に組頭目なし式居をこし廣間役並み居左之方に用人給人等一同並居候刀持大書院出口小溜の如き所に侍座也

○廿五日 晴 五時前之供揃に於て 御宮御靈屋其外八幡金銀山之神御役所之稻荷に參詣いたす供立江戸之通尤徒は三人侍四人召連候四時頃歸宅に於て大書院に目通之もの有之百人餘もあるへし壹人宛出る寝む氣附申候夫を表に出る表は巾三四間に於ては十四五間もあるへし役所向を取拂ひたるもの也同所の一盃出る夥事三度出申候○八右衛門殿歸府殊之外喜さるもあるへし乍去餘程腫氣有之組頭其外共懸念自分も同斷に於色々内評いたし家來并醫師に相談およひ候處江戸迄は差支無之由に付立と

決着也けふも御用狀之調に於て被參候格別之事には無之候得共乍去輕事には無之候漸々歩行也是は中風之氣味もあるへし委細夫等之始末鳥居市十郎に申遣す○佐州は殊之外眼病扱又片目なるもの多し昨日已來數十人を見らるゝも一むれには片目壹人眼病之もの貳三人はあり組頭に聞しに誰に於ても初在勤之ものはみな不審いたし候由○組頭衆三人に五節句には菓子差出候事之由依之唐まむちう羊かむの類四人前計九月初旬迄に參候様心附あるへし八月廿三日か十三日の便に於てよろしかるへし

○廿六日 晴 けふも大書院に於て出る地役人其外寺社山伏等出る山伏の巾にけさころもを衣て悉くわきさしを帶せしも珍敷事也○鳥居八右衛門明日出立之暇乞として被參候某も罷越候○旅と申こと珍らしきことの如くにあれと凡てのこと旅にそありける光陰は百代の旅人也と古人も申せは行水も日月も此浮世の中もことごとく旅也今來りて今出ることかね白かねはこゝろせきたる旅人なるへし數代の富あるはしはしの逗留なるへし



時のかれす  
てかかれを打  
不申候

されはうき旅衣といふも誰かはこれをまぬかるへきにや○佐州は金つま  
ると申ことを怠て時のかねなとも末をつめては打ぬ也かく世智かしこく  
利にのみ走るくに故奉行交替之時参りこみ合の序をみて奉行のものを盗  
行なといかにも可恐國也

○廿七日 晴 今朝八右衛門殿出立に付見送り家來等差出候手續例之通  
也○今日よりは某壹人に付夫々取締のこと家來に申聞遣し候よつて奥と  
稱し候場所悉廻りみるにいかにも古く候得共近習部や中小性部や夫々之  
曹司ことくあり臺所の板間ひろくしてなかに大さ三尺餘之鍋あり某  
か三度の食仕立る所家來か餉給る所も夫々にあり表と唱候所は大書院之  
外也大書院迄は家來共之持其杉戸より外は御役所也廣きことは殊にひろ  
し其内に大廣間とて寺院之住職など申付る所ありそれか天井もなしいか  
なる事にや西洋人の防の時民兵用ゆる備之由いかなる頃出來しや竹鍵數  
百本ありそれにて凡のことおしはかるへきにや○けふ夕方乗馬いたす

馬場の馬のこと引受る家來先立刀持其外近習之もの召連參る某かもとの  
身分をおもへは恐入たる事也され共夫は御役義に付之事故平日のこと  
と決而混雜あるへからす右に付おもひ出候一事を記す歟五郎等よくこゝ  
ろへ候へ某今日書付を出し候は御用中儉素專たるへしとよつて先つ今日  
より申て朝は鹽斷ひるは香物か或はみその類一品夜食何にても一菜尤汁  
ある時は菜は無用たるへし二度は麥飯たるへし三度共に飯を焚候事は不  
相成と申付御用之こと家内等之うつり候は、たちまち滅亡相違あるまし  
く候可相成は門より内之事は二百俵のくらし御役に付之事は三千石の  
こゝろへ決而忘却あるへからす某か離島の参り右之如くいたす事に心附  
なくてはなるへからす候來年歸りてのち在勤中之平日之衣服無用たるへ  
し衣類悉すもめむの紋附たるへし少々の失却は苦からす候おさと引受候  
而忘却無之其手當あるへく候儒のみちにこゝろあるものは僧徒はことと  
して笑ふことなれとも實の清僧又は木食など僧徒にはいくらもあり任重



く道遠き士たることおもふもの僧徒位の行をもののかすとすへきや○某以前畫をみることを好み殊に山水の圖好みしか山中のけしきは去々年の木曾にて十分也さて當時の居間は東南に向ひ東之方はあまり高からぬ松山にて南は相川の町より數十町の磯邊に漁船數十艘つなき捨たる體より西北に懸候るは大海にて夕かたはいかをつる船數百艘出ことによき咏也江戸のもの品川の海をみて賞するものなどに一見させ度事に候され共風流を極たる山水はいつくも瓦屋にて少もなかめなき江戸には遙に及はぬ事也此程こそ龍を好みて眞龍に驚たるは尤の事也とおもふ也此邊錫いかは一枚貳文くらひ也よつて中小性以上には菜にも不出いかを食するものは中間以下のもの也此位の取扱眞のいかの取扱なるへし以下もいか上下位なるへし御一笑々々是はいかぬたと申候こと佐渡よりはしまりしもしるへからす候

○廿八日 快晴 至る暑氣強し○今日月次御禮日に付大書院に出る廣間

役以下之もの共之禮受申候寺格之寺院出る夫のと之辭遣し候佐州前々之仕來に而廣間役の逢候義其外とも都而御目見と稱しぬ僭上至極のこと故組頭の僭上恐入たる事申候得共仕來之由に而可改とも不申候間其まゝにいたし置候かみなと申候ことはいともくかしこき事に而既に白石か上裁の字にて議論もありたる事なと委細に説きかせ候○用人は廣間役之上坐給人は廣間役之次坐也民藏なと當惑もあるよし也構へて不敬あるへからすと示し置候夏足袋は民藏中々心にもつかすしかるに次坐の廣間役足袋相用ゆるにより民藏等今日足袋願いたす承置候足袋には足ほてりて困候由つふやきぬるもおかし○八右衛門を見送り之醫師參り候同人さして之事もあるましと先こゝろおち居候いかゝあるへきひたすら案事申候

○廿九日 晴 此程は組頭被參候而御用談八半時過まで相懸夫にて事多ことしるへし○夕かたは南風に成○八右衛門小木湊迄無滯參り乍去腫氣よほと相増候由自書に而申來る○さしての事には無之候得共よほと風あ



り海のおと夥し

○八月朔日 曇暑甚し 大書院に 出廣間役以下之禮を受る表に 参り輕きもの共の禮をも受申候御着坐御目見と稱し來るけしからぬ事也寺院之内所作不束之もの有之差控伺可爲出など論有之甚以驚歎候○けふの祝ひとて勝手賄引受候町年寄甲賀佐助といふものより肴奉りぬ○けふ只今漁せしするめいかを買ひぬいかは白ものとおもひしに赤黒色也時をへしは白成といふするめいかには甲なし墨も至り少し大なる二三文に不過○臺所へ給士に参り候町年寄共之子供さても上品なる事也○臺所のことたとへは某は白米日に一升近習之ものは白米五合といふことにて夫は奉行之臺所故と之由夫に准することあり仕來にぬいかむともすへからす候可惡事也然るに冷たる飯をも密に買ふものあるよし貧國にてかゝることいくらもあるへしとおもひぬ○居間は南は海東は山にぬ見はらし一二里四方

もあるへし山の上故すゝしかるへきに池の蓮葉のそよきたる松の梢の音せしなと風の姿はあれと西北に窓なきは風少もいらす夏西北風なれば天氣南風は雨也居間のうしろ納戸つゝきに六間計の廊下あり其先は八疊の物見にて四方懸はらひ也こゝよりは支那鞆靴の海迄も一望也西北風寒ほと也○けふと節句には組頭にも多葉粉盆ちや少々の菓子を出すこと例なるよし河島才右衛門と某は二代の知音山本丈右衛門は某と同日に支配勘定出役之命蒙しもの也右之奉行たる事なと母上のおほしめして在勤こと彼是と仰られましく候近く治郎右衛門か母は二人の男子に壹人は一生涯の別壹人は三年餘の在番也かゝるものもある世のなかにこそ●出立前爪とりはさみとゝのへ候然るに不参候取落し置はいたし不申候哉出立前に造りたる小簞笥不用のものなるへし御用簞笥に事足候事知らぬにはかゝる損多きもの也馬具のこと具足のことなとにくひ思ふこと多しさしものは上手もあり桐桑の大木もあり家内に可用もの位はこしらへ歸り



可申候圖にて注文あるへし●宅に置し水戸殿の御歌のかけ物并西丸に  
拜領の硯のはこ大さ何ほとに候や委敷寸尺記し候る此次のたよりに御越  
可給候

○晴候る東南風強し二日也

けふ風強しされ共南風故浪はなし海至るをたやか也

荒磯にくたくる浪ときつるは松か枝あらふ風にそありける

庭に大成松二本あり實に松風をきしなみとのみおもひしかなみの白から  
ぬに心附て松風をしりし也○南風物しめるものなるに干くこと甚し鷹皮  
など物書ぬればよほとちれ候是も風土の相違なるへし寒暖昇降を以み  
るに兩三日以前は八十四度より六度迄也今日は九十度也甚暑の最上迄昇  
り候江戸にも九十度には去年ありしか去々年は夫程には覺へ不申候天  
氣と暑は土地にも珍敷申しぬ○日々の料理は村田を參り候中番の奴佐  
藤一郎取扱にる鹽梅は俊藏世話のよし中々也宅の料理よりは却るよろし

香物は新漬ならされはかくや也小いもに豆腐のしる加之かつほふしなど  
いとままし○おもひの外なることは魚類少暑氣甚敷御用多也○今日白洲  
はしめ民藏繼上下にる先立いたす刀持貞助也白洲入口迄也○白洲は孝行もの、  
御褒美也公事方のもの氣をきかせたるなるへし○乗馬いたす例は通也だ  
くに成てのれすと申せしに厩中間の全馬場長からぬ故也と申ぬ如才なき  
奴也長短に不拘いつも野足なるへし佐州にる乗馬のこと三年計無之鳥居  
の馬は山みちに迷ひし時管仲か遣ひしと承るほと馬也佐州の馬は至る  
小さくして殊に意地わるしよつて地役人等馬のことは曾あしらすとされ  
は拙技の仕合なるへし絶倒也馬場は四十間に少々たらす候  
○三日 晴 風強し○向陣屋之内自分入用にも少々つくろひ候る今日よ  
り劍術を遣ひ申候鐵藏糸藏相類し候劍術かなりの切紙位也順之助は一刀  
流也可成る年の稽古みゆ嘉十郎は免許を由中絶故糸藏など、五分位也さ  
れ共氣分高き故皆々被取廻候○けふ八十歳に近き井口茂十郎と申廣間役



に逢候安永九子年々の勤といふ昔つけ長門守といふ佐渡奉行明和の頃にあり其人は四十代と覺ゆ其外四十代の佐渡奉行は無之といふ○根岸は折々表役所にも参りたり茂十郎山方役より地方役の轉せし頃檢見として参り候時呼出し候而山方之勤之心に而地方もつとめよめつたに檢見引なとたつるなと被云し今も覺え居候けしからさる豪氣ありきと申しぬ●淳介俊藏と銀山の檢使に参り歸懸より大熱也兩三日巳醫師は山氣にかされて瘡なりといふよつて山の参るもの人馬平安散を可遣と尋みるになしおさと取落せしとみゆ平安散并蠟にてつゝみたる藥長崎奉行此次のたよりにさし越候へ爪とりはさみ調たりしよし是もおさと取落せしや不参候差越候へ夏物の衣類と冬物の衣類甚敷取交候而ありよつておもふに出立よほと不快をつとめたる體也此ほと健なりやいかにと案しわつらひ候○俊藏無病にて出精いたし候家來共之内別而俊藏貞助は出精の志みゆる也かけかへのなき呈書方の瘡をわつらひ候は當惑也○けふ稽古場の参り候

にも先立用人刀持壹人近習貳人召連候氣のつまりたる事也

ひま過る駒より早き月日もとかくなへまちぬ歸るあしたを

○四日 晴 風 未明に乗馬せしに御用狀参りしよし家來告來る十七日附之備後守殿御證文に而戸田に十一日之間川さへありと之斷書板橋のものよりそへて越しぬ御用のこと心つかひのことなしもとより御用に付こゝに記さす候はしめての御用狀に而取計向も多ければ順作の心配さこそと察入候され共書狀其外行違ひたる事もなく候同人の骨折別而と存候よくく其こと傳へ給り候へ川さへ大雨に而こまりたる事は先のたよりにてとくに知れ候事よとおもひ候へは別に記さす候

御養父様を 旅中御尋之御一封難有拜見仕候相替候義も無御座候間御安慮可被下候平日御健之處此程も益御機嫌よろしと之御事何より恐悅に御座候留守宅不締無之様御心を被添可被下候  
御實母様を之御一封 常に御煩ひ多に付御案事申上候處御機嫌能との



義何よりの恐悦に御座候日蓮の靈場に參り候半と之御事夫は國中巡見の時拜し候事にも候半か漸 御宮御靈屋に拜し奉り候計に御座候巡見に出候は、可申上候され共此度は出立之時仰かふりし事も果候はては巡見にも被出申間敷候歟五郎心附と之御書添被下候菓子相届申候

おさとより之一封うたとも一覽不相替感吟候はさみ受取候

鐵作より之壹封 旅中の被尋置候別條無之事被傳候様且屋敷のこと新右衛門申合候被取計候と存候

歟五郎より之壹封 出精之由重疊此ことに付之とは不存申遣候旨も候ひき道中行違たる事と存候日記よく記し候被差越候へ應對進退之節に心を附第一謹慎之貳字しはしも忘へからす

敬よりの一封 さいく物落鴈壹ツ狀袋十枚相届候例之文通故不及返事候其内來年歸り候は、逢候義を樂候由尤には候得共御奉公人に不相成候内は面會はいたし不申候間宿さかりの心得なと夢々有之間敷候某か

かたへ一封の書をおこし申候よりは不益の狀を宅によこし不申おとなしく平日いたし候義第一たるべく候以來敬よりのふみ便之時遣し候に不及候遠路貫目の御つゐへに相成候され共彼方は只おとなしくいたし候へと之返事參り候事計申進給へ且よく部やのものに心附あるべく候

○遠國御用中之宅狀と申候ものは親族および朋友とも常に親敷かりしは親敷程のことわつかの狀のうちにもみへ其まこところにこたへ候江戸にて遠國狀はさほとは不存候得共遠國は色々の心迷ひ少御用向之外は故郷のおもひ計と申候様成事故ころに感動甚しく候其深切成ことに感動いたし候もさて、いたし方は無之ものにあつまりは故郷の情忘れしをます、引出し候心學の損中々一時半時には消かね候事も有之候この難義を江戸のものおもひ計候は、宅狀はなきかたくらひのころへにて諸事取計可給候○御兩親様の御機嫌等之義は別段勿論



御兩親様を御こゝろまかせに被遣候御書狀是又別段に候得共目下の一族より之心得と申遣し候事に候

○ 歙五郎日記書狀之類はくわしきか上にもくわしく文段文章にも詩にも世に通用之書狀流にも成丈にこゝろをつくし筆をふるひ候而認書體また見事之様心附可成はけい引たる紙へ認候而差越候へ是は歙五郎之一稽古に而きりようも夫に而しれ候間弱年のもの修行之ため成丈委細之書狀差越候へ

○ 九月節句前菓子のこと申進候得共今便の菓子に而こと足候間差越候に不及候何事もこゝろを用ひ候得は修行ならさるは無之候此程くすりを給候外はみたりに菓子を給不申義之修行いたし居候間菓子もいり不申候つれづれに菓子をものせむにはかきりあるへからさる故にて候

○ 御用向之心得にも相成候間官邊之物語等は日記に記し委細新右衛門等が御差越候様たのみ入候

○ 宅之書狀も日記に候は、一覽いたし度候心得に相成候其外はいたつらに人意をみたり候具とのみ相成候間却而當惑之種と相成候日記に候は、記し候而御差越候へかし

○ 某心得之程一つを記し候いにしへ日本異國にも山に住み海島に住み或は色々に身をかへ隠たる人も多かりしにはあらずや夫等は世を厭ふこと又は市中などにはこゝろをすましかねたる故にあるへく候某は格別の御騰用故世事をしはしも捨候義はいたし不申候され共殘念成は世事を捨さるより又世事に迷ふこと常に多く日々くるしみ候然るに此度此島根に參りしかは命被りし御用の外はなく扱又こゝろを附候得は十三萬石之百姓のよきあしきも某か心一つより出候得はたとへは衣類一つ被盜たるものと之訴承り候而も矢張某か心一つの足さる事より起候間恐入不申候而は難成存候得は日々心の暇は少しされ共一事故江戸に居たるよりも心迷ひは大に滅居れば若暇あれば馬刀槍讀書にかゝり



切候而且は山海に隠れしものはいかにとおもへは在勤少しも難義とは  
不存候夫故公の事に付其外家事取締に付心得居候而爲に成へき日記之  
類之外は可成は聞かすして可濟事は聞かぬ方と前にも記し遣し候事に  
候くれ／＼も宅狀の類をゐとひ候には無之御用之妨と心を亂り候を恐  
れ候譯に候此ことよく味ひ候而一同勘辨有之度候遠國の狀と申もの中  
々江戸に而一寸に記され候事には無之格別之深切より起候をかく申候  
は甚心くるしく候御ゆるし候へ

○八月五日 晴 風 至而暑し寒暖昇降器未刻九十度也○今日江戸に  
御用狀差立候○頃日氣分至而よろし大に健成如くに存候○けふ椽側より  
濱邊をみるに漁家軒を並へ捨小船のほとりに童うちむれて水をくゝり浪  
に乗て遊び居る外午時なるに一人もみへす孤島のさひたることおもふへし  
冬に而北風烈敷浪の音すさまじき時はいかゝあるへし

○六日 晴 暑殊に甚し けふは明日のことあるによりて組頭其外懸り

之もの共七過迄も居り候○佐州は運上もの何に而もあり菓子ところてん  
賣物までもあり奇なるは焼もち運上とて餅賣ものよりも運上を出す也女  
ならば夥とれ可申ををしき事もおさとと餘程のことなるへし母上様御  
笑ひ候へし○庭によくみれば松十八本計あり庭構之外三間はゝに而おり  
廻し平地ありさく矢來に而其外はきし也こゝには西風除なるへし松數十  
本ありよき咏也これをこゝにおはなはたけと稱しぬ花はなし以前草花な  
と植しにや○右々きし至而高し其下は町屋也夕かた聞におもしろく三味  
線を引て通りし江戸に似たり此邊ひにて此技あり風俗よろしからさるし  
るへし○けふは晝頃風なけれともけしからすきしなみ高し海上はしれぬ  
もの也きのふは妻戸くりて置に夫にても蚊帳吹靡す程の風也き夫にきし  
浪はなし○燕といふものは春こと國より來て秋こと國へ歸るといふこゝ  
にてもかくそいふなるけふは軒端へ頻に來りぬこゝは北は東北韃鞅まで  
少くも二百里前後はあるへし對州より朝鮮へ鶴の歸も弱き鳥には海上行



あへぬもあると承るにつはめのこときものいかて百里の海上を行可申や  
竊におもふに鶯の古巢にかへるかことく深山幽谷に蟄して暖氣に乘し出  
るものにや

遠からておのか古巢へ歸りぬとおもへはふたき村つはめ哉

こと問はむ軒端になる、村燕ぬしかはりしをしるやしらしと

○八右衛門を送りし御船手頭加藤孫左衛門來る八右衛門は大に氣分よろ  
しと申せしよし少こゝろおちつき候腫は同じこと也とこのまゝにて歸し  
たきものと組頭一同ともとり、申し候いかゝあるへき○淳介の瘡いま  
たおち不申候瀧並玄伯といふ醫御役所詰いひ目見に出る醫師のうち筆頭也此邊  
の上手にゑ常に百人餘之病人を預居るといふ江戸にゑ官醫中川常眞院の  
弟子のよし

戯に 是は某か申せしにはあらすを申候ても  
戒愼恐懼の行は破るへしおそるへき事也

そつとして震ひついたるおきやくさむ是非おつこちと直になりいす

人をよくなすと聞たる玄伯は頭も赤い老からのもの

夕かた海をみて

なかむれは海原遠くすみわたり帆かけは雲のなかはしる也

うちよせしみとりの山のくたけては花とちりぬるいその荒波

○七日 晴 暑甚し 佐州村々一件落着組頭以下夫々申渡いたす百姓六  
百人餘出る白洲の三度に入て申渡書貳百七十枚あり其内くりかへし候ゑ  
申渡事もあり九時を八時迄相懸る懸り組頭の參りしは朝五ツ餘程已前也  
退散は七時過也佐渡にかゝる一件なし同心共の混雜大かたならず

○八日 晴 昨日之御用狀御老中方之御證文にゑ出し申候○佐渡之地役  
人は無人になれは懸りにゑ助役を取る其御手當一日錢五十文より二十四  
文位もありいつれも熨斗目以上之もの也使役といふものは二十俵二人扶  
持之地役也臺所にゑ飯を給菜代などをもらい候ゑ中番の如き取扱也稽古  
場のつくりろひをいたさせしに大工の手間あまりに安しよつて民藏を以得



と尋しに飯料共に壹人百貳十四文是上大中以下は飯料共に八十文のよし也圍ひ女に一月壹朱位のもの最上なりと貧國おもふへし○俊藏出精銀山の敷内をもみる積にて銀を穿穴也穿けふ聞参りしにたとへ今某か見廻るとも奉行の敷内をみして昔よりなしてへんといふ甲のこたく笠に似たるこよりにて作たるものをかふりさき織といふ木の皮にてをりたる半てんに似たるもの一つを着し丸こしにて入こと也近く警候に金銀山の岩山を古木の朽たる蟻通しといふものゝ如くに色々と穴をほり明候其内をおもひくゝに穿行こと也穴之内暑寒なしいつもはたか也用心に繩の帶をしむる由是は右之通之場所故をりくゝ崩るゝことあれは道なしに成也其時人のよりて石を除みちを作るに三日も四日も懸る其内の食は藁の繩をかみ居るといふこゝろ細きこと也壹間半のはしこ百五十數も下る所あるといふけしからぬこと也江戸より参る水替人足共は聞ゆる悪黨共なれ共猫鼠のこたくに成て居る也

○九日 晴 暑殊に甚し風なき故なるへし八十七度に而頃日之南風に見合暑三度薄し○けふ南之方村雲みへ微雷一二度響申候此國は冬大雪之頃雷電ある事也暑の頃はきかす珍敷事と申しぬ餘ほととの池水なりしかかれて多くはひかたとなりぬかけひもありて瀧に成ておち候由是等は白晝は烟も立のほるへき體也○けふ西北の海殊に晴たり遙の雲のたなひき上に所と黒き星うちたる如きものみゆ兼而聞近來は蝦夷南部より大坂の参る船佐渡の沖よし島花活になるへきほとの邊より東北韃靼の沖へかけて乗そこを大坂下之關の邊へ一間切に参候由夫かとおもひて遠目鏡にてみしに船かたみゆる也わか目鏡かく迄は用立ましとおもひしに幸也けり宅に而は十四五丁計みゆをみて彼是と申せしものは遣ひかたによるものそかしよつて土地のものに聞しにわか傳聞のことし近來のこと也されは佐渡の湊は夫故に船少と申しぬ段々と船路乗開きしものとみへたり佐渡より至極に晴し時は雲か霞かさたかにみへ分ちかね候程に壹岐對



此短命のこ  
とに付品々  
の説ある正  
論をしりて  
論のちを延  
也

馬の國みゆることあり夫は至極の晴ならてはみへすと地役人申せしよし  
○佐渡は前にもいふ如く至極日傭の下直なる所に銀山に辨當はかのか  
たを持参りて二十八文位を日傭あり夫かうちにも山中へ参り穴に入金銀  
を掘候山大工といふものは一日に四百文も五百文も取候由至る辛苦の事  
のよし彼山大工に成て七年の壽を保つものなしといつれも同病にせき  
をせき煤のときものを吐て終に死ぬるなり是は石州其外の金銀山を聞にな  
へて同じ油煙自然と鼻口は入夫  
より腹中脳髓迄もふりて骨  
かる、事なるへしと實にや夫をみればわつか成金銀にて人のいのち捨るこ  
ともありさていかなる病あるものにもこゝろを勞すること薄く飲食を  
節し薬にこゝろを用ひはこの大工のうらはらにて長壽なるへし養生は先  
三四年の勞をつみ不申候は効みへかたかるへし長壽のもとは第一に欲  
を少することなるへしあつさなからも寒國故なるへし夜は風涼しかりけ  
れははし居して海原にてる月をみて  
ひとりうき友とこそみれ故さとにたのしかりける月の光を

山中鹿之助  
の歌に  
うきこと  
尙此上も  
めれかし  
のちある  
めしに  
のこい  
る身  
た

うきことこのころためしにたらさりききしなみのおと秋のよの月  
○十日 晴 昨夜并今朝白雨一しきり降候○佐渡には鯉なかりしを何某  
の奉行の湖水に放ちて其後は鯉あり尤とる事は禁断也御役所の蓮池に誰  
か放ちけむ緋鯉壹尾あり其餘は鮒也なへて邊鄙には金魚はさら也緋こひ  
とてもなし是のみを江戸ものなるへしなといひて興せしに今朝おち候ひ  
し是は水かれて鳥につひはまれしや脊に大成疵あるといふ  
龍と成てあまつ天へか昇けむけさみへやらぬ紅の鯉  
古さとに變らぬ色となかぬ魚に別れてこひしくそあれ  
○大藏不快如何哉取まきれ候不承候此次のたよりに御きかせ候へ○佐  
渡に蓮根なし求むれば越後迄申遣す事のよし也御役所の蓮花なきや更に  
あとなし葉も至る薄小也○夕かたより鍵をつかひ申候  
○十一日 晴 昨夜より今朝まで強雨池水常に復しはしめて瀧もおち申  
候この頃干損の訴もおのつから止可申候○けふは茶飯を焚く家來共に爲



給申候 ○夕かたより劍術を遣ひ申候此ほと日々朝は馬夕かたは槍術也家  
來いかゝあるへしと槍劍隔日也 ○夜月さへて風清し海上へ月のうつりた  
るさま庭の萩なとさきたるに虫のなくこへ頻にて江戸にてうちより興し  
なはおもしろかるへし旅にはかゝる事より只何くれと用多きこそよけれ  
今日にて三十日になりぬされと百日も過しこゝち也と民藏はしめ厩の中  
間迄も申しぬよつておもふ江口次郎などをりく使を遣して用あらは辨  
し遣し候へ

○十二日 晴 此程朝は馬畢る鐘の素こき夫々朝飯多分五時給候後直に  
經書の日課に懸り候四ツの鐘打候と行水廻り申候此鐘に組頭出席也行水に繼上  
下に替候御用之書物に懸る四ツ半過位組頭居間參る御用談有之夫  
々差圖いたす九ツの鐘打候一且組頭退坐其内晝飯給候又々組頭被出候  
御用談有之八時うち候暫候組頭退坐直に四半帳の秘書寫懸日課二枚  
宛也畢る通鑑よみ申候七ツ打候夜食給候夫々劍術か槍術に懸り候はや

薄暮に相成候島國故夕日く又行水候燈下れ迄さし申候に歌書をよみ日記を附又通鑑  
をよみ申候五半時に用人を給人迄悉機嫌聞に出る逢候而少々物語いたし  
ひま遣候畢る近習侍共同斷出る夫々臥り候日々のこと凡如斯也少もひま  
なし少もひる寢と申候事例の如くいたし不申候故五時過にはねふり附申  
候半時迄は忍ひて起居候尤横雲たなひく頃は起候髪は結候得共月代はい  
たし兼候程のくらす也 ○けふ淳介のかかり居醫にこゝろみに逢ひてきゝ  
しにかなりなる醫師也名は玄伯なれ共此邊にては山なすの色よしなるへ  
し玄伯か黒き羽織にるり紺のかたひら着しもおかしき事也 ○慎藏出精勤  
方ことよろしけふも銀山は行て敷をりせしといふしきおりといふこと  
は前にもいふ十丈もある井戸にはしこをかけ或はよこ或はなゝめに又は  
右又は左と金銀のつるを追ひて岩山を穿ちたる穴にてもとより明りなし  
燈をさけ裸に成てつむといふものをかふりて行こと也近く申せは富士の  
人穴に入たる仁田四郎と井戸ほりをかねたる業也夫故給人など入もの稀



也慎藏出精故にかゝることなせし也よろこはしく候○民藏茂兵衛貞助重助夕かた鐵砲の稽古頻也いづれも必魔除になるへしといふ程の上手共也右へ附て左へ當り上をねらひて下をうち其身にさへねらひ定りかねたるよしに承るいかに神通を得しものにもかゝる玉の行先知るへき様なしよく鬼神を泣しむるといふは此ことなるへし矢おちの邊は海と山計に付安心のこと也

○十三日 晴 夜月ことよろし淳介かかゝり居る醫師に山にいりてこかね穿もの共か四十をこへたるはなく多く三年五年之内に肉おち骨かれて頻に咳出て煤のときもの吐て死する救かたやあると聞しにかの職を業とするものは賤かうちには錢遣ふこともなれは朝夕に酒と色とに身を沉めて夫かため山氣強く受て死する也漁師農父に年々に冬にいたり事なき時は金礦に入てかの山大工と稱するものと同じ業し或は山大工之内にも与風妻迎へ子供あるものゝ類にいのち長きもあり山かたの役人に

は其職に久きものは其職を轉し三年四年のうちに眞の咳を發する時は金礦へ入ものと同じく煤を吐也され共夫にことはなし金礦に入て死するよりも酒色の爲に病を生するかた甚しと申せしさとおもはれ候慎藏か申せしは十七十八位のものもありとそれらも三四年にては死するなるへしおしきこと也慎藏かわつかに一時に足らず穴のうちに居りしにゆあみして鼻打かみたりしに矢張鼻より油烟出候よし尤其日計也よし也其ことくならむには久敷業とせしものは油烟のために腦破るゝといふ説も捨かたきにや○夕かたより鑿を遣ひ申候嘉十郎と組打なといたし申候はつ秋にたちそめてより旅衣袂に露のおかぬ日そなきかゝる歌日記のうちにくらもありされ共少もうくは存不申候歌故かく申さては風情なき故也我かゝる心也とあなかちにおもはれ候は實に當惑事故こゝに記す

山人の住家もあきて故郷をしとふや人のまことなるへし



されはとて兩親もいますたとへいかに君の御事によつておもひ捨たれはとて妻子もあり更に故郷にこゝろなからむには人にはあらし且誠のことにもあらしよつて又右のことく咏せし也

○十四日 晴 ひる後組頭と對話中八右衛門より之御用狀參るさしたる事は無之候得共民藏之文通委細に相考候得は順作は中々一かたならぬ骨折にゐさそく心配のことゝおもひぬよく傳へ候へかし○ 母上様并御長屋之 御兩親様御機嫌よきと之御事何より之悦其外別條もなきよし是又大慶に候度々書狀差出候故返事と存候處いまた御覽も無之候由右は川留の故なるへし遠國のこと都あかくの如しいかにおもひてもいたし方無之候灸并くすりの脱アカ奉畏候灸は日々三里をはしめくすりも怠り不申候○さとよりの藥とゝき申候平安散受取候  
うたの返し

まこゝろをこめし藥の名にめて、平に安く歸るをそまて

わかせこかおくる藥のかも深みあかきこゝろを朝夕にみむ

母上より御自書に而朝夕頂き候へとのこと記し玉ひし護符のこと御姿奉拜候こゝろに而上下に日々着替候而

東照宮奉拜候時必いたゝく事也され共かしこくは候得共護符故忘るゝことまされゝはありて深恐入候

江戸は御扶持米四十五兩之由當國は町賣も三拾五兩より安し壹石に付六貫五百文位也御藏の御拂米は二十壹貳兩位と覺候近來になき豊作とて百姓共悦候只あつきにはこまり候行水頃迄今日も素かたひらにて少し汗出る位也貞助貳三日已前はたかにて臥したりと新十郎は夜寝かね候由に申候某は例之わた入にかひ卷に御座候御安心候へ今昇降器を見候に八十五度也時夕七ツ半頃也○夜四ツ頃雨戸を引候處いまたひとへ衣に而汗出候間無餘義單衣之上にさらさの夜のもの腹の上置候而臥り申候

○十五日 昨夜夕立けしきに而今朝も雷鳴也珍敷事之由也八月十五日



は千里晴雨を同じくすといふ古人の話あれと甚以無覺事也よつて今日の  
 天氣左に委細に記之○江戸詰中澤善次郎今日到着也八右衛門に笛吹嶺の  
 山中の休にて行逢て江戸より御用狀八右衛門に相渡せしよしを述且八  
 右衛門に面謁せしに同人の腫氣大に減し面部など常體なりといかに  
 と日々に申せし其こと承りこゝろおち居申候○けふの祝ひとて用達より  
 小鯛いなたあしを差出す鯛少をさしみにしてもものしぬ○團子いも至る青  
 き小さかなる柿枝豆など取集めて三ほうにのせ椽に出し怪けなる花いけ  
 に尾花をたをり來て挿みてその脇にあり是等は臺所のことするものとか  
 の用達の佐助男のはからひのよし也佐渡奉行のこの佐助へは年々によほ  
 との奉公するなるへしいさゝかのものも此ものより求むること也彼親子  
 日々臺所に詰居る事之由に候得共某かおもふ旨もあれは用ある時計に  
 あまりに親敷はいたさせす候まして外の商人之類臺所へ參りをるものな  
 し

くすりに入  
 るはしと  
 なるは十  
 みるは十  
 六文といふ  
 助これとい  
 もふかへし  
 へしとお

さしのほる月より外は問ふ人もなきに尾花の何招蘭

ところこそかはれたらちねはらからと今宵はおなし月をこそ見め

何くれと云われしこともおもひ出て月のひかりに袖を露けき

御役所の庭は高からぬ小松山のところ／＼に小田あるか東より南へおり  
 廻し二十丁計の外にみへその山の末おのつからひきくして海へおしてし  
 所は大なる岩に而屏風建しかことくみゆその山と海との間の曲たる所相  
 川の町也その山より海家居迄ひと目にみへ十二日十三日十四日の宵の間  
 はかの松山のうへに月みへて晩照のきゆるに従ひて光のさへわたりこゝ  
 ろのまゝに椽へさし入るゝさま玉のことくきらめくなみのきしにくたけ  
 て雪山の崩るゝことくなるけしきいふへくもあらずよつて椽に立てしは  
 し咏候へとも伴なひ候ものは影のみにてあなめつらしとみし波もおとの  
 みすさましく聞へ庭の池水に入るかけひのたへまなきもさひてもものうき  
 かことしあはれ古郷にてこの咏にこの山水あらむには波のおとは兩部の



鼓吹よりおもしろくきこへかけひの水も玉ならずかとおもはるへきをおしきことにこそ

○未明雷雨五時を九時頃迄曇少雨八時前を七時頃少々晴日かけみゆ黄昏くもり西のかた少晴て入日みゆ○夜六時頃全曇○五時を追々晴四ツ前は快晴八時頃迄同斷曉より又々曇

何事もおもはてひとりなかつゝ心とゝもに澄る月かけ

一とせに今宵計の月かけは花よりも尙をしまるゝ哉

何くれと忘れしこともおもひ出て月の光に袖を露けき

うたひ舞ひにきほ宿は秋のよの月のくもりもいとほさらまし

うくもみめたのしくもみめすみわたる月はかはらぬひかりなりしを

あけほのに沖よりかへる釣ふねは月のひかりをあく迄もみむ

○十六日 曇 風 きのみも夕かたより茂兵衛民藏など鐵砲の稽古専也たれか戯こと申けむ

若きもの用心をせよ勤番は親父もよつて放つ鐵砲

○十七日 晴 きのみ御用狀差出候跡に俄に西北風に吹替雨降出しこゝにては少の荒のよしなれ共海上黒く成荒波けしからぬ體也御役所より海迄一里の目印に一里岩といふあり何程あるか一里隔てゝ常には小なる築山のことくみゆその岩を波うちこしてみへす御役所を三里計あるよし屏風のことき岩ありそれに荒波うちよせてさすがに越へむとしてこへす雪の嶺へさかしまに走登るかことき勢なとよほと烈敷こと也土地の賤敷ものは風雨には頭より濡て何ともをはず歩行也大風にも笠のかむれぬ故なるへし夫故にかしらにしらみおひたゝしといふ○けふは俄に冷氣に成いつれも裕也寒暖昇降器十三度下り七十二度に成夕かたをわたり入也これそこゝの常也と申しぬ

○十八日 晴 今日公事合ありて白洲に出る其内に高七十石餘を百姓に而醫を業とするものゝ後家あり身もちあしくして錢遣ふなど訴る文のう



ちにみゆ江戸にて關東ものみるこゝろにて吟味せしにとしはいくつなり  
や半白髪とりかふりてかたは破れたるを補ひしあと椀ほともあるへし其  
外春等おひたしくつきたりしいともく見くるしき單衣着たり其外願  
人とも着類けしからす見くるしくあはれなる様也然るに昔々運上物多き  
はいかに夫に引替て山々に金あるのみにあらず山川にも磯邊にも悉金あ  
り至る少なれとも往來の土のうち迄も金の氣はあるといふ佐州一國金な  
るへし民の貧なるに引替て寶は多き國とみへし

金の掘共油氣  
めも食すれ  
は五十歳位  
稀に至るも  
いふにありと

○十九日 雨 當國には二十五歳に相成男は賀の祝あり厄年と申候には  
あらず以前は金掘大工に三十をこへ候もの稀也よつて二十五歳になれば  
並みものゝ六十位のこゝろへに而歳のぬわいたし候由昔は金ほり計也  
しか今は一國なへてなす事と成しと御目付役のもの申聞候けふは劍術鑓  
など遣ひし跡に而も裕の重ね着位之事也○今日俊藏銀山の參るに桐油は  
着られす矢張襲に陣笠也風強ければ也挑灯に而江戸の籠の内を紙に而は

りたる如きものあり風流にみゆなへて箱てうちんのこときもの也小田原  
ふうなといふはみすいつれも烈風の國故也

○廿日 微雨 大風南に付海至る穩也○今日月次之講釋有之大書院の家  
來も出る組頭廣間役地役之面々不殘出席講釋之もの繼上下見臺に而入側  
に出る論語三章也おもひ之外相應也尤村學なるへし○七月廿五日彌十郎  
町之天満宮に例月之通御祈禱奉納之連歌有之候而詠草出之

賦何風連歌

治れる御代は一葉の船路哉

其阿

千秋も安く住る國人 御代句

すみ渡る月を楽しく仰みて

保造

ゆふへの空は雲たにもなし

英稠

いか計り嵐の通ふ峰ならん

周明

はるなからまたさむき山里

方守



消のこる外面の雪はそのまゝに 懿光  
とけては結ふ水の薄氷 義恭

中略 二十首

思はずも目覺す枕月更て

昌仙

こゝろも空に聞ほとゝきす

執筆

右一巡也 佐渡のこと大かた此類也學問も歌も其具はあれ共名のみ多し 御代句はちと十一日めきて甚敷僭上に似たりとて笑ひし也かゝる國なればみち引かたによつて一變せは道にも至るへき也惜哉一年限にて物ことの合期なしかたき事

○廿一日 雨 山方役に逢ひて敷うちの事を尋問ひしにめつらしきことにこそそかなかに中絶の敷を取明て大勢人入たるに穴のうちより烈火もへ出て夫に逢たるものは忽に死せし尤其火も直に消けるとそ蜀の火井の類にはあらし陰火なるへしや敷のうちは夏冬も分ちなしいつも裸にてよ

ろし享和の頃佐州に大地震ありて人家破れ死せし人も不少よし其頃も敷内のものは曾而知らすと意外の事共也

○廿二日 朝雨に而西北風強し波の音殊に甚し百千の瀧のうちにあるか如し午後より雨止みぬ然るに陣屋下の町をみるに白雨のにはかに來るか如しよくみれば荒波のくたけてきりの如くに成しを風の吹散せしか雨の如にみゆる也磯邊の鳥吹飛されておもしろき姿也某先年田中の本多遠州に參り英一蝶か金屏風へ圖せる荒磯に鳥の風に吹かれたるをみしに甚おもひ當る也一蝶は一たひ八丈島に流されし人なればかの島にてみし圖なるもしるへからさる也○今日佐州に而今も年々神軍といふことあり其あとに而得たりといふ石の矢の根二ツをみる眞に征矢の如し人作かと疑ふ計也一ツため色一ツは水晶の如き石也肅慎といふゑみしにありと承りしかこゝも蝦夷東北韃靼に近ければおのつから風土相類してかゝるものもありしにや神軍のありしといふあとにて甲賀佐助深く木の枝に射込あり



しを得たりといふ眞に然りやおほつかなき事也

○廿三日 晴 けふは金山銀山より穿取りし石とも打くたきて水に入火に焼てこかね白かね作出す小屋共悉に参りみるおとに聞たるよりも甚しきこと也先其一を申さむに山の礦より穿得し堅石共にわつかに黒き筋みゆ是をこ、にくさりと夫を石の床の上にて大なる鐵槌もて男共數人よりてうちくたき夫をしはく、白のうちに入水もて挽又水のうちに入盆にのせていくたひとなくゆれば銀はくろく金は少し黄はみたる砂となりて出る也大の男壹人辛して負參し石一荷より其砂三分か五分か程出るもありぬその砂とりしあとの石よりも尙寶捨しとねこたといふものをしき或は板の上に木綿をしきてその上を石の微塵と成しを水に和して流す也是をねこ流しといふ木綿をねこ木綿板をねこ板といふ其こと扱ふは女也それをねこはといふ都にも金ねこ銀ねこなといふ浮女ありとき、しかこの女共は月仙の畫きし仙人のこときもの也されと名つけは金銀のねこなるへし木綿をしき並へ或は桶のうちに入てそゝきなとするものをねこの子とい

ふいづれも十四五其外いくらともなく數を経て床やといふへ持行金銀にふ歳迄のわらへ也也金はをとこの業銀はいつれもふいこさすこと迄も女也その銀よりも金をとり或はなまりをさして湯と成し又は其なまりを灰吹といふことにち焼取杯けしからぬ手數也此女共五ツより七ツ迄の間かの方々の辨當にて六十四文位の賃也といふ若き女の髪ゆひてつかの間は百文の賃を得る都のことおもふへき也金銀はかねてもいふことく數十丈の堅石をうかちて取ことにて其取ものは夫かためにいのちをちゝめ其上にちかゝることあり中々十兩の黄かね得こと數千人の手を経ねはならぬ事也よくをもふへき事ならずや佐渡へ來てよくみればわつかのなくさみに十金をも捨るものあり必や天罰のあるへきことゝおもひぬをのかおもふまゝに遊ひくらし酒のみよききぬきてくらし或は人を欺てわつかの事に金銀を得るものは必天のにくみをも受佛の罰をも得へきこと疑ふへからさる也法華經にとき玉ふこと實ならば此こと必たかふへからすとおもひぬ



○廿四日 曇 冷氣也綿入にふよろし明日御用状を出ると聞て  
月に三たひふみ通へともおのか身はなつこそわたれ越の海原  
やよしはし行初鴈にことつてむわかすこやかを母につけてよ  
こし路なる便いかにと故さとにことしは待たむ天つかりかね  
書つくす文たくえてと待ぬれとまた鴈は渡らさりけり  
行かへる鴈はありけれこし路より遙北なる佐渡の島根も

○廿五日 晴 今日御用状差立○今日山大工と申候もの共之不届之義有  
之吟味いたす頬骨あれ色青く二人共に眼光りて不謂して悪黨とはみへぬ  
みないつれも身はかほともの也との分限をしらす日々に酒のみ遊ひ居  
てみるもの聞ものをうらやみ終に身上をも遣ひ失ひ果は身をも遣ひ失ふ  
もの共之山大工とはなる也父母は山大工になれとてうみはせましを可憐  
もの共也其源は十にして七八迄眼と口と之欲に辛抱なりかね候より起也  
山大工之頭壹人差添として出る頭に澁にて染たりしこよりにて密にあみ

たりしものをかふるきつこうかたの單物を着しぬ晝かける龍宮の乙姫か  
侍女かさては戯作晝の龜の人に化したるものゝ如しこゝは佐州也龍宮に  
はあらず美人なしこゝは白洲也とおもひ考る程に驚もしおかしくもあり  
きよつて尋しに金銀山にて重立候ものに限りゆるしかふふることにて組  
頭なども敷をりの時は必冠候もの之由てへむといふもの也昔より白洲の  
冠り來れりといともく怪敷珍きことにおもひぬ

○廿六日 曇 けふは昨日の山大工共の否申渡候此大工共は牢に遣すう  
ちは保養のこゝろにて喜ひ候由よつて急きて落着申渡候御仕置も又外に  
例なし江戸ならば追放にも敵にもなるへきを敷内の幾日も追込候而遣ふ  
ことのよし也中々敵などの類にはあらず難義のものゝよし也○けふ湯あ  
みする時あかすりの縮はいかゝといひしに 母上のかねて夫等之料とて  
色々の縮の切よきもあしきも取交り夫かなかにあかすりの縮は殊更に紙  
につゝみて其ことみつから記し玉ひしをみてことかゝぬ旅なれとかゝる



ものは求なむこともかたしとしろし召てかく細やかになし玉ひしや夫を却る子たるものはこゝろなく従者共に尋けりかしこきことやおもひてかくまてに深くもとゝく御心を旅ねの今にしるそかしこき

たらちねはいかにと計り島根よりなみのよるひる絶へす忍ひぬ

聞傳ふ姥捨山の月かけは今も子ゆへに尙迷ふらむ

○廿七日 天氣殊によろし ひる早したくに兩御藏米海府御番所其外廣惠倉等見廻り候相川の町多分は相通候間前々日々之觸もあり見物殊に夥し狭き往來あとよりつき參る見物江戸ならば祭生酔引廻し之類をかねたるか如し材木町に三百目の御筒火通しを一覽いたす音夥こゝの市中に某かことを木曾山に參り大鱗ハミを切たる御奉行と申ものもあるよしこゝにて抱へし中間の物語也大さ長さなと江戸より參り候ものに聞候よし也○相川町には家並に小便の桶を門口に出し置するめを干なといたし候故臭氣甚し○孔廟に參る參拜いたす御書物等事足程あり二十一史十

三經佩文韻譜等之箱出し有之候孔廟は泉本主水正格別の世話に由來候處類焼せしよしに石基等尙存しぬされ共薄なと生茂りておそれ入たる様也坐敷も玄關も讀書生の居所もありてよき稽古所也○佐渡風俗に都のもの及かたきは子供迄帶刀人に本をよまさるはななくうら店のもの迄無筆といふものなく少々立上りたる町人は謠太鼓又は笙鼓の遊ひをなし大成は能舞臺なとあり候由坐頭を呼酒席に平家をかたらせ銘々一さしつゝも舞ひ又は謠ひてたのしむ事也○三味線其外長うた等の類は穢多非人物貫の業とて賤しみ曾るなすものなし往來なと唄往來候は皆非人也とそ是は可賞事也○今日は途中乗馬也○海府御番所際に千丈壘之岩屋并辨天有之候よき咏也參り見申候さして之義は無之只海中に峨々たる岩多有之候計也

○廿八日 晴 今日嘉日に付例之通ひるも食に菜とするとあり汁は鯛のさいのめに切たるを多く入候ねきとからの汁也ひらはなすいも例のす



るめいか也鯛のから汁めつらしく候壹尺計の鯛百六十文也といふ江戸な  
 らは貳朱以上之魚なるへしこのものは島馬の顔つまり至る小なる而  
 已を見居もとより馬は乗ものといふことをしらぬ國故に昨日の如く爲牽  
 候得は見物夥敷廐の前に立置に子供見物として參る也江戸へ參りたるも  
 の松平加賀守の國に參るをみしと國にて物語しに其供の馬はいかにと何  
 よりはしめにきしといふにておもふへし乗馬にてくら鑑ある馬は女子  
 供奉行々飼置候外みることならずよつて國中擧て乗馬を稱する也昨日市  
 中十丁計乗馬せしか見物にまことにこまり候犬も顔つまりてちんの如し  
 尤小ふり也人もみな小ふりに地役人に延々とせしは一兩人ならてはな  
 し幸三郎を連參候は國中擧て恐れ一見して國治り可申をしき事也  
 ○廿九日 晴 頃日御用狀曾不參候處野田又左衛門歸國せしに付呼出  
 相尋候而當月十二日までの事荒まし相分る御用狀は篠山に十二日に遣し  
 候よしの所いまた不來候篠山御咎中順作出精取計行届候由等承り其外留

守宅別條なきよし相分り大慶候○八月廿五日連歌有之候由に懷紙差出

候

賦千何連歌

月清き光りやいたる四方の秋	其阿
田面おしなへ稻葉かるさと	聖謨
雨はるゝ山の端遠く鴈なきて	春常
船路のすへを明はなれ行	保造
波風もをさまるほとやしらる蘭	英稠
かすみてたてる浦の松はら	周明
白雲にまかふ櫻の花咲て	方乎
むかふ旭のかけのゝとけき	懿光
飛つるゝ鶴のこへすむ半天に	義恭
山よりおくはいつく成らむ	直幹



以下略之

○晦日 晴夕かたか風雨○追々居馴候故右に付流弊の程はかられ不申候  
間書取を以家來共の計取締申渡候○例月の通書院に於論語の講釋有之候  
○今日はしめてこのそはを物しぬ至る黒しされ共味よろしこれは見か  
け起しなるへしなといひて笑ひし

○九月朔日 曇 夕雨 例月の通書院の出廣間役其外地役人并御用達共  
之禮受申候○昨夜亥刻御用狀到來之由に於表より用人を以差出候十二日  
十四日廿三日出之御用狀一度に相届候其内に鳥居八右衛門御役御免小普  
請入被 仰付候由之同役之達書有之候甚以恐入候士は弱み有之候は  
被參不申候事と存候異變有之手に餘り候時は御役所は遠國奉行之墓所と  
決心いたし候義に候さりながら國中靜に於追々をり合候體安心いたし候  
義に御座候とても出來候譯には無之候得共民をみることに子の如くいたし

少しもたまし不申正直にてこのろのおよひ候程 公儀御仁惠之行届候様  
いたし其上にも百姓不承知に候は、構ひ不申候氣受を取たかり候より其  
氣受の取たきと申候廉私に相成締も出來不申御仁惠もにせものに相成候  
間氣受不氣受之無貪着只實意に心を用ひ申候鄭國の子産さへも誰か子産  
を殺さむと迄はしめはうたかひてにくみたるよしなればとてもわか輩に  
わるく不被申様には出來不申候間人は人よわれはわか私のなきようと日  
々心懸候而心の及び候程身をくるしめ申候下を彼是申候よりは身をくる  
しめ候かたよろしかるへきとの考に御座候頃日は菓子も茶も好はいたし  
不申候よつて先達の中參り候羊羹を忘れ今日取出候處箱へ附候かたは虫  
を生し候間悪く成候分はけつり爲捨其外は爲切候而磁器へ入置候ちやも  
食事の時給候外なくさみに一度に而も爲煮候義無之候まして菜好みなど  
いたし不申候乍去家來共と申候内俊藏よく心附候而爲給候夫も甘く候間  
今一度とは決而不申候尤私如斯いたし候故家來は外出留にて給人立合事



の歸りも廻りみち不相成まして用人共末々迄地役人の内頼等に紛敷義いたし候も少もゆるし不申候由之書付相渡置候若き物にも門留いたし一度も出し不申候は不慈悲のことくに候され共一度より二度三度に至りては不慎なと有之越後地に追拂候時は一二度外出爲致候は慈悲には有之間敷首尾よく相勤候而歸り候は、いつ方迄も召抱候もの有之扱當人の身も金銭いり不申それこそ實の慈悲なるへければこゝろへ候へと申聞置候○田口五郎左衛門水谷又助之事扱々恐入留守中と申別而氣之毒に候五郎左衛門は父加賀守と一旦同役いたし別而朋友之義をも結ひ候而度々異見等いたし候人之義又助は家内之媒介は某に付何とも可申様無之氣之毒至極斷言語候義に有之候○母上様 御養父母様御幾嫌能と之御事別而恐悦之至に御座候其外一族別條無之候由何より之義に候鍬五郎之日記相届候おもひの外相分り候乍去けいにても入認今少よく分り候様さて事を記候義くわしくいたし度候某十六歳之頃は頭の出候親類書其外遠國之

贈答等都取計今の桑田歳兵衛と既に大議論之交通等有之候尤日々出精之由は安心候遠國は如何様にもいたし家來迄も取しめし候得共留守之事は老人妻悴に無之候而は奥のこと不參其外は留守之家來第一に付何卒御養父母様御實母様被仰談さと鍬五郎一同心附候而取締第一たるへく候順作の沙汰宜候而扱も安心に候大藏の不快よろしく候悦しく候○市川にも水谷の一條扱も存懸不申義氣之毒に可有候間よろしく此日記一覽之積に付別に書状は出し不申候○おさと不快之由段々母上様之御書鍬五郎之日記に承知候定而出立前のつかれも可有之候補養第一たるへく候くれくも食味等心附可有之候尤快方之由も承知安心候○河村之老翁よく屋敷の世話有之候由千萬々々忝候是も書状は出し不申候間よく御傳可被下候○小笠原のこと用立の品返却有之候由同人寡欲の君子返却に氣之毒に候並の人に候は、とてもと存候又入用之時はいつにてもよろしくよく御傳可給候○幸三郎之日記忝候可相成は今少し委細にいたし度候幸



三郎は御舊跡調いたし候故に可有之候甚古雅松平宗忠日記の元本にいたり以後は増補追加等ありたく候○母上様御慰にも可相成歎と之思附に箱をつくり便の序わつかなから干魚呈上候定る例の通り人にも被遣勿論御長屋に之被進に相成候事と奉存候此箱は序には御歸し可被下候通ひ箱に御座候晋の陸機かことおもひ出候ま黄耳と申候犬故さとへの玉章を首にうけて往來せしよしありしかと覺へしき、傳ふ黄耳にかへて古郷へ往來のためとつくる此宮

○八右衛門こといかにも恐入夫故家來末々迄今日を三日之間高聲等差留某も乗馬刀槍のことすこきすふりの類迄休み候あつゝしみ居候勿論組頭等には沙汰いたし不申全某一己の遠慮慎まてに候○大坂より高橋も御下りに此ほとは御逢も有之候かと存居候得共一向に沙汰無之左助殿を御書状にも曾る御下り之事有之不審に候御序に御様子承り度候

○二日 曇 夕雨 樂器のことに付孔廟之様子承り候處磬琴も無之候由也尤奇成はひちりきを吹候ものは例の玄伯といふ坊主の醫也釋菜の時附

ひんにる裝束し吹たりと承る右之玄伯に樂器のこと承候に合奏など無覺束事也昔上杉の家來三月程逗留せしものよりみなく習ひ受たりとされは實に樂出來候哉いかあるへき○燕の事承候に海中没溺を恐れ候る渡海の船はやとりて歸るよし也されは山中に蟄せしかとの前の論引當かたし

○三日 曇時々雨 今日には綿入一つにては少々寒しいつれも足つめたと申しぬ明日山に巡見として參る積水主共天氣よろしといふに付定め候無覺束事也

○四日 朝よほと雲有之候水主共は天氣よろしひる後品に寄俄の小雨位は難計なれ共一體之天氣はよろしと申立る昨日より之義無覺束存候まゝ出宅候處水主の申候通少も違ひ不申候尤晝後雲立惡敷相成候得共暫に忽晴雨は無之夕方はのとか成天氣也水主共之見定感伏也徒三人士四人用人給人廣間役目付使役召連候途中に見物例之如く甚し 御威光のほと畏



恐入候銀山はいつれも二十四五丁内外也所謂中尾清次青盤雲次青盤雲次は金山也鳥越市を瀬以上六ヶ山也中尾其外は銀山に金も出る也中尾間歩の脇に矢來を結びて江戸水替小屋あり兇惡之もの共計に候得共こゝにては鼠の如し曾而地のものには一言もなき體也不思議成もの也惡事のものあればこらしめのため二尺八寸四方程之箱之中に數日入置候事也其上に而被敲第一之仕置は金銀山敷内へ追込とて幾日も入置事也中々江戸の牢の如きものにあらずいかなるものにも右には恐入候事のよし也中尾間歩へ参り見候處敷内之入口を釜の口といふ釜之口といふ所は穴くらの口を横にあけくりの丸太に而圍たるか如き九尺四方程の所也そこを敷内へ参り候得は敷内の人足共銘々釣手のある油皿へ燈心五十本宛も入れたるをともしつれ候而貳三間之場所案内いたすそこにも敷内にも金銀掘候體いたし爲見申候敷内へ參候もの共は日のめをみす候故色青く石の粉惣身にかゝり候上右之燈の油烟に而中々このよの人とはみへぬ也かの三十位に而

死するもの共也され共祝したる歌うたひつれてこかね白かね穿さま成こといといさまし其外に石をあらひ金銀の有無を改むる小屋ありいつれも女也一見して夫々直段分けのかますの内へ投入ること至而速にて手練驚入候金銀山は近く申さは火うち石の四五里四方なるものにも夫を所々穴を穿ち入て金銀を採る事也山悉絶壁なれ共岩のうへに松生し殊によりし無名異の出る穴二ヶ所あり其邊の岩いつれも紅也金銀敷の穴は穴のうちよりはけふり出て油烟殊之外匂ふ也六ヶ所之山十丁前後に散しあれ共いつれもひとつ金北山といふ山の麓也佐州は案するに海底をみな此山の根なるへし金銀の出る石は江戸の火打石の一段白きものにも其内に鐵おなんといふか如き色の筋あり其筋即金銀也銀はくろく金計の筋は黄色のもの少しましましりみゆ也銅は金のはくを置たるかことく至而ひかるもの、附たる石也金銀銅いつれも同じ石に而一石を三品の出る也只金山と申候は金多く銀銅少也餘も同様也今日は廣間役其外に召連候ものには辨當並



もち茶等遣す事也組頭は菓子と茶計也大吹所は一度に百貫目のものを吹候吹子もあり夥敷事也市之瀬より雲子に行山みちの高き所に殿様平といふみはらし宜所ありこゝにてしようきにかゝり暫休み候此みちの山中左右夥大成福壽草を生ずる所也

○五日 曇 夕雷雨夜晴又雨 けふ江戸に往來箱出來候則黃耳と名つけ候○昨夕行水せしに顔ひりくといたし候不思議におもひしに鍵すこきにて汗出ておもへは昨日のみちにひのきれたる也庭にはつたけ出候由に付尋ねむとて脇差をさし庭におりしに腰いたし刀の當る所はれたるへしとの様は肩輿計に體女の如しとみへたり治世の武士難有事のさて心得あるへき事也○此節平日の持病さへなきか如し至る健也

○六日 晴 昨日地役今井麟平か宅に持傳ふ 順徳院北條の爲にこゝに御狩なし玉ひし時の御物なりとて御硯御短刀御つり花活を拜し見るまこととその物なりや否はしらす申傳にて從來持傳へし也御扇もあり御硯は

唐石の類にて梅の彫あり御短刀は無銘にて錆多いかにや更にしれす御花瓶は差わたし八寸計の子安貝といふものに似たるもの也○用達より鮑の疵ありてくしこにならざるもの二つ初て釣得たりとて比目魚貳ツを贈る所謂今とりたりし魚なれば味ことによしあわひのわたたと實に江戸のものとは別段之事也ひらめ尤よし荒海の魚は味なしと承れと某はさとはおもはぬ也肉のしまりよくさらくとして却るよくおほへ候

○七日 今日御用状出る今日晴なれ共冷氣は甚したひなくては足ひゆるか如し○明日彌十郎間歩と云銀山に可參旨昨日申出し今日尙又改申達す目付役之もの道順書等相伺可然旨申達是かりそめのことに同事也  
○八日 天氣殊によろし彌十郎間歩といふ銀山に參る往は駕にて十町計り參り水車にて金銀山の鍵といふものをこなす所は參るに人力を用ひす水車き又はふるいなといたすそこより駕はをり戸といふ所は馬共に廻し組頭山本也二十年來の工夫也と云丈右衛門同道に田口加賀從弟彌十郎の間歩は參る險阻の山坂五十町也か真寔なる人也



らむとう坂をこへ笠取嶺に懸るこゝよりは能登越後の山々よくみゆる惠  
 ひす湊より國中筋といふこゝにての打開たる耕地みゆ巾五里餘あるとい  
 ふ今日は至るのなき故漁舟夥し木の葉を流せることく沖にみゆ笠取嶺に  
 てしようきにかゝり遠目かねを出し又は茶を煮させなとしてしはしいこ  
 ひこゝより下坂八九町計にして彌十郎間歩に至る役人共御門の前に出迎  
 ひたる様おくの銀山の釜の口是は穴の入口也神を祀る額等遙にみゆる晝かけ  
 る大江山の鬼の住家の門前に類すこゝにて夫々のこと畢り持行たりし菓  
 子を組頭以下の振舞ひぬ組頭廣間役家來迄に緋太巻を出すこと例也こゝにて最上  
 子葉子也近頃江戸へ参り學得て製すと二日も前より命せ  
 されは出来夫々もとのみちへ三丁計返り至るほそき山の腰なるみちを廻り  
 行こと二十丁計にして二つ岩の御林に至る少々の木立也此二岩といふは  
 大成岩の道の左右にあれば也こゝは昔より妖怪のこと種々ある所也妖怪  
 とて可畏ものにあらず馬琴か着せし佐渡志にみへし狸段三郎か住居也今  
 も岩穴あり窓のこときものありと今は怪敷ことなし享保の頃をり戸の御

此盲人のこ  
 とよく聞候  
 其かものし  
 神かものし  
 いふものし  
 あひふもの  
 らす二かへ  
 後と風は歸り  
 たり我は佐  
 州三ツ岩の  
 段三郎方世  
 参り此居る  
 話に成居る  
 也よく世話  
 をしくる暇  
 乞ひて参り

番所に参り居し廣間役寺田權夜分妖怪に逢ひて一刀切しまゝ其行かたを  
 しらす其夜シハ町の醫久保田のかたへをり戸の在のもの也とて急病人の  
 迎参りし故行しに常にみなれぬ豪家にて家内貳三十人計も暮賑しき宅也  
 家のあるし老人夫婦出て孫なるもの不慮の疵受たり療治し玉へとて十三  
 四歳計の童の足に刀疵あるをみせたりし故療治して歸し也その豪家曾あ  
 近郷になし段三郎か住家なるへし其外御林木植立とて参りし地かた役の  
 もの贈るとて餅菓子入たる折の右の岩の上にあし事度々也夫は四五  
 十年前までの老人はたしかに申せし也其外彼にたふらかされて奴婢と成  
 りて數年つかはれ立歸しものありされ共其後はうつけて人事もしらす成  
 し也其外十五年前佐州の小木湊に盲人の旅人参り二岩の段三郎と申せ  
 し人はいづくそと尋ねし故それは名たる狸にて今はみしものもなしと  
 いひしに盲人の申せしは夫か一人の子あり神隱とかいふものにて往かた  
 をしらすしかるに伊勢にてと風知る人に成しものゝ申せしはその子は佐



暫たりと申し  
又立出ると  
すかよつて  
人は佐州の  
の佐州の  
とのおもひ  
來しおの  
は大小の  
二ツ岩に  
のツカ何事  
なかく何事  
も宿は又元  
也宿は又元  
湊の宿は又  
に尋も段の  
文の事あり  
大の事あり  
日奇の事あり  
あすの事あり  
の如し

州二つ岩の段三郎方に居る也かの方へ行てき候へと申せし故はるく  
參しに二岩は妖怪の住家也と聞て力をち魂きへてすへき様も候はすせめ  
てはかの岩ある所へなりと一夜參るへしとて盲人の二岩のある所を審に  
聞て夜ふけて立出しか其行かたをしらす夫はたしかにまた二十年も經さ  
ること故いつれも知り候へと其外他國にて段三郎こと甚しく申のしり  
金錢をかし家具をかすなどの説あり土地にても色々のこと申せともいつ  
れもわけて疑敷ことにて奉行の聽に達へき程のことなし右々事共は疑敷  
うちにては先は近きことにてたしかに人もしり古きことにては先はたし  
かに申傳へ候得は物語候由附添參りし目付役永田與八郎廣間役吉田藤助  
の物語せし也その物語のうちにはやゝ時も經しまゝ又山みちを十町計り行  
しにおり戸の御米くらの脇へ出たりそこを馬に乗りて十町計にして御役  
宅へ七ツ時過に歸り候〇今日はしめて鱈た漁せしとて甲賀佐助より差出  
す今海よりあかりしよし也江戸になき魚なればよくみしに鹽なるものと

は形大にこと也腹大にして丸き魚也さしみと成して物せしに味別段也鮮  
けき魚は物せしかとかゝる美肉を食せしは初也さしみ白きことひらめ  
よりもしろし更になまくさ氣なし至而肉柔かにして先かつほの柔さ也身  
はさくくとして至而軽くさて味ありてさしみの第一なるへしはらわた  
雲わた油わた其外の名ありて味大によろし雲わたといふものは白子の類  
とみゆ油わたはあんこうの血わたの類なるへし豆腐しるによろしといふ  
煮たるものはこちとあいなめをかねたるもの也身よく一ひらくにほく  
れ柔にして甘したらは病人も給さしみは過食しても小便は多くなれ共腹  
にたまらず至而早く消といふ寒國の魚にて魚の雪に類するもの故鱈の字  
あるも知へからずと覺ゆる也かく聞は江戸ならば夥物すへけれと用心に  
て松魚のさしみにくらへその半程を物しぬ鱈の江戸にありなは中々中人  
以下の食にあるへからず必あんこうと肩を並へ其上に出へきもの也可憐  
北國より出羽蝦夷の邊に夥漁するもの也よつて多きもの故かれは物をし



みせり鱈を客に出せりなと申せしよし也やすき時は大魚一尾百文にいたらすといふ佐助は用達に刀かけつくへより釜たらひに至るまで彼に申して辨し米のつき入半割あづきの小買も佐助也一ヶ月の取引中々二十金にくたらすよつて佐助より出す肴は先役より申送りにて受る也佐渡奉行は俸米過半かれかものなるへし其替りには實の用達にて日々用聞として參る也國中巡見の時も召連る也奉行より鎮主の祭にはこの位何々の時如斯と悉しりて彼にて辨する事也夫故萬のもの、價おもふへき也佐渡にて下料のものは女と魚也と奉行の家來申せしよし其外は奉行の買物江戸の倍より高かるへし月壹朱の圍ひ女此こといかくみりと水金町といふ所の御免の遊女町へ行一朱にては江戸の壹兩ほととの遊ひに准するといふ家來に世話のやけ候も尤也され共此度の我家來共夫等の患ひ今日迄無之候いつれも箱入の少年なるへし

○九日 晴 重陽に付禮を受ること例のことし

さくひことかさねてよきことのおれと都の便をそまつ  
 あやめふきさくのかさしも旅ねにはあるやかなしきやかなしき  
 たらちねをなくさめかてらこむ秋はともにかさむ庭の八重さく  
 みやこなるわかはらからのうちよりて母にすめよさくの盃  
 うちかさねさくといわると諸人にあほかる身と成しかしこさ  
 いにしへをおもへはうれしくかさね島根のさくけふにあふとも  
 きくかさす日こそかはらね目にみるは磯のあら波蟹のつりふね  
 たらちねのころをかけし冬衣きてみてそしるあつきめくみと  
 ○十日 例の風雨也○田中從太郎廣間今日初逢試候佐州の學者也なる  
 程と存候揚り屋に參たるもの也牢内に熱を煩候ものは牢内の傳法に  
 タマリントフ蠻藥店にある芒消砂糖此三味を細末にしのみ候よく熱氣  
 を消すると物語候大食のもの必ず死と尤なること也左もあるへし

貉邱記



距治府東南數里。而有兩巖對峙焉。北曰雄巖。南曰雌巖。雌雄同貌。全身被蘚。其高九尺。袤稱之。兩巖間澗。二尋。俗呼曰二巖。相傳野貉穴居之外門也。貉名團三郎。從卒衆多。開國以來。栖遲乎此。變幻出沒。妖嬖不測云。余壯歲以監鑛事。日過巖下。未嘗見一妖怪焉。一日方夏日炎赫之時。就巖陰憩少焉。一老樵夫來。投擔取涼。乃相與鑽燧吹煙。因問曰。樵汝知貉所居否。曰。就雌巖而南。踰山入壑。荒蕪溜濕。而多蚰蝸。故人不取近。余貸之使導。有難也。強之而後可。乃攀崢嶸。登數百步。漸下入壑。榛莽荆棘。繁蕪無蹤。樵以杖左右挾拂而下。又百步餘。遂得貉穴。穴三徑三尺餘。其一則不足二尺。穴口上松栢輪囷。枝條旁午。森森鬱鬱。盤石疊出。雲蒸煙流。寂然不見有一物。唯風聲蕭索中。聞啼鴉耳。吾以爲彼果能爲怪異。則樵夫卽此也。故使之先導。以縱其所爲。樵則樵。而非怪也。山中亦無有一異。然則世說三郎之怪。嘖嘖不輟者。皆女兒鄙俚之語。非有證跡也。唯三郎傷食。請醫。及詣伊勢神宮。屈拜京師佛閣者。最爲奇談。天明之始。老醫中川某者。家於府下。業大行。戶外履滿。一夜有叩扉者。曰。郭外邊有病者。急邀請治。關戶視之。具肩輿提

燈。來迎者四人。某乃取藥籠上輿。昇走伊軋。急速如飛。忽見高門。闈人跪伏。入則堂宇壯麗。机戟森如。巖然一貴侯家也。嬪介延入。病者在褥。覆以繡被。環以金屏。嬪嬙二十餘人。爛乎羅列其左右。某欲診脈。病者掉頭不肯。請問腹狀。低首可之。某乃按之。傷食無疑。且痰飲塞胸。高可吐不可瀉。瓜蒂之性也。探藥籠無瓜蒂。家老出曰。請使人走藥鋪。某因筆於片楮與之。曰。瓜蒂二兩。頃刻而得之。歸。某手自煎飲。忽吐赤豆飯。及腐鼠。嬪脫紫帽。收鼠去。使醫不見。既而病愈。某於是乎氣始定。熟回顧其終始。疑怪之色。見面。病者拜謝曰。公幸勿異。吾是野貉團三郎也。向者受診時。吾慙我非人類。今既不可掩矣。不敢復庚。幸得先生神方。華枯肉骨。洪恩何報。圓黃三十兩。白絹五匹。聊表寸忱。卽呼籃轎送還。是藥鋪小西六兵衛之所語余也。其家藏彼瓜蒂紙。以到於今。六兵衛與余隣。且爲同甲之友。必不余欺。又文政四年三月。瞽者音一者。目京師來。國法旅人不得私留。必告之官廳。音一因請曰。瞽者音一與府外二岩團三郎有好。伏冀款晤之間。限三十日逗留。官吏大怪之。曰。一州戶籍。無稱團三郎者。是婦兒所口野貉之名也。汝雖目盲。亦人也。



與貉何好。音一愕然曰。小人在京師。業箏。去年四月。京師有社祭。某家召余曰。今日有貴客。子爲鼓箏。卽歌一二闕。客稱善。呼酒罄歡。客曰。吾是佐渡人。曰。團三郎者。今齡垂四十。猶無嗣子。故詣伊勢神宮。及京師靈祠。祈求有子。歸路厝拜北陸。與羽神佛。艤於松前。八月歸鄉。今日幸辱良工一曲。可謂好因緣矣。子能不緩必來訪我。吾能富汝。乃書鄉貫姓名授余。如以十萬金而別。今是以來問。何其事之奇怪也。乃遂往二巖。呼曰。京師音一來。團三何在。屬氣叫者數四。而絕無應者。唯。有山禽溪水之聲耳。豈團三徒欺音一邪。何其不信也。余近歲祇役赤泊。里人佐藤某者曰。吾家商舶。文政三年八月。船發松前。風遽惡。船子二十三人。中有歸鄉之客。年三十七八。失其名氏。一時盡葬魚腹。余聞之。悽然。以爲音一來佐渡。在文政四年。而曰。去歲在京見團三。團三八月歸鄉。則其年月。與佐藤所云三年八月相符。而艤於松前。亦與舶覆松前相符。所謂歸鄉之客。是團三郎。然則團三既已而死。音一之來。在其死後耳。宜哉。呼不應。嗚呼。團氏乎。既死矣。今也則亡。

加藤典義記

御尋に付奉申上候

大坂座頭音 之一

右之者差添之もの同道六七ヶ年以前金北山參詣として私方の罷越十日計も逗留いたし私に相吐し候譯は右音之一弟平野屋次助方に去年中佐州表二ツ岩團三郎と申ものに御座候御人體見定御願申度義御座候由申候に付用事之譯合承候處年來心願に當所天王寺并住吉兩所致參詣度旨書之内は差支有之何卒夜中御案内御願申度段申之候其節次助申聞候は自分は主人持に而日々主家の通ひ勤之身に付今晚案内に罷出候而は明日主人に相詰候義相成不申候間別に案内人相雇ひ遣し可申旨申斷候處何分外之人に而は難儀之旨申之無據譯合に罷成次助案内いたし右兩所參詣爲致候よし右兩所參詣相濟夜中右團三郎出立いたし其節申殘し置候義は明年は佐州金北山參詣に渡海可被成其節は急度御禮可申旨申之候處拙者義は主人有之候身分に而中々遠國に罷越候義は相成不申私



兄に座頭音之一と申もの有之年來佐州金北山參詣仕度心組候得共路金等に差支罷在參詣もいたし得不申旨申聞候處いつれにも佐州迄渡海いたし候得は今度之御恩に金子座頭殿之喰續相成候程私を相渡可申旨申之全右團三郎申口引當にも不仕候得共右咄合も有之候に付今日迄七日之間夜々團三郎通行穴之罷越候得共何も不思議無之甚難義仕候よし私へ相咄し候右御尋に付申上候以上

天保十一年九月

旅人宿 出雲屋庄右衛門

右之文章并庄右衛門之書面とも今日廣間役吉田藤助差出八日之下に記せし物語よりは此かたよろしと申候

○十一日 風雨也 いまた初鴈を聞かすなとおもひ侍しに例の佐助男のかたより今得し初かりかね也とて鐵砲のあとありていまたはらのあたり暖なるをもて來をくりぬあはれなることにこそ

初聲もまた聞かぬ間に鴈かねをあはれ狩人家つとにして

故さとの文かけてみむかりかねのたへし玉の緒つなきとめてよ

狩人はうき世わたりのせにかはるものとはかりに得しや初鴈

○十二日 晴 きのふの鴈を我もこよひ暮てもものすへし家來共にも給へ候へと申せしにあすのつき見のこと、民藏の申せしかは

てる月に初鴈はよけれともかゝみをぬきて樽まくらすな

此ほと上下酒を禁し居し故かくは戯し也

○十三日 晴 夕かたより天氣殊によろし○佐州に伊勢の師職を敬ふこと殊に甚し百姓共は御伊勢様と唱候而彼か浴せし湯を飲ものあるに至る邊鄙太古の風残り居可賞うちなるへし尤暮より春まで居る村々の初穂千兩以上と承る國中に略曆なし此程來月のことをしらす清朝の人の説に五十八年以前の曆符合すといふことありて吟味方入江進八郎に先達而しらへさせしに實也けにとおもひ出し五十八年前の曆をとりよせてみしに當年と大小の類は大にかはれり春秋二分夏冬二至等は一二日をたかへて



支干迄符合すよつて來年より五十八年前をみるに正月閏月也曆の符合せしはよけれとも正月の閏には上下一同大に歎息す五月可參を七月參りしはおもはぬ也○河島才右衛門父は母上從來の御懇意也昨年彼か没せしを聞にあはれ成事也才右衛門は養子に而妻は彼か最愛の娘也わつらふことありて才右衛門計此地に來り至る幼年之次男之妻は父に預置しに江戸にて右の妻も死し才右衛門か養母も又失ければ泣々其時七八歳の次男を具して佐渡へは參りし也され共此國に而は重き御役人に准し候人の父故外出もならず幼年の孫を相手に而朝夕少も早く江戸へ歸りたきよしいひくらし日々も引をはきて庭の内をいく度となく歩行し又は好める酒をあしたに神拜みする時より給はしめて日に三たひ四たひものみ聊心を慰けるか病を生して昨年死せりとこゝろのうちおし計られて可憐事也此程才右衛門は右之次男十一歳なると其身只二人にてあとはことごとく佐渡のもの也心細きことのよし歸る期知らぬ勤番也

○十四日 雨 けふ朝海上の眺望奇絶也佐渡の地かたは晴にて海上一里前後のあたりより四五里計もあるへきか海ふかく又薄くけふりの如く湯氣の昇るかことくに成て浪の色まで變り雨ふり居る體也其うちに大なる虹顯れ虹の邊をかもめなるへしよくみれば白きもの飛かふ也扱能登のかたは晴にて眞帆かけて行船みへ晝かけ共成かね候體也かく様々のことみゆるは海のみわたし大なれば也家來共と物見へ行て暫見居るうちに忽に雨來りぬ終朝それ雨ふると詩にあることく西にみへし虹なれと七ツのさかりまで雨は降ける遙にみしと近くみしとはことなるへし○けふ四頃に御用狀參る養實のたらちねよりふみ給りぬ何事もなきほとめて度ことはあらし

玉章をくりかへしつゝたらちねのつきぬまことをみるそかしこきことなきの文字にこゝろもおち居つゝうれしくひらく古さとのふみ古さとのおもひは磯によせかへるなみのよるひるたゆる間そなき



佐渡よりみる越後のかた則都のかたにあたる

ふるさとを彌なつかしみなかもやるこしかたかけてかゝる村雨

新右衛門より日記かたしけなく候この頃の書尙一覽之上にゐるとこのたひは返書なし○おさと不快追々全快の次第母上の仰にて承り候めてたく候○楯五郎の日記なきはいかにそやこゝろへかね候幸三郎は傳奏によるものか○市川翁の不快一かたならずと承るいかにや老人故よく傳へ給り候へ何か口にかなひ候ものにてまいらせ度候○楯五郎并河村翁に御つたへ候へ手馬たつないらすと承候此ほとはかの馬よくかしらをあけ口も強からず早みをのり候もたくにはなり不申候されは左の後足トモはいれかね候馬屋のもの御隠居様のかたき仰付られとてよく申出候ておとなしく候かた田舎故馬飼ことのこゝろやすかるへしとおもひしに月々に二圓ほとかゝる也ぬか一升地役人は十錢組頭は十二錢奉行は十九錢といふこと也それにて諸事おもふへき事也

○十五日 曇 暖氣也 月並の禮日に付書院へ出ること例の如し○役義の御禮寺院繼目の御禮神主官職の御禮なと披露ありつねなから何夫に付るゑ御目見といふことこゝろくるしく候

○十六日 晴 暖氣也 寒暖昇降中數也

○十七日 晴 至る暖氣也家來ひとへ物着用ゑものなどあり往來は時服にゐは大汗也○今五時ゑ供觸にゐ 御宮に參詣いたす供立等例の如しよつて御役所向は惣休に成

御宮にゐ

國民の爲と計に祈ぬる實は 神のうけさらめやは

嵐せしあとのやつれの民くさを昔にかへせ神の恵に

今朝かつほとれたりとて例の佐助男より出しぬ至る大也江戸ふるせといふものゝうちに第一の大きなるへしさしみにして某も給へ家來一同も遣しぬ料理庖丁は高村俊藏也見事なる事也よほと手きゝ也



○十八日 曇 此ほと病ひなし然るに飯の外にはなさへ禁してのます  
 何にてもかくといひしことなしよつて二度の麥飯にて殊によるのほか曾  
 ろ菜なしはらのすくことおひたゝし市三郎かひ痢のことおもひやり候市  
 三郎にておもひ出候直次郎手習ひ出精にや怠りなは順作にきひしく縛ら  
 せて三日も食とめなるへし少しくおもひあたることあれはこゝに記す明  
 日の祭の番組出之 一鉾 一猿太彦 炭屋町 一露拂 一豆蒔 一鬼太  
 鼓 一散錢船 上中原町 一春駒 長坂町 一獅子 石垣町 一同  
 小六町 一神馬 馬町 一同 みそや丁 一三番そう 一丁目 一武  
 内宿禰 羽田町 一唐子遊ひ 柴町 一源頼光 庄右衛門丁 外四ヶ丁 一渡邊綱  
 鹽屋町 一源頼義 貳丁目 一源義經 下戸町 外壹ヶ町 一平知盛 左門町 外四ヶ町  
 一加藤清正 材木町 外壹ヶ町 一猩々 大間町 一鹽汲 大工町 一娘道成寺  
坂下町 外貳ヶ町 一鐵輪 湯川町 外壹ヶ町 一猿廻 米屋町 外壹ヶ町 一富士見西行 上同斷  
 一福助 三丁目 社人 神輿 下り葉 下戸町 外壹ヶ町

右之通御座候以上 子九月

町年寄岩佐丈之助

某初あゝの事なれば何事もいはす例にまかせて見物所にあみる積也書面の  
 如くならむには大造のことなるへし江戸の祭にておもひやりて不容易お  
 もふ也され共此町年寄の大筆頭に奉行の用達たる甲加佐助か下代とい  
 ふもの江戸ならむには必一刀を帶し繼上下なるへきをさき織といふそて  
 なし羽織と繻絆とかねたるつき／＼のものを只一つ素はたに着て參る也  
 是を以押時はさしての事はあるまし絶倒もしるへからす  
 ○十九日 風雨 右に付祭禮延引に成乍去赤飯を八斗餘其外煮染等出來  
 役所にも遣し家來にも爲給候けふ風雨之體をみて

彌高き岩ほの上を浪こへて玉の山なすをきつ汐風

空ならて海よりふると風脱アルカになゝめ佐渡の村雨

佐渡は夜のあけ候事早きかことし早くはあらねとも東のかたかけはらひ  
 なれば夕かた日のいり遅きとおなしことなるへしからすいつも風に吹か



うたふはう  
祭る住吉也  
うたふ明神  
と號す

れて珍らしき姿して飛也濱邊ゆへからすは至多し  
村からすおもひくの姿して風にたよふ島のあけほの  
望月のかけは波間にありなから早明をむる佐渡の島山

○廿日 晴 今日善知鳥祭禮に付役所ははや引に成是は佐渡一國の大  
祭にて相川の鎮神なれば神輿を御役宅の門前へ昇居候而神主のつとを  
ける事也給人のしめ麻上下鍵箱に而門前へ出某か代拜いたす事也見物所  
には例の幕打某參る事也よつて見物所の町同心兩人平服いたし候而兩人  
つゝかはり合候而筵の上に着坐也同役十兵衛より兼而之文通に

當月は善知鳥祭禮是は御在勤中の御花やか格別之義に御座候いか被  
爲在候哉出入之醫師の其外云々土地之もの大自慢日本一之神輿也と申  
候又鬼太鼓と唱候杯も天下に二ツなきものゝ如く存居申候以上記しかた  
きこともあれば略しぬ

右之次第に付おもしろき事とおもふものもあるへきかされと十八日の下

に注せしことく思へ居ればみるは甚心くるしけれと一とは風俗も知たく  
一とは是も御役のうちなりと孔子の儼ヤラニみ給し昔おもひてつとめて  
參りぬはしめは鋒に若松次はさるたひこ夫より前に記せしことく出し也  
夫は江戸のをとりやたいといふこときものゝうしろをおもひくの緋に  
てはり紋あるゴロフクレ前と左右には巾壹尺あまりの幕うち廻し此まくにとん  
細もあり紋あるもあり或は某の町と金糸もて題そかなかに人形にて前に記せしも  
するもありみないつれも百年前のものなるへしそかなかに人形にて前に記せしも  
のゝある也ひなふりおもふへし車なるもあれ共多くはみな荷ひ行也いつ  
れの臺にや人形をのするに心はしらねとも青き唐なす貳ツならへてそれ  
を踏せしもみへき餘は夫に而おしするへしはれなる第一の衣裳せしとい  
ふは例の山大工也千とせもとおもふいのちをわつかの金に而金礦のうち  
に日々いりてたつきするもの共なればあすはいかにもあれけふはおもひ  
おもひのたすきしてきほひ歩行也此たすきは色々のちりめん一巾にや江戸の少女  
きものにてたすきし其末を長く結ひ下たる也多く木綿の八反八丈鬼太鼓も専にかれ  
といふものの單物にてこしにはいつれも文錢二さしつゝを下たり



此間に何町  
と記すは  
金山大盛  
は砂金袋  
からつち  
の五ツ挑  
宛竹のく  
宛竹のく  
の結ひも  
に結ひも  
月先は十  
つ祖師は  
ことく花  
をさし倒  
右にむ様  
ひに下へ  
を附白の  
ひき白の

かたゝく也此太鼓は全に江戸の角力の太鼓をわくに入て二三人して荷ひ  
行をかの大工共かかた足にして飛ながら打也夔一足といふにも似たりや  
とおかしき事也更に拍子といふものなし頃日町に秋の袴衣に似てきぬ  
たあらずうけられぬ拍子にて夜々に板をうちてかしまし家來に聞しにあ  
れは鷹の骨たゝく也或はかまほこ作るなるへし或は太鼓を習ふなるへし  
と申せしかけふ全太鼓を習ものゝ板打たるといふことはたしかにしれし  
也その鬼太鼓に附て翁の舞のこときものあり面をかふり松とつるとの素  
袍のこときもの着てわらしをはきたりこれ又拍子なしこんにやくところ  
てんなとの靈かさむき日におそろしきめにあひたるか或は判官の妻みた  
る師直のことく只ふるひくゝにふるひて時々をとりあかるの外別にかは  
りたることもなし夫等とこと畢而神輿也神輿はことに見事なること也是  
はいかさまにもこゝには第一のものなるへし神輿には烏帽子水干の神主  
ときむすゝかけのすけむ等供いたす也見物の男女群集すまれに縮着たる

くりにた  
返り物に  
前か物に  
か出は一  
に其挑す  
也か挑す  
あか挑す  
變か挑す  
二か挑す  
の三か挑  
へし挑す  
類も挑す  
家來挑す  
候み挑す  
成候み挑  
に候み挑  
に候み挑  
ち候み挑  
か候み挑  
子候み挑  
堪候み挑  
堪候み挑

は人に負はれたる稚子刀もたせたるなとなれば廣間役の孫となるへし  
其餘は例のさきをり又は木綿の裾模様着たる男女子の類也當所第一の遊  
女町水かね町の遊女兩三人もみへしいつれも音羽のうら町の賣女に木綿  
の紋附着たるかこときもの也是に江戸ものゝ身を果しぬるもおかし祭の  
うちに江戸にまさりたるは十一二歳をかしらの男子髪結さまこと様に  
とりあげ化粧して笛太鼓つゝみにて能のはやし一曲せし也雛のはやしか  
たの如くにてみるへし

さか木葉にかへてさゝけしわか松はちよもさかふるためしとやひく  
としゝにかはらて安きよをうたふたみ住よしの神祭りして

都にもはつるはかりやひなふりのなかにのこれる昔姿は  
くれて行秋の虫ともしらぬ身や祭るつゝみにきほふ山かつ

一體相川はいにしへ金銀一年に二三十萬宛も出し頃はことにきわひし  
都會にあことかくものもなく人多くうつり住けるか金銀山の衰につれて



町も衰へ寛政の頃はおもかけ計になりしを金澤大藏少輔大に歎ひて色々  
と世話し漸今の姿には成し也され共此祭をもて此土地をみるに民は上の  
赤子なれば則某か兄弟か或は乳母か預りし子の類なるへし然るに衰極て  
おこりもならぬことゝは成しなるへししかおもへはいとものゝあはれに  
て袖ぬるゝおもひそかし

○廿一日 晴 頃日金掘の頭入牢いたし候故にや當年の祭禮は例と變り  
金掘共至る穩之由目付共申立る

○廿二日 晴 五時之供揃に鐵砲見分として參る四十五人皆中々もの  
有之三十匁十五匁もあり三匁五分もありき地役のもの常に心かくるとみ  
へ取廻しよし三拾匁うつものに至る弱年のものもみへし也そこより十町  
計參り町打場ありこゝは巾五十間計に長二丁の的場その脇の高き所に幕  
うち廻し鐵砲數十挺ならへありその脇に某と組頭の居幕はりあり某と組  
頭は疊のうへに一一段ひくき薄へりに用人給人廣間役共罷在候こゝには

紅白黒黄の旗白きまとひなと立ありこゝに三拾目を丁場打いたす的二  
町の外なればあたりよからず中りは白旗はつれば黄旗をふる也それを五  
十人一行に出外に三人田付流の仕かけ筒三挺をもち出し下知によつて一  
行又は二行になり鶴よく魚鱗に並ひ又は斜の一つらに成五人宛廻り備等  
いたしくりかゝりくり引にて三匁五分の早うち連發いたし其内へ右の仕  
かけ筒をも打也足なみよろし車代の百目をも三發いたすいづれも手なれ  
みゆる也畢る皆中のもの其外師たるものを目付之もの召連出る例の通り  
御褒美の金子被下之佐州の相川は至る嶮岨の山左右にありて西北は大海  
也此人あらは三千四千のものにもいつ方よりも入へからずとおもひぬ  
異國船參るとも遠く海をこへて越後路の大名へ加勢を乞ことなどあるへ  
からすおもふ程也

○廿三日 晴 風なし至る穩也はるの如し赤蜻蛉ことに多し○佐渡の風  
土を述し歌に



多き物醫師と寺院と赤とんほ白のひきから眼やみかさかきといふ相違なきこと也朔望に見目に出ることゝに御目醫師といふもの六七人もあるへし片目の多こと眼煩ふもの多ことは兼ぶもいふ通也扱又石臼破たるもの殊更に多し是は金銀の石を粉となし水引に臼にゐいたす事故多きも宜也白もてみち造り石かきせし所もある也秋の末の赤蜻蛉けしからぬこと也

夕なきの空にしきのかげろふは都の風のみち也ける

○廿四日 晴 はるの如し家來糸藏時太郎の類某か供にゐ出し外曾お御門外せしことなし今日民藏茂兵衛の願によつて濱邊見物として遣すさとう漬ちやなと遣すわか居る所より望遠鏡をもてみるに二階より牛門をみる位の海の崎おしてし所に春日崎といふ所ありそこに行て携行しちやを煮辨當など給へて夕かた歸れりこの崎は荒なみの時はこゆることくにみゆる也けふ行てみればなかく御ちやの水のこときものにあらす絶壁削

かことくにて下は大海也水迄五六丈も其餘もあるへし岸近くなれば足ふるへ目くらみてよるへくもあらすされ共岩きりて段々と下るへき道あれは海のなみ際へ行てみるに至る清き水にて淺きか如くみへ深ければいなたはせのことき魚共行かふさま手にとるかことくにみゆ赤にしのこときものいくらも岩に附居たりととり參れり○けふ庭よりみるに五百石積計の船大坂より歸り來りて二艘かゝり居る物あくる聲いとかしまし望遠鏡をもてみるに竹に虎の旗あり米俵を小船にのせ岸へあくる也無間も濱より訴あり俊藏并目付役荷上檢使として參る右の米のこときものは帯の破れてからのちきれたる迄を集めて俵にせし也夫を此國の田舎へ遣し洗ひさきて織て前にも記す半天のこときものとなして賤か衣とはなる也さき織は裂織なること初らしりたる也

○廿五日 夕かたより雨○五ツ時御用狀到來母上様新右衛門より書狀共相届候先以いつ方も御別條無之由恐悦之御事に御座候○今日順之助鐵



藏等昨日之衆藏等と同様外出いたす千疊敷等々参り候由二十丁餘もあるへし某か居る所の物見かはみゆる也磯邊をはなるゝこと二三十間にして千疊程のたゞみ敷へき岩ある也此邊のもの春の花月の夜などは行て酒なとのむ所也某もみしか至るよきなかも也近頃迄こゝにけしからぬ大なるたこ二つ居しを相川の若ものいかにもしてとり得へしと終に海にしつみかのたこの居る窟に行てたこの首を力にまかせてべしかはたこもくるしみて人に卷附たるまゝ浮上りしかは岡に待居しもの共打寄て終に取得たり足の長一丈餘ありしと廣間役永井四郎兵衛語り其ことはみないふこと也一つのたこは其後所在を失ふといふたこは赤きものを好めりほうつきを下けてつり寄かきある竿にて容易に引寄ること也といふ〇こゝにてはつるをとること御構ひなし一羽壹兩三分程もするといふ冬のはしめ取得候得は必奉行所に買事也入札に二貫計のよし右之錢は御藏入に成つるは奉行之買ひて人にも遣し従者共にも爲給事之由也某笑ひしはこゝの

奉行之御役に付る之義此つるの外はみなとられ事也此つる餘之奉行之千金之餘に向ふ也絶倒

○廿六日 朝雨夕晴 今度の御便には例の箱無之に付あらめを奉り候此あらめは江戸のあらめの類には無之候被召上候御試候へ此地にはひしき無之に付此あらめを白あへにいたし給候處よろしく候けふはわた入一つに而よろし佐渡はなし程のさむさにはあらしと思ひぬ此程わた又は裕のものも有之候土地のものは江戸のかたこそ寒しさには厚氷江戸より薄霜はしら曾あなし江戸に行て初みたりといふ霜の薄きは風強き故なるへしいまた霜置不申候あらめの包紙へ

佐渡の海歸るわたりはほともあらめ花のふしなみよする迄まで

○廿七日 晴 江戸之御用狀差立候 天満宮御祈禱之連歌差出

慈みの御代の光や秋の月 其阿

夜田かり運ふ四方の蒼生 御代句 某かこと也



盛なる山はもみちの時を得て 方義

風も静に雨はるゝ也 清

船出る浦は波より明はなれ 喜寛

汐はみちくる末のまさこ地 久道

蘆鶴の立行聲や霞らん 保造

春日のほめく野邊は遠しも 英稠

打渡す尾上は雪の消のこり 周明

越へき山の松ふかきかけ 方乎以下略之

○廿八日 晴 昨夜より夜着とかい巻にいたすされ共今朝は又暖也わた入一つにてよろしいまた霜をり不申候此程は至る御用多也組頭正四時已前に參着退散は七ツ前也七ツ時を承り候る歸候事も有之候何もさして仕出たることもなし只近頃一件のあと故に何事も申聞ることゝ聞へ候丙吉か牛喘のことなといひ候事もあれととかくに細事の多にはこまり候

○廿九日 朝晴にる至る穩也乍去馬場より見候處海の方至るくもりきしなみけしからす高し海は荒なるへしなといひしひる頃より西北風俄に吹出し家鳴いたしけしからぬ事に御座候庭上を見候得は漁夫共急に逃出し小船故難船いたし候體おはれ成事に御座候夕方に相成危命は助候得共往來人立いたし候旨届出申候

○十月朔日 大風雨 頻にあられふり申候けしからす寒し火鉢を爲出申候風あらくをりゝ日かけみへなから雨ふり峯は日かけありなから麓は村雨にる雲かゝる様歌いふ時雨の如し大和山城などは山國故歌の如くしくれするにや江戸にはなき事也○御用状宅状相届例の如く御禮日に付表にる禮受候る歸り候る一覽候處伯耆守殿卒去 上にも御哀惜と之御奉書早速御機嫌伺之呈書に右筆共取懸候様申付候○御用書濟にる鍛五郎之書狀開封 御三親様御機嫌克其外一同之無事おさと不快も全快市川の參



り候由等承り大慶之至差上候符水御歡之由并干魚被召上候と之御沙汰難有奉存候扱又御うつりの煎餅久々に給殊之外宜覺申候今日は珍敷家來に申付茶を煎させ第一に私義右之煎餅御前に戴候義和恭之心に二本計給あとは家來に夫々分ち遣し候いつれも難有奉存候由に御座候一體はたくわへ置候思召を日々一つ宛もいたしき可申譯に御座候得共此程家來共一同おとなしくいたし候出精に付少のものにも多きものにも初穂を給候上は少も残し置不申候家來に遣し候何事ものこし置候故こゝろ懸りに候こゝろ懸りなき程の楽しみは有之間敷候儉約は身のつゝしみにて三千石は三千石丈の出火其外之こゝろへ無之候は今日の武士の武士たること成不申候問無據費はなき様いたし候ものゝ是も能考候而人のものをかり候扱いたし不申候程に不時の手當ありても夫にも金子を好み候は商人の武士にあるへき明日をも構ひ不申候而人の懐中を仰きて不時の間に合候は乞人流の武士なるへしされ共身をつゝしみ儉

約のこと心をつくし候も貧なるは天に候得はよく洗ひ見候は金子のあるを好み候ものよりは彼明日のくらしなきものゝかた猶よかるへしされ共少も奢たるこゝろあれは人を貪るこゝろ出来貪ほるとは盗人の小なるものに付人を貪りかりものなにて一寸の挨拶音信なといたし候ものは眼をとめてよくみれば盗人の人にもものをくるにも近く糞汁の衣着て神拜みする類なるへし〇鍛五郎より兩度まで日記こし不申候は扱々如何に覺候〇某こと初在勤の不安内何事も少も辨不申候間ひまには佐渡のこと知ることゝ佐渡の人材をみることの心懸候内此程はいろゝのことつとひ候まゝ未明より夜九時までは御用にかゝり切にいたし置候され共組頭廣間役などに逢候義公の事の應對に四ツより七ツ過迄はいつもかゝり候而何も夜にあらされは出来不申候これも十日もたち候はよるは書物歌など出来可申候此程はつとひ故に候九ツの鐘聞候得は少も構ひ不申直に臥り候十日之内に二三度は四前よりねふくなり候事有之候是又直に



臥り候親あるものは身のいとひなくてはならぬ故に候され共鍛五郎など此程わか身の可煩かといとひ候類の未熟なることは夢々あるへからす三時寝候は、あとは精力のあらむかきり出精あるへし稽古事は心を勞すること少候間いか程出精候も病出ること無之候稽古事にて病出候程に候は、目出度かるへし夫に病ひ出死候は、死候かたよろしかるへく候されは大事をかへ候ものは養生第一に候武士ほといのちをおしく存身を大事にいたし不申候は不相成候武士は身もいのちも上より當分御預り申上候ものに付別々大切にいたし不申候は難成候此事鍛五郎よく御心得候へかし○屋敷替あら、取極候由鐵作よく世話有之候由忝候よく御傳へ候へ鐵作新家流の眞實儉素追々覺候由と存候何よりの事也鐵作は近く榮之介と申候よき手本有之候得はあの人程に成候は、殘ところ無之候榮之介中々及へからさる事多人にて凡人には無之候聞へたる豪傑風のものに榮之介に不及もの至る多く候都る人は榮之介のことくに成候る之上

の事業と存候○荒尾之屋敷粗出來候由承り大慶に候右は古く相成居候とも先代松前奉行の時出來候屋敷に付當時某御役故とは乍申右十俵三人扶持之身に在居之段いかにも、勿體なく存候依之捨置候は、大破に可相成場所火之用心盜賊之用心にかへはり候場所并男女之別に拘り候内外之差別右之場所は取つくり候取締宜いたし其外は藏之瓦を水廻り候所鼠の穴など心附候而已餘は見分に拘り候場所少も取つくり有之間敷候たとゐいかほと見苦敷候とも八百坪に在土藏も二つ有之候と申譯に在大造に有之候間都る有形之取繕有之間敷候勿論某か屋敷内之もの上下とも誰も其心に可有之候得共よく、心得候様申さとし簡要に候順作心得候前書之趣よく相守候様尙御申付可有之候若歸り之上一覽取繕に過候義都る相見候は、以之外機嫌を損し候事之由よく可被 仰付候庭に飛石之類有之或は水鉢之邊岩など置候義第一あふなく以之外不宜候某か居間たるへき所を鹿末にいたし夫を手本に作事可有之候身分慎之ため三ヶ



年之内は先主をまゝ武術修行等々ために相成候所は歸り之上目ため候而  
取繕可申候得共其餘も少もいたし不申候積に候今之屋敷へ参り候時は表  
之坐敷にづる草生したゝみのすきより北風吹込候而出生之小兒則五寢  
かね候間淺草かみを買一疊つゝへりの間へ入候而寒を防候夫にも五ヶ  
年は住居いたし夫は當時御承知之御方は 御三親様方に候其心得によ  
く奢侈等之義無之候様御申付可然候當時は以前と違ひ格別結構に相成候  
間夫丈又一段也つゝしみ深く無之候而は不相成家内一同其心得第一たる  
へく候某か居間は琉球のへりなしにはり附はり替候に不及候破れ候所  
はとりかへ紙の反古にはり置可申候若天井無之候はちり落候而はこ  
まり候間したしみに用ひ候大節の杉板には天井さつとはり置可申候いか  
様古く候とも破れ不申所なと繕候義は不相成候間其心得によく取計候  
様是又御申付之事并戸かわ腐潰れ候様之事に候は、是は早速つくろい之  
積中間部屋は如何様大火焚候而もあふなく無之候様是又心附あるへし養

家實家も御目見以下には女をつかひ候義も無之位之義之處いかなる事か  
かように被 仰付候間吳々其心得第一に候某幼年之時に候牛込中里町と  
申邊鄙の同心の地面をかり候而  
行道君御住居に候其時は隣へ水を貰に母上被爲入候節御手傳申候事候ひ  
き門はかたしをり戸あるかなきかに候養家も四ッ、谷脱カ新屋敷には屋敷は四百  
坪有之候得共竹をうち附候かたしをり戸の門に有之候されは如何様古く  
候とも宜しかるへくと存候は其謂可有之と存候歟五郎など其事存不申御  
旗本衆累代之歴々とおなし心有之候而は忽に天罰をかふむり候間其こと  
心得としていにしへ困窮のこと相記し候かように認候而考候得は此程佐  
渡風濤も琴瑟のことく聞へ候人は其もとを忘れ候得は必其身を亡し候か  
或は災難有之候由若哉高運のものにても其子か孫迄には必災來候由に付  
如此申入候事には候歟五郎などよく御心得候へ母上御信心の法華經など  
にも衣類住居食物をよくいたしたかり候事は嚴敷いませと承候〇夕か



た機嫌聞として醫師參る昨日風の吹出しには某か物見の邊の沖より龍ま  
きありて壹艘は空船を空へまき上候おとし微塵にいたし一艘は漁船を  
船人ともによほと持參り候おとし候故船は水ふねに成人は水にたよ  
ひ居候を商船通懸り候救ひ遣し候由か事脱いくらも常心心得候  
めつらしからざるよし也某は俄のこと故早手なといふもの也とおもひし  
に知候は、見へかりきを残念なる事也

○二日 晴 餘國にもあるへし佐渡には蛇たこといふものあり足十本あ  
り蛇の所化也といふ地役人古藤重之助赤泊御番所役たりし時夕かた子供  
の海岸によりてかしましましましに浪よけしからのかたによりて常の  
へひより頭ふくれたるか浪に尾をひたして頻にうち居たりしはしの間に  
尾のかたことく裂て十本の足になりしを子供のうち殺せし也こゝ  
にてめつらしからぬことなれとたしかに見しとて今日十輔へ右之重之助  
物語候佐渡に八目といふ魚ありあいなめ目はる之類也是はひきかへるの化して成とそ

ハジメに候  
ハチメに候  
ハチメに候  
ハチメに候  
ハチメに候  
ハチメに候  
ハチメに候  
ハチメに候  
ハチメに候  
ハチメに候

既に半はひき半は魚なるを近頃取得て干かためて巡村の奉行へみする事  
也けふ十助の右之はなしの序に前の日記に記せし大たこを得たるもの、  
こと言出し世に壯強なるものもあるよし申せしにそこに詰合たる地役人  
牧野甚兵衛申せしは右之大たこを得たるは某か悴左司馬也天保八酉年の  
春朱さやのわきさしを帶し海岸につりせしにうしろより誰か肩の邊へ手  
をかけ引候間願みしに海底より大成蛸の足貳本を出して左司馬か肩にか  
けて引いれむとせし也驚て力をきわめて引しに又貳本のあしをまし出し  
てからみ強くひくまゝにこなたも力を出して牽しに終に蛸は頭をも出し  
てますく引入れぬとす眼の大き茶碗ほとにみへしと其體をみてつれの  
ものは逃出候間わきさしを抜て兩眼を突しに弱しかは終にかの蛸を引あ  
けしか中々壹人にて荷ふへくもあらずそのうち逃たるものも其體を見又  
歸り來て砂場にてことありけに頭なと打ひしきしと也甚兵衛家内はさら  
也人々聞傳へてみな足を少し宛分ちもらひしと也肉常よりも剛きと覺へ



しと語りしと也たこは赤きものを好めりほうつきにて釣らるゝ也左司馬か帶せし朱のさやをみ入し事之由也○頃日鴈の聲を會あきかす空行をみしこともなしよく尋ねしに海北より南のかたへ日々に行をみることにありされと雲中殊に高く飛びてかりかつはくらめかみへわかぬ位也さとを越へて尙南のかたへ行也國なかといふ邊は少しく開けし田もあれば友にはなれたる鴈の稀に落ちることもあると申せし也數人の説を聞に同じ西洋の圖もて考るに日本へ來る鴈は東北韃靼より來もするへからすさて又鴈は浮木を啄みて羽つかるればその上にのりて海中に息ふといふ説もあれとかく高く佐渡の邊飛行様にては海上さしておもふ程にはあらざるもするへからざる也鴨は四時共に佐渡に居て雛育つるもある也只秋冬には數多くなる迄也とそ野田又左衛門といふ地役人々話也

○三日 曇 けふ重助かりかねの空行をみしに實に高し聲かすかに聞ゆといふ佐渡來る鴈は千羽來れば千羽人にとらると其譯は前のことく雲井

遙に行鴈のうちに羽つかれて行こと能ざるものいまた越後の海を隔つることなれば遙に友におくれて田面などへおちくる故鐵砲にあらすとも多くは竿にて打おとさるといふけしからぬ事也對州に朝鮮よりつるの渡來るとき羽弱きか人家などへおつることありと岡本花亭いひきよく似たる事也

○四日 曇 きのふもけふも村しくれ也○此節なすひの香のもの秋なすのことくにて至る美也いまたいむけむさゝけなとありとみへてけふも胡麻もてあへたるを給候いまた霜はふり不申候例年の九月廿日頃の氣候なるへし佐渡の江戸にていふ程のことにあらざること知へしなすひは十八文より中々小々方にて八文位といふ○頃日は日々歌よみ候事十首程にて書籍もよほとみし也然るにことに公の事の多くなり又土地のこと學申さすして成らぬことも出來其上言路の開け候かたにて廣間役其外目付等日々に出ていふこと少からず組頭は四ツの鐘打て來しものなるよし歸りは



九半と聞しにこと多しとて四ツかねよりよほと前來り七ツまでは必談判あり大弦強時は小弦の絶ゆるといふこともあれは某か公のこと等閑にしおよひ遅々せむとはあらずといふ共末々のものか出ると歸との晨夜のことくにならざることのこゝろありたしといへ共いかにも早出して七ツ迄はかゝる也其間に人にも逢候へはみるものはもとより夜に成也よつて四五日已前より歌書并常にみし周易歴史などを宮のうちにをさめて文臺には公の文共つみをきて閱候され共夜の九ツには多なりぬおもひの外のこと也けふなどは組頭にはやまつ跡は明日になし玉ひといひて歸しいまたかの人々の居るうちに兼而拵置たる馬牽出してのること再びしに夜食は灯のもとにて給へ日々用ゆる灸は民藏のさゝけしわか私事の帳面共見ながら家來にすへさするに至る其餘おもふへき事也○水替人足共一年に一度宛外出すること也今日其こと伺に付例之通と申遣し候水替人足一度に百人も出る故不取締のあるましき様に申せしに水替人足共外出せ

日は必先達而死せし水替共の墓所へ參り香花手向夫故海へ行て垢離をとり身の無事をいのりて歸るよし多人數出れ共至而おとなしき由水替と云ものは溢ものゝなかにても奉行所の手にもあまりたる兇惡のものなるにこりを取香花たむけなとするは眞に珍敷事也是は公の御慈悲に而かゝる所にて辛苦をなさしむる故にかく義に向ふとみへたりされは嚴成に過ちはてきぬ也上たるものおもふへき事也

○五日 晴 此頃は此地へ參りし時よりは月日の少しく早く立か如し江戸の月日はひま行駒のことく也しこゝへ來りし初はいまた十日也やいまた十一日也哉けしからすとのみ上下申して月日を江戸にくらふればつなける牛のことくにおもひし也此頃はなれて羊のあゆみ位になりぬこの體に而はとしくれ春來り三月の頃は巡村として出なとせは又まきれもなしなれもして一層早く月日立て郊原を驢馬の重荷をつけて歩行位にはなるへしとおもひぬなに事もなるゝにますくすりはあらし戰國の士と今の士



は火消鳶のものと佐渡の漁父の火事に逢たるとおなしことなるへし火消鳶のものも大海を小舟にて行ことあらは漁父の火事に逢か如くなるへし  
○九月廿七日の御用狀海中にて風波に逢出もとりいたし候由今日申出候離島のことみなかくの如し歎息也今日にて九日也御用狀の度こと定川留の格也

○六日 晴 夜食にはちめと云魚を給申候前に記せし蛙の化する所也といふもの也味石もちに似たり至而輕過て味なし蛙の化すと聞は食するにこゝろなし

○七日 晴 けふは玄猪の祝なれば餅をつき候而家來一同にしるこにいたし振舞候○先例に而組頭宅に而玄猪の牡丹もちは初穂とて奉行宅に贈ること也初之猪二之猪なとこゝろして銘々より來るよしけさ五前に家來共と劍術を遣ひ畢り食事いたし可申と存候處右のもち來る八寸の重二重也白あむしたてにてさとうなとかけてあり頃日菓子さへ給不申候間珍敷

候よつて先朝食事三椀を給畢り用人給人近習共にも悉分ち與へてのち某ものしぬことに珍敷覺へて中位の大きなるを數十三を給へぬひるは玄猪の故にやあしの焼たるを煮て附たり是又例の如く茶碗に而飯四はい右之あし三尾を給候夕かたしるこ出來て出之もち珍敷よろしよつて大切もち五つ<sup>三椀也</sup>給又飯三椀を給へたりさして腹ふくるゝ様にも覺へす候夜九ツのかね承りてのち寝る時は常の如くなりたり是にておもふに常に飢人のことくおもふも宜也給れば右ほとはさして腹ふくれす給らるゝを常には慎みて過食せされ也

○八日 晴 はるの如し三四日は又綿入一つにいたすけしからす暖也當年は珍敷事之由土地のものは申せしよし也○此ほとは御用多に付夕かたの武藝大に差支候間毎朝鎗劍隔日といたし一日も不怠候○たよりのことに干魚奉りぬるにこたひははしめさより也ければ  
都にはきくもはしめの魚のありぬみないさよりてものし給へよ



うち川のあしろ木ならて心のみよする干魚のはつかなからも

○九日 風雨 嘉十郎銀山へ參る途中に子を抱ひて窓より顔出せしか  
かなこの妻の姿をみしに緇の衣類にて其さま賤からす江戸の婦人の姿あ  
りとて驚きたりぬ此かなこといふものは銀山大工の頭に所謂山師なれ  
は奢侈を極め常に錦衣玉食して忽に富家にも成忽に潰れもする也居宅な  
と承るに美を極たる事之由佐州に美をすするもの、第一はかなこ籠食  
するもの、第一は奉行三左衛門なるへし佐州は山師といふ諺の出し本國  
なるへし今盛に金銀出る彌十郎間歩といふ所あり間歩とは金銀の  
出る穴也この間歩に  
初かゝりたる近きこ男をもひの外に金銀の氣薄く損而已にてある時に首  
くゝりて果る積に成夫となく友を呼ひ酒振舞ひていとま乞せしにこゝろ  
附たるものありて尋問ひし故かくの次第とて困究に陥たるよしかたりし  
に其坐のものよりて錢四十貫文四兩二歩餘也與へしによりて右を以三四日を凌  
くうちに盛山して大富家に成しとそ一人山當れば其一族迄右のかなこに

も成諸色の受負人にも穴中へ用る油を商ふものにも成てみなとみくらす  
事也此程も遊佐といふ間歩ふと盛を得可申體に夫か一族共迄神にいの  
り佛に誓ひて狂人のことく走廻といふ予いふ山師の祖は大久保石見守に  
て夫より段々の庶流追々に衰たるものなるへしといひて笑ひし也佐州に  
已前は狸なしふいこに皮用るとて石見守か牝牡あまた放せしか今以さか  
へ居る故ふいこの皮にことかゝすと承る

○十日 風雨 今日武術の一覽也書院の疊をあけ候得は直に稽古場に  
なる也七間に三間の板間にてよき稽古場也くり出しは目付也某か右之横  
に組頭入側に用人給人刀もち着坐也左次之間に廣間役一同着坐鎗は寶藏  
院伊能先生の門人高山又藏之弟子共也左ふり流無敵流也是は素鎗劍術は無眼流東軍流新陰流  
也中野樂山先生なとの同流名なれ共大に異也居合無敵流杖術吉岡流柔術澁川流玉心流也いづれも  
形一通り畢る東軍流新陰流目錄免許之もの仕合いたす寶藏院は入身いた  
す東軍流新陰流いづれも花法也罷出候面々の強飯にしめ等遣すいづれも



先例也人數七十貳人あり五時揃にて七半時頃まで相懸り候新陰流に猿飛の太刀あり武備志にいふ所のものに似たり某か以前皆傳受し新陰流に燕飛の太刀あり似たるかことし

○十一日 風雨 こゝにては銀山は軒端の山也きのふよりの寒さにてけふは銀山に雪みゆる也銀山に雪あれば四五日のうちに里にも雪ふるといふ也わた入壹胴着に羽織をも用ゆる也こゝは霜なき程に雪は早きとみへたり未兩三日前迄は霜もなく暖也し也茄子なといまたある也

○十二日 晴 寒さ彌強し寒暖昇降器中數をこへ寒にいたる佐渡のけしきをよみて日記にかへ奉る

こゝろさへきゆる計に驚きぬ白かね山のはつ冬の雪をと高く佐渡の島山冬あれてきしに先みる浪の白雪

さむけさに冬とはしれと鴈も霜もまたみぬさとの島山

神無月佐渡の島山風をあらみみそれとともに時雨そめぬる

佐渡の島また初冬にいくかさね衣手さむくさゆるしほ風

さき織のあやしの布に胸あはてさむさはしらぬさとの島人

濱風の八しほにやそむかけろふのちりてもみちの佐渡の初冬

青葉なるまゝに梢のちりしきて木からしあきさとの初冬

きり／＼すなるゝさむさか島山の雪もいとはて夜半に鳴也

かりてほすおしねもあらぬ神な月雪にやちきる佐渡の稻妻

○十三日 風雨 御用狀到來治部右衛門の書狀并かふら骨豆とも來る  
いまた出府之由宜被 仰傳可被下候○歟五郎の日記來る忝候○三御親  
様倍御機嫌能と之御事其外一同無事何より之義と奉存候○島居之悴より  
菓子并返書來る快八右衛門可相成と之義何よりに候さりなから氣之毒之  
事に有之候○歟五郎の日記左ふり流之仕合おもしろく候右は備中守殿御  
家來西村平三郎之弟子かと存候如何に候哉

○十四日 風雨 甲賀佐助ひらめ壹枚差出候大さ三尺餘江戸にては見し



こともなし諺に北海の一町ひらめ二丁ひらめといふは是等之事なるへし  
蝦夷地魯西亞人之時南部とか申候陣中贈りたるひらめ六尺ありたりと  
竹内藤三郎話也蝦夷は北地ますく遠偽とすへからず

○十五日 雨 至る暖氣也わた入二ツにてはあつきか如し寒暖昇降器今  
日中數より高し六十七度也□□此山へ雪のみへたる時は四十八度也二十  
度の相違也四十八度の時は綿入貳ツに綿入羽織にも尙寒しけふは中々  
火の沙汰なしけしからぬ事也○朔日十五日廿八日は赤小豆のめし也いか  
なることかざらくとしたるものありて麥飯の如し江戸の赤の飯と大に  
異也某聞あつきを煮こし候る其汁を以飯をかしけはざらくせすと承る  
とて右之如くさせしにあつき一粒もなし又云江戸はさき也こはあつ  
き其故なるへしとよつて家來よりさき申付しに参りたり今日飯とな  
せしに飯の色其外共江戸の如したくこのさくけは鴈くい豆といふ程あ  
りて味又黒まめに似たり某笑ふこれは黑豆の出世して緋の衣たるなるへ

しといふ一同大に笑候○今便に干物雨にて出来不申候間かきたこといふ  
ものを奉り候是はたこのあしを湯ひき干てかきたるもの也さらくと水  
にてあらひ三盃酢に給候へはよろしと尙いろくのいたしかたあるへ  
しよくさとい被 仰付候る御調味あるへし頃日便のたひ奉るものいつれ  
にてもよろしきものに極候る上可申候御便に可被仰下候○某灸事のこと  
御沙汰に任せ怠り不申候其内試候に脊の十穴至るよろし一所に十五ツ、  
日々すへ申候母上も右之所御試に十日計つめて御すへ候は如何ある  
へきされ共三郷に得と御尋上なるへし某にはよほと効あるかことし○  
花かへりさきのこと被仰下候珍敷承り申候江戸は文政のはしめも大荒の  
あと仰の如なりき江戸は都のことなるに佐渡もまた同じ梨花李花咲たり  
といふ去月十日は佐渡も風雨なりしかこれはなみの事也江戸より八右衛  
門を送り歸りたる醫に尋ぬるに十日は信州善光寺へ参詣せしに大風雨也  
越後も風雨ならば百里以上の風なるへし珍らしき事也○鍛五郎は申入候



此ほと某御用向々外學問其外に三時々外ふせり不申候足下など勤學中  
々義に付右を推しひろめ候而出精候様と存候

○十六日 雨 暖氣也此ほと近頃覺へず健也○けふ豆腐をものせしに  
江戸のこんにやくよりかたし角に切し豆腐をはしにさみあくるにか  
しらのかたふるくとしてかんでんの如し八はい豆腐を戯にはしにて結  
ふに自由也

○十七日 晴 こゝの孔廟のこと命せられて月々に書院に講釋するも  
のあり兼而御庫の書目をみるに通鑑至る少故に孔廟の凍水通鑑はいかな  
れは小部也やと問ひしに凍水通鑑といふものなし司馬君實か資治通鑑と  
いふもの司馬晋迄ありと答予も驚て其餘を問はず如此類の書生四人計あ  
りて月に再ひ書院に出論語を講す兼而聞某を深恐てくし取にて初講せし  
と今日の體にてはまことなるへし頃日みし書のうち疑敷こと問ふへしと  
おもひしか止め

○十八日 曇 けふ間に江戸より參る水替共ことしは寺々行こりを取こ  
とさらに早く歸りし故いかにと尋しに御時節柄故こゝろせしと答けるよ  
し 上の御威光にて御取締おもふへき也○夕かた馬場にて鐵砲の操練あ  
り五十人の人魚鱗にならひ鶴よくにわかれ一時に打出す故けふりにてみ  
へわかぬか如し其内十人の車附たるしかけ筒もあれはおとおひたしけ  
ふは地役人の稽古なれと陣屋のまに簾かけて密にすき見しぬ是も人知  
らぬ某か勤そかし○俊藏歌すき也某かゝる題にてかくよみたりとて折に  
ふれて吟聞しむることもある也其内きこへかねたるをあらはにもいひか  
ねて夫は假名題になし玉ひなはよくきこへ候へしなといひし某よつて分  
らぬこといふものを又もやそれはかな題いひ出したりなといひてこの頃  
は笑ふことにそ

○十九日 曇 二の亥とて新十郎より牡丹もち來るひる飯四椀給へ其膳  
へのせしまゝ牡丹もち十一をものしぬ才右衛門かたゝ來りしよりは大也



されは常に五椀にて朝夕飢たるかこときことおもふへし是は四ツのかね  
聞て臥ぬれば必六ツ前に起九ツに臥ぬれば六過に起るのみならず朝々お  
こたらす鎗劍を隔日にいたす故なるへし飯の多かこときに似て食は少し  
間のもの少もなく菜はよる計なれば也

○廿日 晴 此國は蜜柑わさひの近國にさへなし近頃よきわさひ江戸よ  
り新かた湊へ参りたりとて調に遣せしに二本に貳朱也と佐助より家來  
へ物語せしよし也たいくは遠くいせのくにより二月の頃に来る上已に  
用ることのよし醫師玄伯の話也此頃氣血めくる故にや顔はせの黒氣大に  
薄くなり顔にく附たるを覺ゆる也

○廿一日 晴 ひる頃至る大成鯛の取たてを持参る尺五寸もあるへきか  
大鯛の隨一と申候位也二枚あり買て一同へ遣すさしみうしほ等にいたす  
銘々十二分にもせしに尙少あまるといふ某へはさしみ中さしみさらに  
十分に盛外に鹽焼して出すけしからぬ身のあつさ也あまりにあたらしき

故さしみは味薄きかことく鹽焼は甘美いふへからす貳枚に三朱也とい  
ふ○けふ萩原彦次郎元祿中佐渡奉行也後近江と改折たく柴にみゆる人也佐渡奉行たりし時の法令書  
を其筋より本書のまゝ出しぬ某か此頃おもふ所と符節を合するか如しよ  
き書也不愆不忘舊章にしたかひよるといふことの格言なるに伏す某今日  
迄新規のことをせず只々先例と承りて例計により其よきを用ゆるに何と  
も申さす候へ共地役人共頃日は殊々外潔白になりき色々の弊共分り上  
にも御益の事共多しされ共某よりかくと申せしことはなしみな役人共の  
骨折と御威光によるもの也此頃は大にこゝろおち居申候されはしらぬ國  
へ参り己か智恵に勤なは終には其智を衆人のよりて欺へしおそるへき  
事也日本往古は郡縣也しか保元の亂より末段々と今の封縣といふものに  
成たりされ共佐渡一國はいにしへの郡縣也されは漢土の郡縣治の法に附  
色々の物語共の今の勤におもひ當る事多也三代淳朴の時も三年に一度宛  
調ありて九年に其御奉公からの善惡を定ることなるにはつか一年限に



交代してはことのなか／＼なるへき様なし日本之人は正直故にまたもおもひの外に治る也難有事也

○廿二日 曇 十二日出之御用狀到來新右衛門之内狀日記歙五郎之日記共受取 母上様之御自書奉拜見候益御機嫌克候由恐悦奉存候○幸三郎之只一度荒々といたし候日記参り候計に候當年は冬迄も傳 奏衆之被居候哉夫に而いそかしく候哉夫ならば先よろしく候若哉不快には無之候哉けしからず覺候○屋敷替鐵作新右衛門折と承忝候

○廿三日 晴 用達より前々之仕來之由に而るみす講之由に而もちと蕎麥とを家來迄之差出候是はかの萬事賄方いたし候佐助に限り候事也

○廿四日 曇 馬場にてけふもあしなみの稽古あるよしにて夥おとある故に透見いたす常にかはりたるにはあらず

○廿五日 雨 風ことに烈し屋なり床ふるえておそろしきさま也され共南風故きしには浪かつてなし○ことしは佐渡に幾年かうちも覺へぬと申

鳥賊漁にて此ほとも質うくるものあれとおくものは少しさて又豊作なるに此ほとはいつれも金銀山出方よろし其内中尾と云山はことに三四年のうち銀の出かた少しとて七八日前也き懸の役人にあひしになかぬ計のくりこといひて薄命をかこちしか其次の夜半に銀山は晝夜よきかねの弦にあたりそのあくる日よりこゝもかしこも中尾の銀山はよくなりて穿出すうちに金さへ多ありとてきのふけふは役人共きほひ殊にけしからす六七日前の薄命を歎候様おもへはおかしき事共也前にもいふ如く眞の山師の名金銀山にたしかにある也かく都合よければ十月の中頃よりは役人を戒ることはまれにて此程の出精のみを稱しかくあれは何の云ふへきことのあるへしとて骨折を賞する事計也役人一同實意に御益のこといふ體也これいつれも 上の御惠を某迄も受る也

○廿六日 晴 風 至而暖也 大越より幾之進のうた参る  
今君かつかさ成ていとはやもなみ静なる佐渡の島山



返し

静なる浪のよるひるこゝろしぬなれて流るゝ船もあるかに

○廿七日 曇 山本丈右衛門に差控御免申渡○此程糸藏其外之もの共はいかいをいたす茂兵衛はよほとなすよし也則點者と成夫に付物語あり某懐紙をみしに糸藏執筆のよしかはらけといふことを瓦けと書たり夫を點者土器と直したり左もあるへし糸藏少々は書物をもみながらおかしき事也某いたつらにかはらけにいつか糸藏毛を附てと笑ひ遣しぬ

○廿八日 晴 至る暖氣也いまた霜なし此程至る健也病氣少もなしよくはらをみるに従來の筋はりもなきか如くにてとう氣なとなくなりたり針は不用同前也難有事也

○廿九日 雨 此兩三日魚類更に無之海國は肴なき時は一尾もなし江戸よりは甚し

十月廿五日之天神連歌を出す

賦何文連歌

冬知らぬ花や千とせのきくの庭

其阿

加木垣清き松の朝霜

代句

小夜嵐しつまる山の陰さへて

方義

澤邊におつる水の静けさ

清

鳥のたつ田面や月にくれぬらん

喜寛

竹の葉そよき露そこほるゝ

久通

浮□のはるゝ間もなき村雨に

保造

いそけと遠き里のかへるさ

英稠

○晦日 雨 佐渡に三年も居候こゝろに成今日かそへみれはいまた百日にはならず八右衛門か三年参り居しはあはれなる事也一日三秋のからうたまことにそとおもひ候○今日月並之講釋あり例之通出席佐渡のものは兼り講することを記し参りて本の間には挟み置夫をよみくたすこと新説法



なといふものゝ如し某か居所をはみへす候得共家來刀持はみるよし也今日  
は孔夫子の哀公に陳恆を討こと仰られし章也講師ことに辯説をつくし  
終に小牧長くてのことも引ことに出せり誰人か申せしや

あい公の果のつかぬに大あくひ廻り遠さの飛た長くて

けしからぬこと也かり初にも聖人の教にされ歌などあるへき様なし後は  
きつと戒へしと申しき

○十一月朔日 村しくれ也少々さむし〇月並の禮受ること例々如し〇佐  
渡に北條氏の爲に御狩ませし

順徳院の 御廟あり今は耕地のうちにいさゝかの除地となり居りぬ

御遺骨納奉りし處ともいひけふりとなし奉りし跡ともかたり傳る也され  
は

順徳院の 御物又は 御咏などいふものの多あり受かたきことも少から

すされ随ひ奉りし人々の墓などいふものも聞へねはまことに魚蝦を友と  
なし玉ひしやおもふ也眞野村眞輪寺と申寺院の別當にて御年貢七斗五  
升餘の場所除地となり四方土手懸廻しあるよし也まことか眞野に龍舟よ  
せられし時ひへの粥奉りしに

是ほとに身のあたゝまる草の實をひへの粥とはいかゝ云らむ  
と遊されしよし語りつとふる也これにてもその常のおむむさゝしくお  
ほしめしけることおもふへき也その

御陵の邊の村に御手植の梅といふものあり枝もみきもなへて苔むさぬと  
ころとてはなし其苔のうちよりはるは今もはな咲よし也枯枝をはつかに  
人の贈ければ

かしこくも香をなつかしみ袖ぬるゝ苔むす梅の昔かたりに  
ちりひちちもうきにたへせぬ島山はみかりの袖も露けかるらし  
再ひの春むかへしと此花の苔の衣に身やかへしけむ



なとかしこくも口すきみける也 此君の王綱の振はさることを御憤りありて却る倍臣たる北條氏のために此島に御狩なし玉ひて終に御四十六歳と申に此島にてかくれさせ玉ひし也其時冷泉爲家卿など常に親しく宮つかへし玉ひけるか都にとまり又は途中迄御供さむらひて病わつらふことあるとて都にかへりしもありし也恥しらぬ浮世の様可歎こと也敷島のみちは人のこゝろをたねとして萬のことの葉とは成と承るに爲家いかなれはとし頃親しみ奉りし君に背まいらせて都にはとまりけむかゝる心をたねとせしことの葉ならむには武士のみるも恥へきことならずやされ共冷泉家は今も敷島のみち傳へ玉ふ御ことなれば君に背き奉りて都にとまり玉へるなど申せしは雲の上のことしらぬ島人共か語傳へしにて所謂齊東野人の語なるへし我今この日記に地役人共かいふまゝを記し論せしにて定めて正史によりよく考たらむには其謂も多かるへし歸りなは古のこと知る人に問ひて正敷ことも聞て尙いふもあらなむかいつれにも人

は文華に流るればおのつからまこと少なるへし先進後進の君子野人のおしへおもふへき事也

○二日 晴 此ほと魚類曾あなしけふ一寸計のあしを頭も尾もあるまゝにたゝき煮てもものしぬ是は 母上に小魚奉るにかなしなはよろしかるへし江戸にて今まではしらさりき○昨日嘉十郎と槍を遣ひ組合候處槍の上互にころひて槍折候ひぬよつてこゝのかしの柄を取寄みるにをささ天草のことしかしは海邊によろしきかもしらす

○三日 晴 暖氣也○水野正太夫家内大病之由に付見舞遣し度候處何も無之江戸の菓子やに奉公せしものありといふに付呼候而練羊羹唐まむちう爲拵候あまり宜は無之候され共江戸は下直也六寸許之重につめ候而壹朱也佐州は以前々武器の外金銀を用候義并白さとうの菓子法度也され共大病人中々くろさとう給候義出来申間敷と之譯且江戸も金銀器は武器の外不相成候と申は輕きものゝ事に付夫等之含もありて申付候也もとよ



り某在勤中決る菓子など爲拵候氣遣なくさみに決るなし

○四日 晴 至る暖氣也寒暖昇降六十八度也中數より遙に高し○此國の

金山の福壽草は銘物也御林守駄栗毛虎右衛門といふもの例芽出しの所を

取て奉行の差出事也此虎右衛門が先祖は鬼女を切たると語傳るもの也

福と壽く春に千よや經むこかね花さく山のこの草

松かえもおるゝ計の山の雪に角くむみさほみゆる此くさ

おにあさみ手折ためしも治れるみよとさちある花にかへけむ

○五日 曇 此程日々の刀槍怠り不申候歌は全の武門になくさみものに

付四時過より臥り候迄と朝燈のあるうち計といたし置候され共數候得は

十月廿五日を今曉迄に百八十首よみ申候されは少の閑にても捨られぬも

の也○鍬五郎の清書一覽いたし度存候○此頃は旅なれ候る月日も早くた

ち候如く覺へ申候日々のこと左の如し○凡かね六ッ位に起候る燈のあり

候内は歌よみ申候燈ひけ候頃家來より稽古場よろしと申出候間直に稽古

場の參り候槍は突身貳度いり身貳度刀術は家來糸藏鐵藏時太郎順之助を

遣ひ遣し候糸鐵ともにきり紙以上たしかの業に相成候間時太郎順をませ

候るをりかへし二度遣ひ候得は一息に相成汗出申候糸鐵は一度宛也夫を

直に居間の歸候得は朝食事也夫を髪とりあけ湯なと遣ひ入湯は六さい位候也手水計日々也

内にはや四ッに成候間追々組頭はしめ出候地役之もの共の逢組頭に逢候

内九ッ過に相成候一旦組頭引候内食事いたし候尙又組頭出御用向申談地

役之ものにも逢候得は多分七ッに相成候此事果てのち雨ふり不申候節は

乗馬いたし候夫を夜食に相成候夜食終候る灸事いたしなから順之助に左

傳よみ遣候左傳よみをはり灸事果候得はたそかれに相成候燈迄鍵のすこ

きなといたし候燈附候る五迄經書よみ家來共暇遣し枕もとに埋火さし置

候る四ッ迄歴史よみ申候四のかね承候後はひまに相成候間歌をよみ申候

大かた十首計よみ候得は九ッに相成候十首よみ得かね候得は曉に相成よ

み申候藥は毎日求附子一ふく四日目にさいこ承氣之内一ふく給申候此程



至る健に御座候近頃覺不申候位に御座候以上之次第當時之日なみに御座候間しるし御安慮之ため奉り候食事は例之通朝しほ斷ひる飯は香物みそ之類よるは一菜此一菜を四日五日目にしるにかへ候間に菓子等給不申候間飯は小茶碗にて五はい位に御座候

○五日 曇 御用狀出しのち馬場へ參り乘馬せしに海原數十里の外なるへし墨の如しみる／＼なみの上にくる雲帯の如にさかりてしはし又横たはりて消へぬやかて頻にさゝ波たつ程の風になり沖のかた浪間と雲との境烟の如し雨とみゆる也馬場よりかへり夜に至り雨也○けふは漁あり鱒など多とれ候由也大あいなめ鱒の如なる來る價百五十文也煮てもものせしに至る美也めつらしき大魚也

○六日 曇 けふも漁あるとみへて如生あま鯛至る大なる來る○しるこいたし候る從者共は遣し候

○七日 曇 夜ひけのち順之助なるへしおとある桶の底をたゞき口笛

をふきてはやしぬれば中番の奴出て夫に和し怪しけなる聲たて其脇に誹諧する糸藏など一同笑こへきこゆるなど此程四ツ頃のけしき也右にゐるしるへしみな夜行等のなきこと且酒をも給不申さまもするゝ也四頃は某か書物專にみる頃故かしましきなれとそれ等はゆるし置也

○八日 曇 廿七日に差立候御老中御證文附之御用狀去四日漸に順風にて出船せしか越後の地かたみゆる所まで行て吹かへされ歸りたるよし只今届來る北海は風にておとつれ絶ゆること中々川留之類にはあらざる也○九日 風雨甚し俄にさむし寒暖昇降四十八度寒氣之所を甚寒のかたへ一步より申候○たらの味噌つけ味よしあまたいの如し母上に奉りたきものと申しき鹽あまき味噌につけ候はゝ寒中には江戸へ參るへしとおもひぬ

○十日 雨 きのふよりは暖也○けふにんしん葉のあへたるをものしぬ江戸の葉人參いふものゝ如し至る柔也これは前裁より昨日にもとりしを



けふものする故なるへし

○十一日 雨風甚し あまりのこと也とて民藏の行みしに徒部屋の疊吹あくること筵のことし是はかち部屋は海に向ひたるかけの上にあれは也某か居る所は二重床二重天疊に出来西北は風よけの松數十本あれと矢張家うこきて船の如し例の御ちやの水のかけほと、いひし春日崎の巖より遙に高く白波立のほるみゆ驚かれぬこと共也夕くれの海面風さむくして雪か浪かわかちかぬる程也

○十二日 風雨 寒氣餘程まし山は雪あり○重輔屏風澤といふ銀山へ参る其みちのかさとりたむけにて昨日辨當もちの女三人被吹落候少々怪我いたし候由也此邊みな雪也といひき屏風澤はきのふ往來絶て其上辨當如右なれば役人共みな絶食にてかのかたに止宿せしよし申出る此かさとり嶺雨雪にて往來絶るは冬の常也けしからさる風當之所也

○十三日 晴 夕かた曇風此程の體にてはいつ越後へたよりあるへき

をもしろぬ體也一昨日も龍まきにて漁船貳艘空中に引上候而微塵にいたし候由人の生死はいまたしらす大風雨の前必龍まきあるかことし大風雨をしりて龍まきあるか龍の大風雨を起すかするへからさるもの也○とりたての青鴨来る貳ツにて三朱也一ツ調候而家來へ遣し某も羹につくりてものしぬ佐渡はねきもよき所也

○十四日 大風雨 鱈此ほととはとるゝさしみ至而よろし淡き魚故鹽にせしはよろしからず覺候○此ほとは追々ふるき公事吟味物など持出して御用向いつも七時迄はかゝる也され共夜なへまてにはならず候昨日きし出入にも五年六年のさしもつれありき○日蓮宗の寺より法事に付坐頭をよせ候而本堂にてさらひいたし度旨願出る品をいはさるにて三弦とおもはるこれにて佐渡の寺院のことおもふへし尤願は難成候大廣間にて住職申付る寺院あり天井なしのやれ疊也けしからぬ大廣間也昔たか名つけしや僭上なる席の名也



○十五日 風雨 俄にはれ又くもり風あれくも行早く江戸などにしられぬる天氣也され共さして寒くはなし只けしからぬは浪の音也人と物語するも聞へぬ也海上常に雷の如く鳴續け波白く汐すみて物すききこといふへきもあらず十日はいらぬことなれと三四日も遊覽せは一の咏なるへし頃日は荒にて諸國の通路會ふなし十月廿七日之御用狀いまた佐渡の小木といふ所に泊り居る也○米下直なる所也上米一石四貫五百文位也夫故にもち至る下直也この頃家來共一同の寒氣防として餅つかせしに二貫文にてのしもち十九枚参りしといふ至る上もち也

○十六日 風雨 近き山にもよほと雪みゆる也○晴間しはしにあられのおと冷しきこと也○大成殿焼失跡御再御造營の雛形出來いたす書院にあらざり

○十七日 風雨 此頃の近續候荒に魚類も少浪の音計有之江戸の便はあらず別に申へきこととてはあらず兩三日已來は藥を二日隔にいたし候

あまりに病なき藥を日々にいたし候も宜ケ間敷と如右いたし候也尤よく腹をも不怠なてみるに痛候所少もなし

○十八日 あられ風雪寒氣大に進ぬ寒暖昇降四十四度に至る至る近き山にも雪みゆる也けさは庭に薄雪也雪あられ沖風に吹きそひし雲行あらく日かけさすさま咏ことによるし

めつらしと外山にみへし白雪のけふ降そめし庭のさむけさ  
ふりしきる雪の雲間に朝日かけ玉吹くたく佐渡の濱風

佐渡は文字ある國にてなへて少々はあつこふ體也され共田舎故俗話或は新渡本などは曾あしらぬかみゆる也ある立派成寺院にふるかね和尚といふ名のものあり夫は故障ありて参りかねたるといふ文に古鉦と書たる故古かねの號もありしと聞へし也此和尚立派成寺院一二を争ふ寺也

○十九日 風雨おりく、あられはけしく降る○四五日已來は門も玄關もなへて西北に向ひたるかたはちかやの筵もてことく、に垣をなしぬ江戸



の兩國みせものゝ類に近し是は雪よけといふものゝよし關東になきこと故にいともくいふせくみゆる也

○廿日 月次之講釋有之候○けふは朝より一度もあられなし此程は珍らしきことにこそされ共海あれて浪のおとすさまじきはかはりたることもなし夜いり例の如くあられふりさひしきおと也

○廿一日 風雨甚し暖氣なるかた也外山の雪までも消へし也風あるゝおとこそは甚しけれ共暖氣はる雨に近し

○廿二日 晴 風甚し至る暖氣也寒暖昇降六十度に相成綿入ふたつにて汗出るほど也○陣屋へ參る髮結鬢たらひ提たすきかけ下駄にて往來する様わさおきになす所の白木商人某か娘の戀人などいふ共にくからぬ體也然るにその鬢たらひといふものよくみれば江戸の家々廻り歩行ものゝ携とは似てひなるもの也とそよつて聞しにこは錦畫みて造り出せりと誇顔に申せしよし昔の畫まきものなとみてしらぬ古ふりし或は日本の尊きこ

としらて清朝よりわたるものをみたりしに華物など唱へてかの國の眞ねするもの多はこの類なるへし今の江戸にて年々にみる地のこと斯の如しまして千載のいにしへと海外萬里の地いかにもく甚敷ことなるへし

○廿三日 風雨雪 きのふは夕かた迄暖しかけさの曉か夜半にもあるへきか暴雨にてあられのおといふへくもあらず板やにあたるおと驚おもふ計也たとへいはむには數千石の小石を空中へちらすかとおもはるやかて風おとし來ていな妻地をてらし雷鳴頻にて海と山とへひゝき得もいはれすよつて起出てよほと歌なとよみ居しにやゝありて東雲になりしかはやかて稽古場よろしと申來しまゝ參りし骨折てつかひしに汗くむかこと也されは其頃まではあたゝか也しかひるの後より寒くなり夕かたより雪頻にふりぬ江戸の雪のことく柳の花のことくなるものなしはしめより密雪玉を碎てちらせるかことしさりなからさして寒からず候され共此雪甚敷ならば必寒氣つよかるへし今曉ことはみな驚たるさま也民藏などはなし



半分ましなるへしといひておそれき俊藏は起出みにあられ豆の如く衣にあたりて覺ありとけしからぬ事也夕かたより又雷鳴也

雪のおとすさまじき曉に軒端もくたくあられふる也

なるかみのくも間より打つふてともいふへきはかりふるあられ哉

故さとのおとつれならてわたつみをとろきわたる鳴神そうき

○廿四日 風雪寒氣忽に三十六度迄に至る某か居る邊は氷なし銀山は二重障子のうちにある水厚氷也といふ今朝やり遣ひし手いまた覺なきほとはあらずさはさして江戸にかはりたることなきか如しされ共火鉢の邊に居なから顔さむく口ひる冷ゆるを覺ゆるは北越の故なるへし汐風吹あれて密雪をまき十五六軒か或は二三十軒以上之所はなへて白くみゆる計にて海も山も更にしれすみるく村雲吹たへし間より日かけさして玉の簾なといふものゝ内か山海をみるかことく白波緑水あらはれ出山々に雪みちたるけしきなといふへくもあらずされ共あまりのことにすさまじ

く覺候健故か寒氣は覺へ不申候得共手當はよろしく心附候夜は粥かそう雑すいの類たへ臥り候前にもち三ツ宛たへ申候され共こたつはいたし不申候炊こたつに當候ひまは無之候日課全にをはり候得は必九ツ前に成候故也寒に向ひ候故かますくからたは丈夫に病の氣曾無之候され共灸は日々也

○廿五日 風雨 ゆふへよりあたゝか也庭の雪きへて外山にのみ少しのこれりこの頃は一時の間の日かけとてはなし江戸ならば桐油障笠ともいふへき風雨およひ雪のみ也只々御用狀のきたらぬのみ困り居る也○海あれて魚といふものは曾あなし兩三日は鹽から位之事也江戸にてはかしこは奢侈にこそ暮しぬ日々魚といふへきをこゝは奢侈にて前裁物日々に給へ候と申位也家來いふ此ほと大なるいか十一文也十一文いかに一ツにてことたりぬなかく豆腐なとならばよほとかゝるへしといひき○佐渡の豆腐ならむには某も田樂燒の達人なるへし八はい豆腐といふものをは



しの先にて結ひみるに江戸の麩などのことく自由也頃日いり豆腐ものせしに下手つくりたる團子にことならず是なむ豆腐のいし／＼なるへしもしや石焼豆腐などいふもの造らむには必其齒牙を金鐵にし或はかの玄應などならてはくたくことかたかるへし○今日落着物に白洲の出候處盜賊を引合え女例のさきおりの半てん一ツ也さてもけしからず候男女のわかちみへ兼候相川の町ものにも如斯に候得は佐渡の又田舎に参り候はゝいかゝあるへき哉矢の根石など出候肅慎國に近き島のことおもふへき也

○廿六日 風雨 此程あれにて魚なかりしかけふはたらありとて持参り例のさしみなどしてものしぬ○御用状のあまりにこぬ故に試として江戸の押送ふねのことを申候而聞しにはるより夏の頃までは浪ひきゝ故おしおくりといふものにもなる也既に某等か先觸は其ふねに乗する事也され共西北風烈敷なりては浪けしからず高くとへ千石の船たらむにも荒浪

冬をたやかなる時も其上をうちこゆ故にとまにてこと／＼く浪かこひをいたしかちとりと船頭の磁石計にて漸に走也夫も得ならて大船の佐渡の湊に浪かゝりして冬を越すと申しき左もあるへき也こゝよりみゆる一里岩といふもの遙に遠く三里も四里もあるへくとみゆるなみの四五月頃の富士の如く頭白し末みとりなる高なみよくみゆる也其高なみは實に十間もあるへしや

○廿七日 雪 雪よけ并椽頬の雨障子にて却而暖なるかことしめつらしく風なき夜半と寝てしかけさはいつくも花のしら雪花といひ月とめてしは都にて今うくそみる佐渡の白雪見わたせは浪の白雪みねの雪只白たへのさとの島やまむらかりしあけほのつくるかゝさきそ雪より外の色にありけり雪くつを踏いにしへもくりかへしこへきしあとも忍ふつれ／＼雪みつゝいかにましますたらちねと先忍はるゝ都路のそら



健のきほひにあさも太刀ふりてかしらの雪はつもらさりけり

○けふ俊藏荷賣といふことありて屏風澤銀山へ行歸りて申せしは銀山よりかへり笠とり峠といふ所へかゝりしに向より土地のもの参り奥の御方に候や奉行所之家來其外なへて奉行に拘りたる事を奥といひ習せり此先は今甚敷風あれてとても行かよふことなりかたしものかたへ御歸り候へと申せしをもきかて参りしに追々に俊藏を先に参りたるもの共もとり來りて止めければつれ立て又屏風澤に歸りしに相川の歸るもの十四五人ありかへるへしやよをかけて澤根といふ方へ参り候へ歸るへしやなと區也しか俊藏の申せしは某土地のことしらすといへ共今幸ひに少しく風和たるか如し若哉諸君のうちにかへるへしとの御人も候は御同道候へしと申せしに若もの共兩三人是に同意し立出るをみて残りもの共雪帽子みのおもひに被て立出右へ笠取峠へかゝりしに烈風雪を捲て波濤のことくいきをもつきあへすありしかはおりくは一列のもの共雪中に圓にうちよりてしはしいきをつ

き漸に歸しとそ雪ふかきは五尺餘もあり風吹はらひし所ははつかに二三寸の所もあり簀と雪帽子のものは事なかりしか桐油のものは悉に破たりとそ其さまをきくに烈風にて江戸のつむし風のちり巻くかことく雪をまき其まきたる所は五尺六尺もつものこと聞へぬる也其こと聞し上は從者地役人共さうき聞しまゝにてはこゝろおち居不申候間某も不時に彼山へ参る積に商議し不時といふは奉行之意向と前日に觸なむには道組頭などへもふみ分るものなと出して人を勞するをいとへは也問ひしに子細もあるへからすとむ脱カの事也しかさらは行なむとて供のこと申しみるに徒士中間迄へきすへき簀笠なく中々江戸風のかさ油衣なむとにては途中にて行なやへくは必定しぬ其外目付或は同心など數人は必ともすることなれば彼是をおもひて止にける

銀の山の白雪人傳に身は踏まぬまでのほるかしこさ  
さむしてふ吹雪は幾重隔つゝをとにのみ聞埋火のもと

是はいるかはの障子椽の障子雪よけの障子まであれはかくそ申せし



也

○廿八日 吹雪 けふ銀山に釜の口結ひなをしといふことあり是はかまの口といふ所は金礦へいる口にて洞穴の門の如きもの也そこには大山すみをまつりて松の丸木にて柵のときものを作り上より石の落さらむことくせし所也銀山はものいみといわると殊に甚敷人其ことによりて怪敷こと共かたり傳ふこと不少よつて往古よりの仕來にて釜の口作り改るときは 上へ一同へ御酒被下事也其式たとへは釜の口へあさき紅のちりめむの幕を打そこへ神前をかさり日月の出しある旗のときものをたて神主祝詞を奉り其脇に柵をかけ新なるかますくさりといふ金銀たのみ又はてへむかふるもの也奉行所に冠り出る役人の證據也敷内のかぶり物也なむとの類かさり置事也神事畢る古來より銀山にある七合入を盃壹升五合入えてう子なと出し山方役こゝにては神行る役也酒をいたゞき夫を廣間役へさし追々一同いたゞきかむ酒吸物等出る島臺いくらも出ることのよし神酒を時出し島臺は奉行の差出事にて參る江戸

のた菓子といふもの并山吹まんちうとて四五寸許のいかゝなる黄色をまんちうの上には盛といふ字を打出したるをつみ其外かますかたちにつくりたるもちを火くちにて造りし牛に附わらへの牽たる様を成し正面には立あいは金銀の筋ある所也之内へ金銀のつるあらはれたる體の造物なとひなふりを極たる事也此日已前は給人は不及申用人も參りしことのよしなれと某は例の外は遣はさす給人貳人參り候今日は樽のかゝみをぬきひさしを附出し置荷もち又は穿子までも隨意に酒給させ候事由何かしか在勤の時誰はみちに酔ふしたるなとかたり傳ることのなきにもあらねと今日は嘉十郎重助參り例の刻限に歸り來り候得共兩人共一てきの酒のみたる體もなし常にかくやはしらねとも廣間役目付なといふものいつれも給人一同に歸りたりとを廣間役目付共いつれも下戸也とてみなく酒は給さりけりと家來の語りき今日は御入用をも被下別段のこと殊にいわ井ものいみのある山なれば曾あ某より一言も申せしことのあるにはあらずされは前



のことく語りしものゝありしは二百年も已前の話にて近來はみな今日の  
こときことゝなりしなるへし○今日にて七日の間吹雪やみ不申候其ふり  
様時雨の如くにて打續たるにあらねとけふ稽古場の參る時みしにきゆる  
ことなき雪なればよほとつもりたり椽頬もいつくもたてこめてみるこ  
なし一日椽の雪よけ障子なく置しにけしからぬかも居の上迄も雪つも  
故たてし也いまた幾日ふるへきもしらぬ體也あまりのことにおもひて  
まことに聞五月雨よりもうかりける日をふりつもる雪のさむさは  
人しらす軒端に高し絶やらぬ日ことの雪のさしもならても

○廿九日 吹雪おり／＼日かけみゆ○きのふ銀山の硯ふたの類たくあ  
んの香物をのり巻にせしありしとなむいにしへの風尙のこり居なるへし○  
寒氣四十度迄にゆるみ申候軒の雫頻也こゝにはめつらしきことなるへし  
○晦日 風雪をり／＼雨○月次之講釋あり

○十二月朔日 風雪 月並之禮受ること例の如し○たらを葛かけにいた  
し給へ申候至るよろし朔日に付菜を給る汁もたらひらもたら也され共御  
用向にはかくたらはなし御安心可被下候○江戸のこと十月十三日出之御  
用状之まゝ也

○二日 風雪 此ほと夜臥り候前にほたて貝の水もち三ツ計入さとうを  
かけ得と煮候得は半分はとけ候とろ／＼といたし候様に相成申候御ね  
はと申候ものの薄つゆ位に相成申候夫をたへ候而臥り候處味もよろしく  
さてあたゝかにてなるほと寒氣ふせき可申と被存候右之通に被遊候而  
母上被召上候様奉存候必御小ようなとに夜分之御出は有之間敷候もちの  
にくたし候は至ありういに宜候間とくに相成候義は有之間敷と奉存候  
御こゝろみ被遊候様奉存候され共玉子酒など被召上候は、其かた可宜哉  
御小用之義は決るもちの方御遠く可有御座候○相川の二町目之湯屋之亭  
主夜分遅く歸り候處臺所に幼年之乞食などのことくさて乞食ともいひ兼